

長崎県芦辺町文化財調査報告書 第7集

# 壹岐 鳴分寺 II

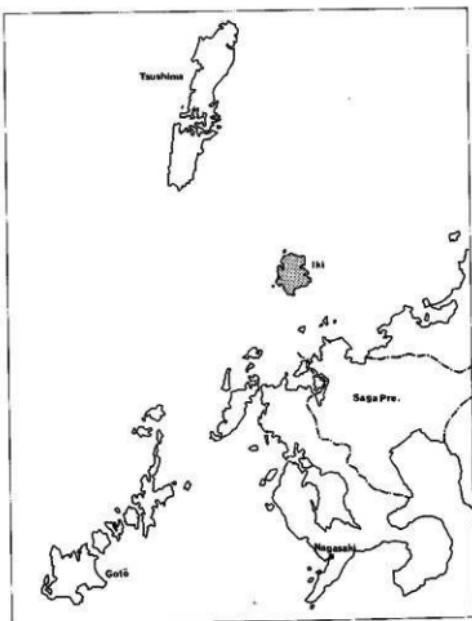
1993

長崎県芦辺町教育委員会

長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

題字 兵衛 萱苑氏

## 壱岐鳴分寺跡発掘調査報告書 II



長崎県芦辺町教育委員会

## 序 文

芦辺町は、壱岐島の北東部に位置し、中心部の芦辺港は、壱岐－博多航路の最短距離（67km）にあります。本町には、全国的にも有名な弥生時代の原の辻遺跡をはじめ、数多くの古墳が散在すると共に、国分寺跡（島分寺跡）・安国寺等文化遺産が数多く残っており、「歴史と文化」の町として進展している所以であります。

なかでも「壱岐国分寺跡」は壱岐島の中心に位置し、周辺には九州でも最大級の「鬼の窟古墳」を始め、40数基の古墳があり、国分を中心に地域社会が形成されていたことがうかがえます。

当寺跡には、古くから瓦片や礎石が見られていたため、長崎県の文化財の指定を受け、昭和62年度より、平成2年度まで4ヶ年間、建築時代や寺域を確認するため調査を実施しました。その結果、東西及び北側の寺域は確認できましたが、南限及び伽藍配置は確認できず、更に2ヶ年延長して調査しました。

2ヶ年の調査により、基壇を持つ建物跡が新たに1棟、計3棟確認でき、その位置関係は二等辺三角形に相当するが、この建物跡がどんな性格のものであったか、今後の検討に俟たねばなりません。また、いまだに南限及び付属建物の位置が確認できないため、更に2ヶ年間延長して確認を図りたい所存であります。

最後に、調査及び中間報告書の発刊にあたり有益な指導をいただいた文化庁、奈良国立文化財研究所、福岡大学人文学部、長崎県教育庁文化課並びに調査に御協力をいただいた、土地所有者に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成5年3月

芦辺町教育長 野元茂生

## 例　　言

- 一 本書は平成2年度から平成4年度にかけて国・県の補助を受けて実施した佐岐橋分寺の範囲確認調査の結果報告書である。
- 二 昭和62年から平成元年度までの範囲確認調査の結果についてはすでに刊行済みであるが、それに先立つ緊急調査として実施した町道拡幅に伴う調査結果については本書に収録する。
- 三 調査は芦辺町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁文化課が担当した。
- 四 本書の執筆は各項目文末に記したが、基本的に土器を町田、本田が担当し、それ以外を高野が担当した。
- 五 遺物の実測については、それぞれ各担当が行なったが、遺物の写真撮影は町田・本田による。
- 六 本書の編集責任は高野にある。

## 本文目次

### I 序 説

一 調査経過.....	1
二 遺跡の地理的歴史的環境.....	5

### II 遺跡の調査

一 緊急調査.....	15
二 第4次調査.....	20
三 第5次調査.....	26
四 第6次調査.....	30

### III 出土遺物

一 土 器.....	33
二 その他の遺物.....	45
三 瓦.....	46

### IV まとめ.....

### 付章 塙岐國分寺跡出土瓦片科学分析報告.....

## 挿 図 目 次

Fig. 1	遺跡位置図	6
Fig. 2	周辺遺跡分布図	7
Fig. 3	鬼の窟古墳（上）・笛塚古墳（下）石室比較図	8
Fig. 4	周辺地形図（座標系 I）	14
Fig. 5	一次・二次調査トレンド配置図	15
Fig. 6	TP 2 平面図	16
Fig. 7	TP 2 壁面図	17
Fig. 8	TP 6 土壙平面図	18
Fig. 9	TP 6 土堤断面図	18
Fig. 10	TP 8・TP 9・TP 10 トレンド配置図（1/300）	19
Fig. 11	TP 10 池様構造実測図（1/120）	19
Fig. 12	TP 29 遺構実測図	20
Fig. 13	TP 30 (SB 7) 遺構実測図	21
Fig. 14	TP 30 東側拡張区南壁	22
Fig. 15	TP 30 西側拡張区南壁	22
Fig. 16	TP 30 南側拡張区西壁土層断面図	22
Fig. 17	試掘拡配図	23
Fig. 18	TP 32 遺構配置図	25
Fig. 19	TP 33 (SB 8) 平面実測図（1/80）	26
Fig. 20	TP 33 北壁・西壁実測図（1/40）	27
Fig. 21	TP 34 (SB 9) 平面実測図（1/80）	28
Fig. 22	TP 36 平面・壁面図	29
Fig. 23	TP 37 平面実測図	30
Fig. 24	TP 37 西側拡張区土壙石垣部分実測図	30
Fig. 25	TP 37 西側拡張区北壁面上土層断面図（1/100）	31
Fig. 26	TP 38 平面実測図	32
Fig. 27	TP 38 南壁土層断面図	32
Fig. 28	TP 6 (SA 1) 2層出土土器	33
Fig. 29	TP 6 3層出土土器	33
Fig. 30	TP 29 2層出土土器	34
Fig. 31	TP 29 3層出土須恵器	35
Fig. 32	TP 29 3層出土土師器	36

Fig. 33	T P29 3層出土陶器・青磁類 .....	36
Fig. 34	T P30 Pit 3出土土器 .....	37
Fig. 35	T P30 機乱・耕作土出土土器 .....	38
Fig. 36	T P30 2層出土土器 .....	38
Fig. 37	T P32 2層出土土器 .....	38
Fig. 38	遺跡表面探集資料 .....	39
Fig. 39	T P33 床直上出土土器 .....	40
Fig. 40	T P33 柱1・柱6 .....	40
Fig. 41	T P33 瓦溜出土土器 .....	40
Fig. 42	T P33 2・3・4層出土土器 .....	41
Fig. 43	T P34 2層出土土器 .....	41
Fig. 44	T P34 Pit 25・Pit 27出土土器 .....	41
Fig. 45	T P36 2層出土土器 .....	42
Fig. 46	T P37 出土土器 .....	44
Fig. 47	T P38 Pit 5出土土器 .....	44
Fig. 48	T P38 1層出土土器 .....	44
Fig. 49	T P38 2層出土土器 .....	44
Fig. 50	その他の遺物 .....	45
Fig. 51	T P36 2層出土遺物 .....	45
Fig. 52	T P29 2層出土瓦実測図(1/4) .....	46
Fig. 53	T P29 3層出土瓦実測図(1/4) .....	47
Fig. 54	T P30 表土瓦実測図(1/4) .....	48
Fig. 55	T P30 柱穴内及び2層出土瓦実測図(1/4) .....	49
Fig. 56	T P31・T P32 出土瓦実測図(1/4) .....	50
Fig. 57	軒丸瓦実測図(1/2) .....	50
Fig. 58	壱岐名勝図誌に見える壱岐鶴分寺跡 .....	53
Fig. 59	壱岐名勝図誌に見える壱岐鶴分寺跡 .....	53
Fig. 60	遺構配置図(1/400) .....	55
Fig. 61	壱岐名勝図誌記載石 .....	57
Fig. 62	遺構別出土遺物時期変遷図 .....	58
Fig. 63	瓦焼場周辺採取の粘土(試料番号4)のX線回折試験結果 .....	72

## 表 目 次

- Tab. 1 周辺遺跡地名表
- Tab. 2 周辺遺跡地名表
- Tab. 3 周辺遺跡地名表
- Tab. 4 周辺遺跡地名表
- Tab. 5 地区別瓦片出土表
- Tab. 6 各区出土瓦計測表
- Tab. 7 瓦胎土分析試料一覧および分析項目
- Tab. 8 X線回析結果

## 図 版 目 次

- PL. 1 TP 2, TP 6区
- PL. 2 TP 8, TP 9, TP 10区
- PL. 3 TP 29, TP 31, TP 32区
- PL. 4 TP 30 (SB 7)
- PL. 5 TP 30区拡張区
- PL. 6 TP 33 (SB 8)
- PL. 7 TP 34, TP 36区
- PL. 8 TP 38, TP 37区
- PL. 9 出土土器
- PL. 10 出土土器
- PL. 11 出土七器
- PL. 12 出土土器, 石製品
- PL. 13 出土瓦
- PL. 14 出土瓦
- PL. 15 出土瓦

# I 序 説

## 一 調査経過

奄岐芦辺町では、町内にある古代の遺跡を整備活用して今後の歴史教育や観光に役立てようとする将来計画を持っている。

これまで、大塚山古墳、ガジヤバ古墳、鬼の窟古墳等3基の古墳について積極的に整備や復元作業を行なってきたが、鷦分寺の整備は最も長期計画の事業ということができる。最終的には町内にある鬼の窟古墳に代表される大古墳群や有名な原の辻遺跡などを結ぶ歴史ロードとも言うべきコースを設定する予定であると言う。

奄岐鷦分寺に関しては山口麻太郎氏による研究がある。古文献の解釈と明治初期の字図の検討、そして礎石と表採瓦の実見から、芦辺町国分本村触中野第1348番地を中心とする区域を奄岐鷦分寺跡に比定された。これらの実績からこの区域は昭和49年(1974)「奄岐国分寺跡」とし長崎県史跡として指定されている。

この場所が鷦分寺として比定されるにいたった理由として最も大きな要因は、古文書に記された事項と、それを証明する残存する礎石と表採された瓦の存在であろう。

表採瓦は前回報告書にも掲載した資料であるが、鷦分寺を考える上で重要と思われる所以再度掲載して説明を加えておく。

1、2は大正年間に採集された軒平瓦である。何れも外区と脇区に珠文を持ち、瓦當に均整唐草文を配している。採集品には軒丸瓦も1点含まれているが、瓦當面の文様が識別出来ない程度減しているため図示していない。2は現在県立美術博物館が所有しているが1は所在不明である。摩滅した軒丸瓦は郷ノ浦町の奄岐郷土館に保管展示してある。

礎石は現在地には9個しか残っていないが、あと2個は中野触にある現国分寺の門の礎石として運ばれている他、隣接する国片主神社に1個ある。また東側山林にある墓地の中にも2個確認されているから都合14個が残存することになる。

それでも寛保2年に編纂された『奄岐國統風土記』には「六十余個」とあり、幕末編纂の『奄岐名勝図誌』には「廿余個」とあるから当初からすると凡そ五分の一に減じていることになる。しかしながら、少ないながらも礎石が残存していることや古代瓦が採集されている事実は当該地が旧鷦分寺跡の可能性が高いことを示しているものと言える。

以上のような経過を経た結果、この奄岐鷦分寺の調査は、国と県賛の補助を受けて昭和62年度から始まった。そして今年度まで6次の調査を行なった訳であるが、これまで確認した各種遺構の性格を考える必要上、さらに平成5年度も継続調査を実施する予定である。

- 註1 長崎県芦辺町教育委員会 1989 「大塚山古墳—環濠整備事業報告書—」
- 註2 長崎県芦辺町教育委員会 1988 「カジヤバ古墳」 長崎県芦辺町文化財調査報告書 第3集
- 註3 長崎県芦辺町教育委員会 1990 「鬼の窟古墳」 長崎県芦辺町文化財調査報告書 第4集
- 註4 山口麻太郎 1977 「壺岐」『新集 国分寺の研究 第5巻下 西海道』所収
- 註5 長崎県芦辺町教育委員会 1991 「壺岐編分寺！」 長崎県芦辺町文化財調査報告書 第5集
- 註6 「壺岐統風上記」 寛保2年(1742)
- 註7 後藤正恒・古野尚盛 文久元年 1861 「壺岐名勝圖誌」



### 調査の組織

緊急調査 昭和62年(1987) 7月6日～7月15日, 8月4日～8月12日

調査総括 野元茂生 | 芦辺町教育委員会教育長

田口唯雄 同 社会教育主事(現佐世保市立広田中学校)

調査員 高野晋司 長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事

川道 寛 同 指導主事(現県立西陵高等学校教諭)

第1次調査 昭和62年(1987) 9月1日～9月11日, 9月16日～9月28日

調査総括 野元茂生 | 芦辺町教育委員会教育長

田口唯雄 同 社会教育主事(現佐世保市立広田中学校)

調査員 高野晋司 長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事

川道 寛 同 指導主事(現県立西陵高等学校教諭)

第2次調査 昭和63年(1988) 9月29日～10月7日, 10月10日～10月24日

調査総括 野元茂生 | 芦辺町教育委員会教育長

長嶋邦昭 同 教育次長

調査指導 河原純之 文化庁記念物課主任調査官

宮本長二郎 奈良国立文化財研究所建造物研究室長

小田富士雄 福岡大学人文学部教授

調査員 高野晋司 長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事

伴耕一朗 同 文化財調査員

第3次調査 平成元年(1989) 9月4日～9月14日, 9月18日～9月30日

調査総括 野元茂生 | 芦辺町教育委員会教育長

長嶋邦昭 同 教育次長

調査指導 山崎信二 文化庁記念物課文化財調査官

小田富士雄 福岡大学人文学部教授

調査員 高野晋司 長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事

伴耕一朗 同 文化財調査員

**第4次調査 平成2年（1990）9月18日～9月28日**

調査総括 野元茂生 芦辺町教育委員会教育長  
長嶋邦昭 同 教育次長  
吉田貞光 同 社会教育指導員  
調査指導 岡村道雄 文化庁記念物課文化財調査官  
小田富士雄 福岡大学人文学部教授  
小沢 肇 奈良国立文化財研究所  
調査員 高野晋司 長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事  
町田利幸 同 文化財保護主事

**第5次調査 平成3年（1991）10月7日～10月16日、10月20日～10月25日**

調査総括 野元茂生 芦辺町教育委員会教育長  
長嶋邦昭 同 教育次長  
吉田貞光 同 社会教育指導員  
調査指導 小沢 肇 奈良国立文化財研究所  
横田賛次郎 九州歴史資料館  
調査員 高野晋司 長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事  
浦田和彦 同 文化財保護主事（現県立波佐見高等学校）

**第6次調査 平成4年（1992）9月24日～10月2日**

調査総括 野元茂生 芦辺町教育委員会教育長  
長嶋邦昭 同 教育次長  
吉田貞光 同 社会教育指導員  
調査指導 井上和人 文化庁記念物課文化財調査官  
調査員 高野晋司 長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事  
本田秀樹 同 文化財保護主事

## 二 遺跡の地理的歴史的環境

対馬と共に九州本土と朝鮮半島の間に飛び石状に展開する壱岐島は東西約15km、南北約17km、面積約140km<sup>2</sup>、行政的には現在4町に分かれ人口約3万8千人を数える。弥生時代には「一支國」という国名と場所が一致する数少ない国として『魏志倭人伝』に登場する。その中の記述「…至一大國，官亦日卑狗，副日卑奴母離，方三百里，多竹木叢林，有三千許家，差有田地，耕田猶不足食，亦南北市羅…」は当時の壱岐の状況を僅か45字で端的に説明している。名文である。但し、現在は県内に於ける有数の穀倉地帯となっている。

島は全体が低平な溶岩台地であり、起伏は少なく、最高所でも僅かに213mを測るにすぎない。全島が険峻な対馬と好対照をなしている。島の基盤は第三紀層で、玄武岩がその表面を覆う。島の要所要所には玄武岩の岩塊が見られ、弥生時代以降、箱式石棺や古墳の石室材としてよく利用されている。

10世紀頃の壱岐は『和名類聚抄』によれば、壱岐郡と石田郡に分かれ、壱岐郡には風本、名須、那賀、田河、鯨伏、潮南、伊宅、伊周駅家の八郷、石田郡には石田、物部、時通駅家、笠原、治津の五郷が記されている。壱岐鷲分寺が位置する場所は、この中の那賀郷に属するものと思われる。この地区は壱岐島のほぼ中央部に位置し、この地点からはどの方角にも車なら20分程で到達する。この周辺は後述する如く壱岐に於ける一大古墳密集地帯であり、古代においても同様に交通の要衝であったものと思われる。

周辺遺跡に目を転じて見よう。

Fig. 2 に示した如く、鷲分寺を含むこの一帯は壱岐に於ける古墳の最も集中する場所である。壱岐には且て338基があったという。現在確認している古墳の数はほぼ崩壊したものまで含めて256基である。掲載した方4 kmの地図の中には112基の古墳が含まれている。壱岐で築造された古墳の半数がこの区域に集中していることになる。

時代を追って遺跡の説明をしておきたい。

掲載した地図内には旧石器時代の遺跡は含まれていない。壱岐においては昭和50年までは明瞭な旧石器時代の遺跡は知られていなかったが、県教委による「原の辻遺跡」の範囲確認調査によって、ナイフ形石器や台形石器などが新たに発見された。平成2年度の壱岐鷲分寺の調査でも、1点だけナイフ形石器が出土している。寺域として利用される前にはその時期の遺跡があったのかも知れない。

縄文時代の遺跡も、この地図内には含まれない。壱岐では縄文時代遺跡もまた希薄であり、昭和52年までは遺跡台帳にもその記載は1か所のみであった。現在ではある程度知られるようになったが、まだ調査例が少なく内容把握が十分とは言えない。

壱岐の遺跡が脚光をあびるのは著名な「原の辻遺跡」や「カラカミ遺跡」などの二大弥生遺跡が調査されたことによる。昭和23年以来の東亜考古学会や九学会による数回の調査と昭和49年以降の長崎県教育委員会による範囲確認調査は、この両遺跡が壱岐の弥生時代を代表する大遺跡であることをさらに証明した。特に原の辻遺跡は、豊富な鉄器や舶載鏡などを持つなど、一支國の王墓を語るのにふさわしい遺物内容を持っている。

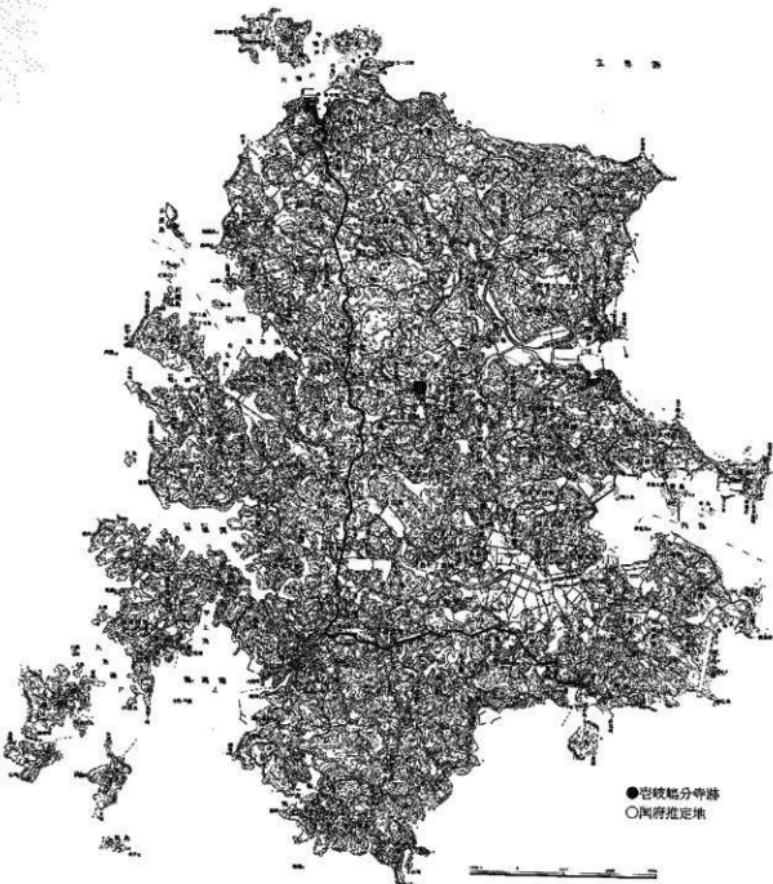
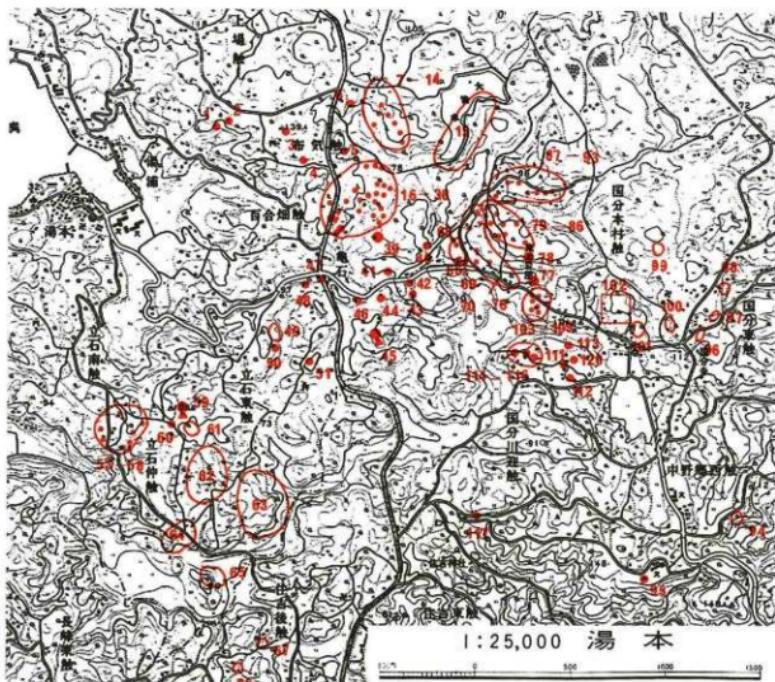


Fig. 1 遺跡位置図

古墳時代の遺跡は多いが、弥生時代から連続するわけではない。これまで確認された例では5世紀になって初めて高塚古墳が築かれる。その中で芦辺町大塚山古墳<sup>註7</sup>は5世紀代に築かれた数少ない古墳として昭和62年県史跡として指定された。

6・7世紀代になると古墳は飛躍的に増加する。Fig. 2に含まれる古墳の大部分はこの時期の所産であろう。また7~14の布氣古墳群、16~38の百合畠古墳群、70~75山ノ神古墳群、79~86百田頭古墳群、87~93釜蓋古墳群など群集墳が顕著となる。

平成元年から平成3年度にかけて県教育委員会が実施した県内古墳詳細分布調査の結果では、巣岐



このように、県下で最大規模の古墳は殆ど、この区域に集中している。本書で報告する巻紋鷦<sup>セイ</sup>分寺は、これらの古墳群から東へ僅か500mの地点に位置する。現況は標高100m前後のほぼ平坦地であるが、北側の山林を多少削平した痕跡があり、この結果、当該地には北側山林を背に東西60m、南北70m程の平坦地が生じている。寺域を確保するための工事を行なったものと思われる。当該地はもともと緩やかな勾配を持つ山林であるが、澗水には恵まれており、2か所に豊富な水量を持つ井戸が掘られている。この地の東側には101巻紋直の居館跡が隣接する。60m四方の敷地の回りには深い空堀を巡らす。古代豪族である巻紋直の居館跡に推定されている。現在の国片主神社である。

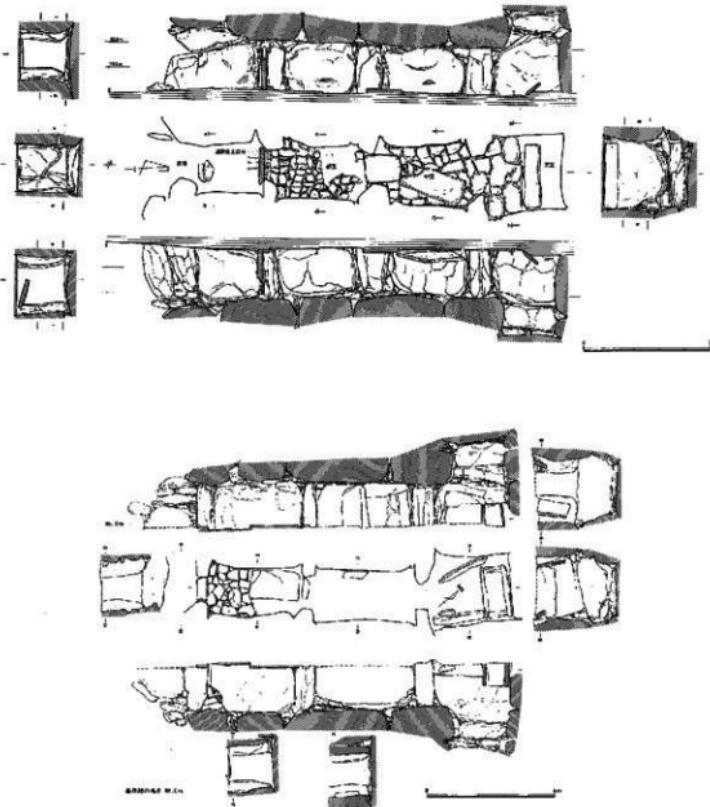


Fig. 3 鬼の唐古墳（上）、蓑塚古墳（下）石室比較図

- 註1 池邊 勝 1981 「和名類聚抄都里釋名考証」 吉川弘文館
- 註2 「壱岐國統風土記」寛保2年(1742)
- 註3 長崎県教育委員会 1976 「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書 第26集
- 註4 長崎県教育委員会 1977 「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書 第31集
- 註5 長崎県教育委員会 1985 「カラカミ遺跡」勝本町文化財調査報告書 第3集
- 註6 水野精一・岡崎敬 1959 「壱岐原の辻跡生式遺跡調査概報」「対馬の自然と文化」所収
- 註7 壱岐郡文化財調査委員会 1983 「大塚山古墳」
- 芦辺町教育委員会 1987 「大塚山古墳」長崎県芦辺町文化財調査報告書 第2集
- 芦辺町教育委員会 1989 「大塚山古墳—環境整備事業報告書—」など
- 註8 長崎県教育委員会 1992 「県内古墳詳細分布調査報告」長崎県文化財調査報告書 第106集  
笹塚古墳出土の馬具などの出土遺物については現在保存処理中。
- 註9 芦辺町教育委員会 1990 「鬼の窟古墳」長崎県芦辺町文化財調査報告書 第4集
- 註10 芦辺町教育委員会 1991 「壱岐島分寺 1」長崎県芦辺町文化財調査報告書 第5集

Tab. 1 周辺遺跡地名表

番号	遺 跡 名	所 在 地	種 別	時 代	遺 様 ・ 遺 物	文 献
1	水ノ元1号墳	勝本町布気触字水ノ元	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室	1
2	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	小さな墳丘が痕跡的に残る	1
3	明神山1号墳	〃 〃 字明神	〃	〃	円墳、竪穴式石室？ 大半は崩落	1
4	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
5	掛木古墳	〃 〃 字掛木	〃	〃	円墳、横穴式石室 玄室に刻抜式 象形石棺あり	1・3
6	道元古墳	〃 〃 字中尾	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
7	布気古墳群1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	横穴式石室 半壇 石室の一部が残る	1
8	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室 繰刻？	1
9	〃 3号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳	1
10	〃 4号墳	〃 〃 〃	〃	〃	積石塚	1
11	〃 5号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
12	〃 6号墳	〃 〃 〃	〃	〃	横穴式石室	1
13	〃 7号墳	〃 〃 〃	〃	〃	横穴式石室	1
14	〃 8号墳	〃 〃 〃	〃	〃	石室はない	
15	大清水池遺跡	〃 〃 亭原野田・森尻	包含地	古・奈	奈良時代の製塙土器、須恵器	3
16	百合畠古墳群1号墳	〃 百合畠触	古 墓	古 墓	前方後円墳	1・3
17	〃 2号墳	〃 〃	〃	〃	円墳	1
18	〃 3号墳	〃 〃	〃	〃	前方後円墳？	1
19	〃 4号墳	〃 〃	〃	〃	封土なし 横穴式石室	1
20	〃 5号墳	〃 〃	〃	〃	円墳？ 横穴式石室	1
21	〃 6号墳	〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
22	〃 7号墳	〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
23	〃 8号墳	〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
24	〃 9号墳	〃 〃	〃	〃	円墳	1
25	〃 10号墳	〃 〃	〃	〃	須恵器出土？	1
26	〃 11号墳	〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
27	〃 12号墳	〃 〃	〃	〃	円墳、竪穴式石室	1
28	〃 13号墳	〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
29	〃 14号墳	〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室？	1
30	〃 15号墳	〃 〃	〃	〃	前方後円墳？	1
31	〃 16号墳	〃 〃	〃	〃	前方後円墳？	1
32	〃 17号墳	〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
33	〃 18号墳	〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
34	〃 19号墳	〃 〃	〃	〃	円墳	1
35	〃 20号墳	〃 〃	〃	〃	前方後円墳	1・3
36	〃 21号墳	〃 〃	〃	〃	円墳	1
37	〃 22号墳	〃 〃	〃	〃	円墳	1

Tab. 2 周辺遺跡地名表

番号	遺 跡 名	所 在 地	種 別	時 代	遺 構 ・ 遺 物	文 献
38	百合畠古墳群23号墳	勝本町百合畠触	古 墳	古 墳	円墳、横穴式石室	1
39	筆塚 古 墳	II II 字筆塚	II	II	円墳、横穴式石室	
40	城 山1号墳	II II 字城山	II	II	円墳、横穴式石室	1
41	亀 石9号墳	II II 字筆塚	II	II	円墳、横穴式石室	1
42	双 立1号墳	II 立石東触字双塚	II	II	円墳、横穴式石室	1
43	II 2号墳	II II II	II	II	円墳、横穴式石室	1
44	亀 石8号墳	II II II	II	II	封土なし	1
45	双 六 古 墳	II II 字双六	II	II	前方後円墳、横穴式石室	
46	人 罩 古 墳	II II 字双塚	II	II	円墳、横穴式石室	1
47	亀 石4号墳	II II 字茶屋元	II	II	円墳、横穴式石室	1
48	II 5号墳	II II II	II	II	円墳、石室は崩壊	1
49	高 峰 遺 跡	II II 字大石	包含地	弥・古	弥生土器、土師器、黒曜石剝片、鹿製石斧	3
50	高 峰 古 墳	II II II	古 墳	古 墳	円墳、箱式石棺、勾玉1、碧玉製管玉、白玉1、小玉	1
51	大 石 古 墳	II II II	II	II	封土なし、石室の一部が残る 金環	1
52	亀 石1号墳	II II II	II	II	円墳、半分削られる	1
53	若宮神社古墳	II 立石仲触字立石	II	II	円墳、箱式石棺、鐵(鉢甲)、商刀、土器、人骨	2・3
54	一本松古墳	II II II	II	II	横穴式石室 石室のみ残る	1
55	立 石2号墳	II II II	II	II	円墳、横穴式石室 半壊	1
56	II 1号墳	II II II	II	II	円墳、横穴式石室 半壊	1
57	布 代2号墳	II II 字布代	II	II	円墳、横穴式石室、石室不明、削平	1
58	II 1号墳	II II II	II	II	円墳、横穴式石室	1
59	対馬塚古墳	II 立石東触字園柳	古 墳	古 墳	前方後円墳、横穴式石室	
60	匹 合 古 墳	II 立石仲触字立石	II	II	円墳、墳丘が残る	3
61	牛 神 遺 跡	II 立石東触字園柳	積 墓	弥 生	甕棺、箱式石棺	1
62	園 柳 遺 跡	II II II	II	先～古	甕石刃核、劍片鐵、骨角器、敲石、弥生土器、須恵器、石錐	3
63	カラカミ遺跡	II II 字カラカミ 園柳	包含地	弥 生	甕棺、V字溝、須恵器、弥生土器、土師器、陶質土器、銅鏡、骨角器	4
64	木 場 遺 跡	II 立石仲触字諒伏	積 墓	II	甕棺、箱式石棺	3
65	経 ノ 辻 遺 跡	II II 字椿多	包含地	II	V字溝、弥生土器	4
66	下 松2号墳	芦辺町住吉後触字下松	古 墳	古 墳	円墳、横穴式石室 半壊	1
67	II 1号墳	II II II	II	II	円墳、石室は後道のみ残る	1
68	柴 取 神 迂2号墳	II 国分本村触字仮塚岡分	II	II	円墳、ゴルフ場建設のため完全消滅	1
69	II 4号墳	II II II	II	II	円墳、横穴式石室	1
70	山 ノ 神 古 墳	II II II	II	II	円墳、横穴式石室 ほぼ原形	1
71	山 ノ 神 1号墳	II II 字京塚岡分	II	II	前方後円墳、横穴式石室玄室のみ残る	1

Tab. 3 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所 在 地	種 別	時 代	遺 構・遺 物	文 献
72	山ノ神2号墳	国分本村触字京塚国分	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室 道路で半壊	1
73	3号墳	国分本村触字字仮冢	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室 倉庫で半壊	1
74	4号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳、崩壊している	1
75	5号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室	1
76	小オニヤ古墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	大部分壊滅	1
77	鬼の窟古墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室 塚枝最大円墳	1・6
78	兵瀬古墳	国分本村触字兵瀬	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室 周溝あり	1・3
79	白田頭1号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳	1
80	2号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳	1
81	3号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳	1
82	4号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室 半壊	1
83	5号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室 船の線刻	1
84	6号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室 ほぼ完全	1
85	7号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳？ 小さな石で構築(ドーム状)	1
86	8号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	低平な封土 壱穴式石室？	1
87	釜蓋1号墳	国分本村触字釜蓋国分	古 墓	古 墓	横穴式石室	1
88	2号墳	国分本村触字兵瀬国分	古 墓	古 墓	円墳、封土消失	1
89	3号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室 須恵器出土	1
90	4号墳	国分本村触字国分	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室	1
91	5号墳	国分本村触字兵瀬	古 墓	古 墓	円墳、両方削平	1
92	6号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室	1
93	7号墳	国分本村触字	古 墓	古 墓	円墳 墳丘半分消失、横穴式石室 半分壊滅	1
94	通触遺跡	中野郷西触	包含地	弥・古	弥生土器、須恵器、石斧、黒曜石、近世陶磁器	1
95	ムギカミ神社古墳	国分東触	古 墓	古 墓	円墳？ 横穴式石室 天井石露出半壊状態	1
96	大谷第2遺跡	国分東触	包含地	弥・古	弥生土器、土師器、須恵器	3
97	第1遺跡	国分東触	包含地	弥・古	弥生土器、土師器、須恵器	3
98	月読神社前遺跡	国分東触	包含地	弥・古	弥生土器、土師器、須恵器、青磁	3
99	館遺跡	国分本村触字館山	古 墓	古・奈	たたら遺構、土師器、鐵片	5
100	大谷第3遺跡	国分東触	古 墓	古・鎌	黒曜石、弥生土器、土師器、須恵器、高麗青磁、鐵	3
101	壱岐氏居館跡	国分西触	包含地	奈・平	空窓、土壘	3
102	壱岐島分寺跡	国分本村触	寺 路	奈・平	基壇、礎石、瓦窓、軒丸瓦、布目瓦、須恵器、土師器等	8・本書
103	京塚山1号墳	国分本村触	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室	1
104	京塚山2号墳	芦辺町国分本村触同分	古 墓	古 墓	円墳、封土僅かに残存、壹穴式石室 石材一部露出	1

Tab. 4 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所 在 地	種 別	時 代	遺構・遺物	文 献
105	京 塚 山 3号墳	芦辺町国分本村鍾国分	古 墳	古 墳	円墳、堅穴式石室	1
106	〃 4号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、石室の一部が露出	1
107	〃 5号墳	〃 〃 〃	〃	〃	封土なし、堅穴式石室	1
108	〃 6号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、封土側かに残る、横穴式石室 半壙	1
109	〃 7号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、堅穴式石室	1
110	小 原 1号墳	〃 国分川迎触	〃	〃	円墳、横穴式石室 石室が見えている	1
111	〃 2号墳	〃 〃	〃	〃	円墳、半壙	1
112	カ ジ ヤ バ 古 墳	〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室 木棺	7
113	大 原 3号墳	〃 〃 字大原	〃	〃	墳丘は残存しない天井石・側石が嵩山	3
114	半 原 3号墳	〃 〃 〃	〃	〃	墳丘・石室とも半壙 石室内から土師器出土	3
115	大 原 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	墳丘は残存しない天井石・側石が露出	3
116	〃 1号塚	〃 〃 〃	〃	〃	墳丘は残存しない一部を削平され てはいるが、石室はほぼ完全	3
117	長 野 古 墳	〃 住吉東触長野上	〃	〃	墳丘東側の一部を削平 墳丘長10m 横穴式石室 天井石が落下	3

文献1 松永康彦 1981 「宍戸島における古墳の現状」『宍戸』15号 宍戸史蹟顕彰会

文献2 小田富士雄 1975 「対馬・宍戸の古墳文化」『東アジア世界における日本古代史講座』

## 第2巻

文献3 長崎県教育委員会 1986 「長崎県遺跡地図」長崎県文化財調査報告書 第87集

文献4 勝本町教育委員会 1984 「カラカミ遺跡」勝本町文化財調査報告書 第3集

文献5 1976年 九州大学調査

文献6 芦辺町教育委員会 1990 「鬼の窟古墳」長崎県芦辺町文化財調査報告書 第4集

文献7 芦辺町教育委員会 1988 「カジヤバ古墳」長崎県芦辺町文化財調査報告書 第3集

文献8 芦辺町教育委員会 1991 「宍戸鶴分寺 1」長崎県芦辺町文化財調査報告書 第5集

文献9 長崎県教育委員会 1992 「県内古墳詳細分布調査報告書」長崎県文化財調査報告書 第106集

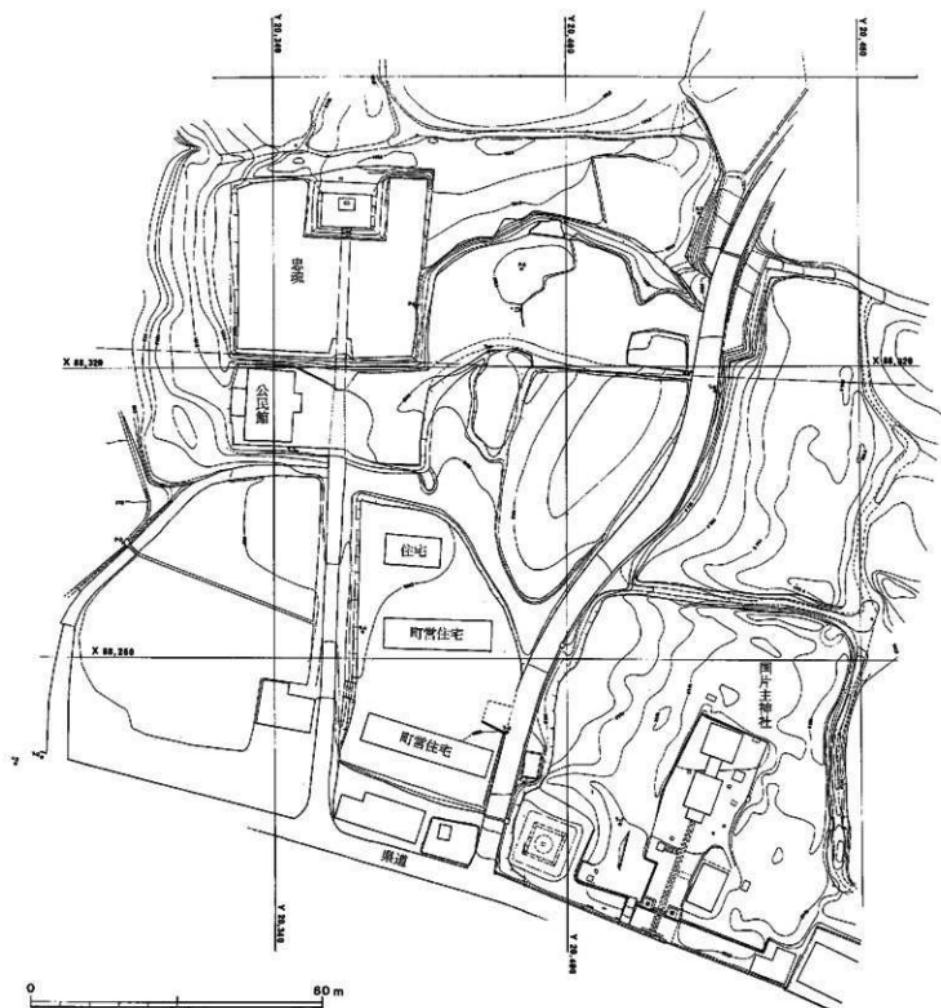


Fig. 4 周辺地形図（座標系 I）

## II 遺跡の調査

壱岐島分寺についてはこれまで6次の範囲確認調査を実施してきたが、前回の報告書では昭和62年の第1次調査から平成元年の第3次調査までの3年分を報告した。テストピットTP11からTP26までである。

今回は平成2年度（第4次調査）から平成4年度（第6次調査）までの報告と、補助事業としての範囲確認調査前に実施した調査の結果について併せて報告したい。

### 一 緊急調査（TP1～TP10）

緊急調査は2度実施した。以下その概要を述べておくが、それらの呼称についてはこれまで報告してきた第1次調査、第2次調査という名称と混乱するのを避けるために単に一次調査、二次調査としておきたい。

#### 一次調査（昭和62年7月6日～7月15日）

町道拡幅工事に伴うものであるが、遺跡の範囲を確認することによって、遺跡保存のための協議資料を得るのが目的の調査であった。なお、壱岐島分寺関係の調査はこれが最初である。

拡幅される町道は現国片神社と壱岐島分寺の間を通る狭い道であるが、北は勝本浦、南は石田の港にいたる旧道にあたるとされる。古代からの交通の要所であろう。

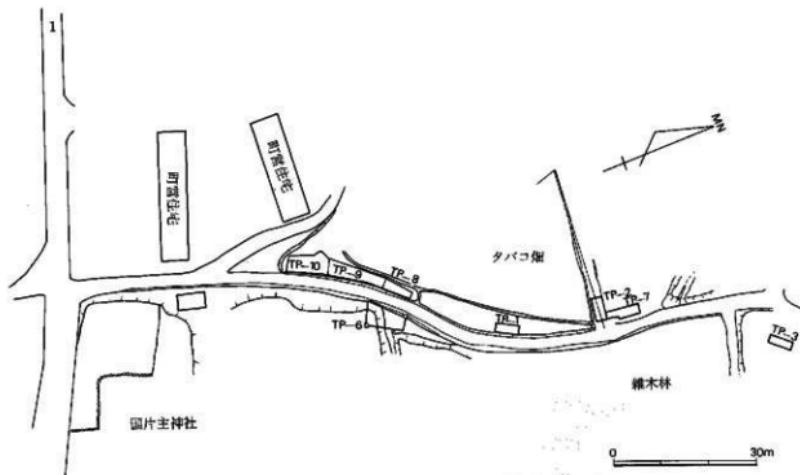


Fig. 5 一、二次調査トレンチ配置図

試掘調査地点は町道改良工事区域の内、巣岐国分寺跡、巣岐氏居館跡・館跡として周知された区域ならびにその隣接地にあたり、この区域に6ヵ所のトレンチを設定した。(Fig. 5)

その結果、TP1、TP3、TP4、TP5の4ヵ所については遺構・遺物共に出土しないことが判明したが、TP2において柱穴が多数発見された他、TP6において保存状態の良好な空堀と土壙を確認し、特に土壙中から須恵器を中心とした遺物が出土することが分かった。

以上の結果をもとに、関係機関と保存のための協議をした結果、①TP2で確認した遺構については道路を東側にずらすことで保存する。②巣岐氏居館跡空堀・土壙については道路を西側にずらすことによって保存を計る。③その代わり道路西側にかかる低湿地を代わりに緊急調査をするということで合意した。

この低湿地は明治初年の字図には見当たらないことから、古くからあってその時期には埋没していたのか、あるいはその後に新しく作られたものであるかは分からぬが、巣岐<sup>ニ</sup>國分寺の研究をされた山口麻太郎氏は「…國分寺の境を作る池泉のようなものではなかったかと思う。」と推定されている。

註1 山口麻太郎 1938「巣岐國分寺の研究」「考古学論叢別冊・國分寺の研究」所収  
1977「巣岐」「新修國分寺の研究 第五卷下 西海道」所収

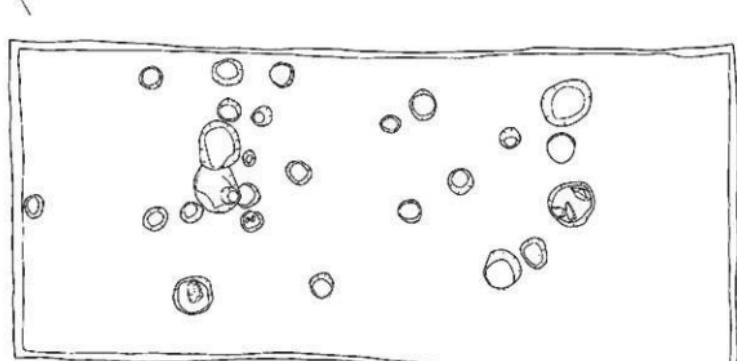


Fig. 6 TP2 平面図

以下、調査結果について報告しておく。

### TP 2 (Fig. 6, 7)

史跡指定地に至る東西方向の未舗装の道路に設定したトレンチである。当初東西5m南北2mの規模で設定したが、柱穴が集中して出土したため南側へ若干拡張した。

トレンチの東側は道路によって攤丸気味であったが、表土下25cm程ですぐ岩盤にあたるなど、堆積層は薄い。柱穴はこの岩盤を切り込んで掘られており、その厚さは深い柱穴で20cm程度、薄い柱穴では10cm程度にすぎない。

トレンチ内での柱穴には規則性が認められないため、どのような規模の建物跡であるかは不明であるが、一応SB10としておく。

出土遺物としては土師器が多いが、細片が多く図示し得る程の資料に乏しい。僅かに床面にはりついた状況で出土した土師器の高台付き皿が太宰府編年から判断すると9世紀半ころに比定できる。

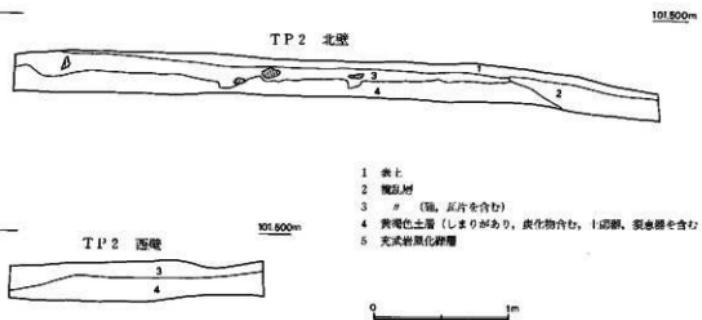


Fig. 7 TP 2 壁面図

### TP 6 (Fig. 8, 9)

奄岐直の居館跡に比定されている場所で、空堀と土塁の北西隅の部分にあたる。

保存のための基礎資料を得るために、一部深掘りして土塁断面を観察することにした。

その結果、表上を剥いだ段階で土塁上に規則的に配石した遺構が現れた。その配石の40cm程下部には扁平疊の敷石が見られる。土塁を構築するにあたり、地山の上にまず敷石をし、その上に土を盛り上げて、最後に土塁先端部に配石して崩壊を防いだものと思われる。SA1と呼称しておく。

土塁の土盛りは5層に分けられる。1層は腐植土層で10cm程の厚さもない。2層はさらさらした茶褐色の砂質層で、本来配石はこの層の上に巡らされていたものである。中に土師器や須恵器を含む。

3層は黒褐色土層で、扁平疊はこの層の中に含まれ、その間に須恵器が含まれる。

TP 8・9・10区 (Fig. 10)

保存状態が良好な土壌 (SA 1)

を確認したことにより、この部分について保存の方向で県耕地課との協議に入ることになった。その結果、道路は西側に拡幅することになり、その部分について改めて緊急調査を実施することで合意した。

調査区域は、現在道路西側の一段低くなった位置にあたる。以前は溝のような草生地であったらしい。調査はTP 8・9から掘り始め、TP 9で上端幅1.5m、底辺幅1.1m、深さ30cm程の浅い溝を確認した時点での南側延長を追ってTP 10を設定した。なお、その北東方向に延びる溝は現道路下に延びているが、本来道路に沿って作られていたものであろう。

TP 10の地点は、前述した如く現状は溜池様になっており、水草に覆われて全容が不明であった。調査の結果、溜池様の底には厚さ10cm程の

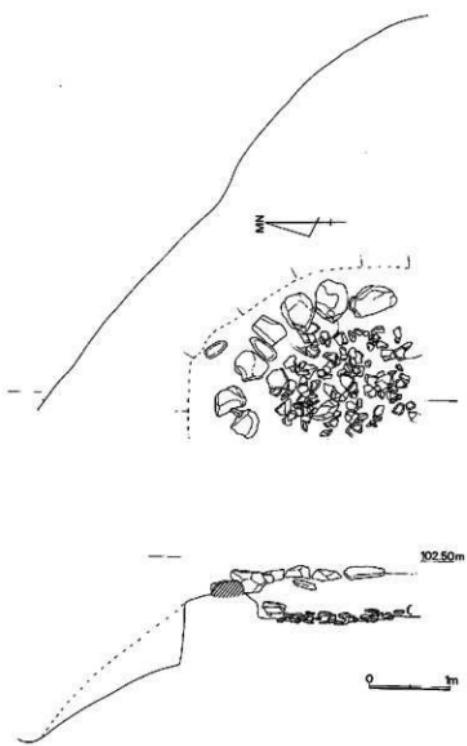


Fig. 8 TP 6 土壌平面図

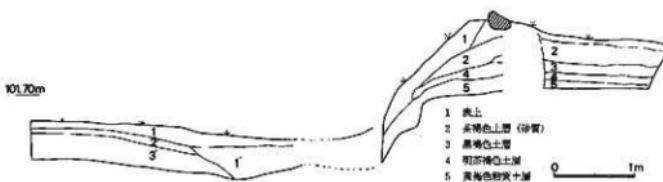


Fig. 9 TP 6 土壌断面図

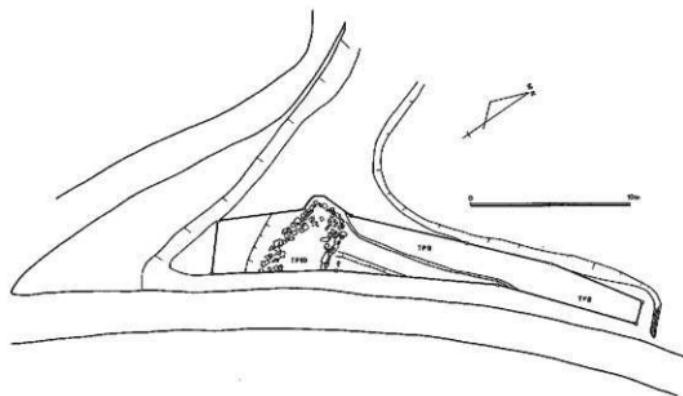


Fig. 10 TP 8, TP 9, TP 10 トレンチ配置図 (1/300)

ヘドロ状の堆積土があり、その下には固い粘土状の貼床があった。水漏れを防ぐための処置であろう。その30cm程下は岩盤である。ここは湧水が多く、排水にかなり時間を要した。

また、当初は不明であったが、溜池の縁の回りには人工的な配石が施されてあることが分かった。

配石は、その南側が道路下になることから全容は不明であるが、長軸をほぼ南北に向けた長方形の遺構である。長さは南北方向が6m以上で東西方向は3m程、深さは1m弱で、上部から階段状に石が配されている。SX 2と呼称しておく。

溜池内は擾乱がひどく、新旧の遺物が混在して出土するために遺構の正確な時期を決定することはできなかったが、北東側TP 9の方向から流れてくる水を溜める目的の遺構であったことは間違いない。

単なる溜め池としては愈が入っているものの、はつきりした性格は分からぬ。

なおTP 9からも遺物は新旧混在して出土したが、瓦片が多く土器類は少ないために、その時期を決定することはできない。



Fig. 11 TP 10 池様遺構実測図 (1/180)

冒頭でも述べたように、第1次範囲確認調査から第3次範囲確認調査までの結果報告は既に刊行済みであるから、以下は第4次調査から第6次調査までの結果報告になる。

#### 第4調査

第4次調査はTP29からTP32までである。

TP29 (Fig. 12・20)

第3次調査まで実施したTP14とTP20のトレーナーにおいて、9間以上の長さを持つ掘立柱からなる造構が確認されたため、西側と南側区域の延長を見るために設定したトレーナーである。

しかしながら、調査の結果では明確な柱穴は少なく、また規則性も認められなかつたことから、これまでの造構に連続する可能性はないものと思われる。

その西側部分は現忠魂碑基壇下まで続くものと推定せざるをえない。

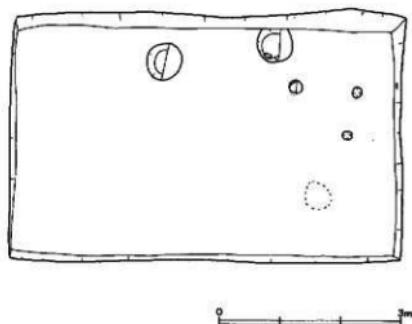


Fig. 12 TP29遺構実測図

TP30 (Fig. 13・14・15・16・20)

地域的に若干小高く残っていた区域で、10m×4mのトレーナーを設定した結果、表土下20cmで建物基壇を確認したため、東西と南側にそれぞれ拡張トレーナーを設定してその延長を見ることにした。

その結果、基壇は8回にわたって突き固められた版築からなることが、電柱跡の掘り方から確認された。また、基壇は特に北東部部分がかなり搅乱を受けているため明瞭さを欠くが、よく残っている東側・西側・南側の断面を参考にして復元すると、基壇上面は東西10.2m(約34尺)、南北11.4m(約38尺)、高さ約60cm(2尺)程度のやや南北に長い建物になるようである。SB7と呼称する。

基壇北側下方には多数の不規則な柱穴が発見されたが、この部分は搅乱が強く、基壇を削って掘られた状況もある。また出土遺物も中世以降の時期ものを含むなど新旧の遺物が混在しており、基壇と直接的に結びつく造構かどうかは慎重な検討を要する。

また、基壇上面は表土から僅か20cm程度であり、またその上面も必ずしも平坦ではないことは、この面が、後世にかなり削られていることが予想される。そのためであろうか、この面からは時期を示す何らかの遺物も発見されなかった。

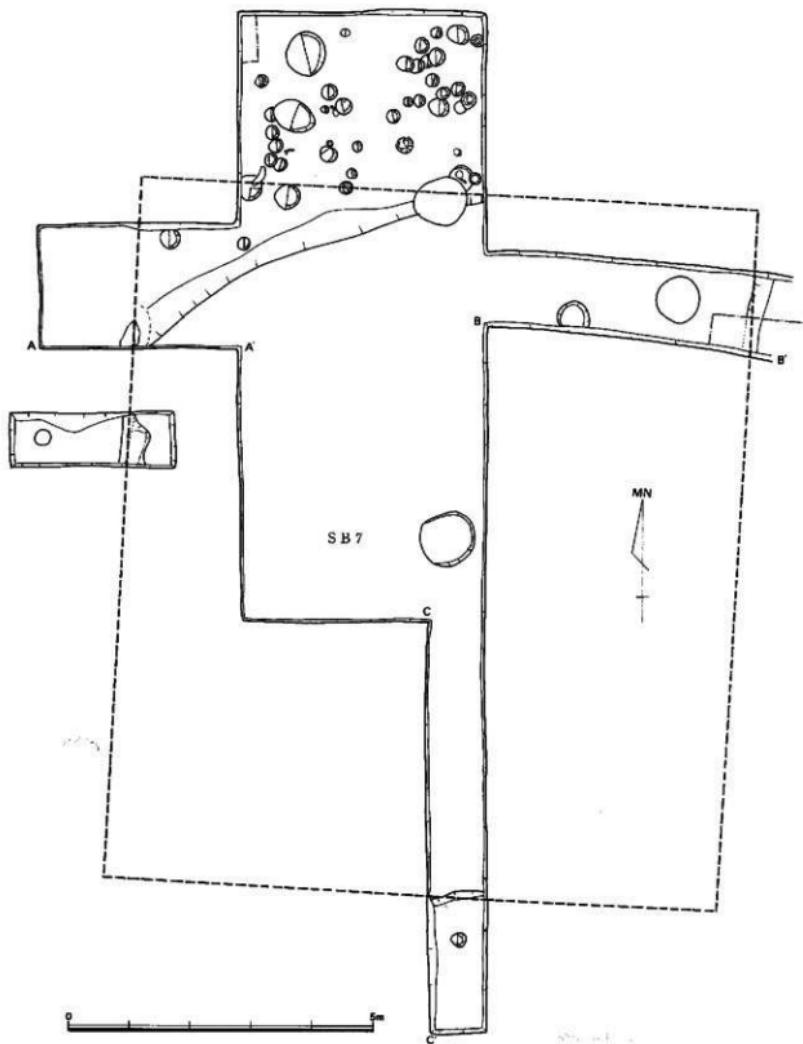


Fig. 13 TP30 (SB7) 遺構実測図

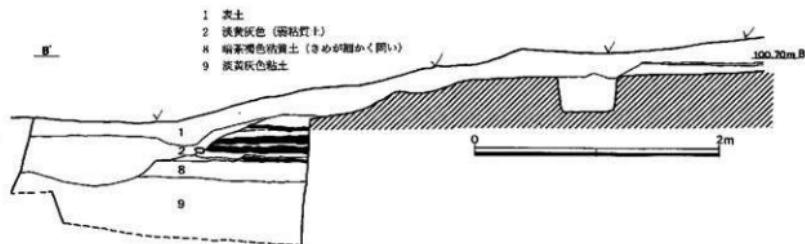


Fig. 14 TP30東拡張区南壁

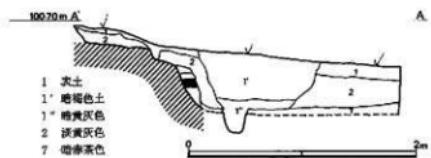


Fig. 15 TP30西拡張区南壁

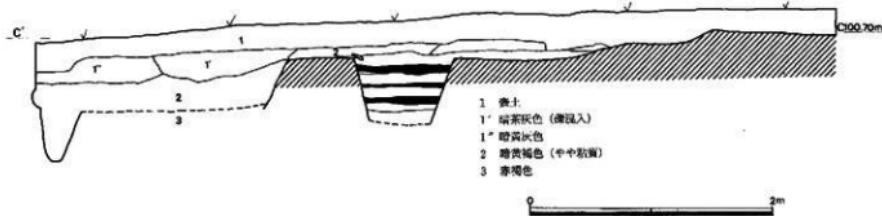


Fig. 16 TP30南側拡張区西岸土層断面図

#### S B 1 の版築状況 (Fig. 14・15・16)

Fig. 14はTP30を東側に延長したトレンチの南壁であるが、延長部分の4.5mの地点で厚さ40cm程の南北に走る版築を確認した。

版築はオレンジ色の明るい粘質土暗黄褐色の粘質土を交互に付き固めたもので、その縁端は急角度で構築しており、基底部分の標高は99.9m前後になる。

TP30で確認した高さでいくと、本来この建物の版築上面は削られている分を考慮に入れると標高107.10m前後である。この拡張トレンチは表土が東側に向かって下がりながら傾斜しているために版築上面も傾斜しているが、基底部分の標高から計算すると、本来基盤の厚さは90cm程になり、この部

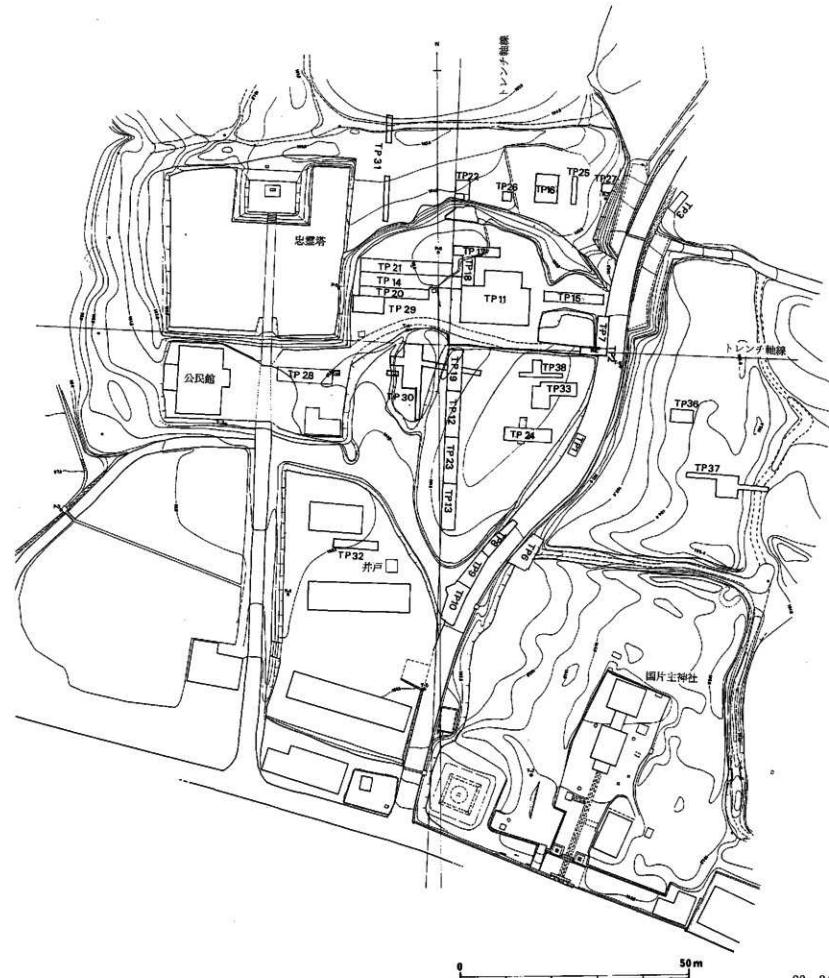


Fig. 17 試掘孔配置図

分はすでに50cm程削られていることになろう。

Fig. 15はTP30を西側に拡張したトレンチの南壁である。全体的に東側に向かって傾斜しているが、一部に版築痕が残っている。土層の堆積状況から判断すると、やはり、版築上面は50cm程削られているようである。

Fig. 16はTP30を南側に拡張したトレンチの西壁である。部分的に深堀りした壁の断面を見ると、版築の厚さは50cmであるが、すでに削られている部分を考慮すると70cm程になろう。Fig. 16区域で厚さは90cm程であったから20cm程の差がある。旧表土面が本来平坦ではなかったことが、この差になったものであろう。

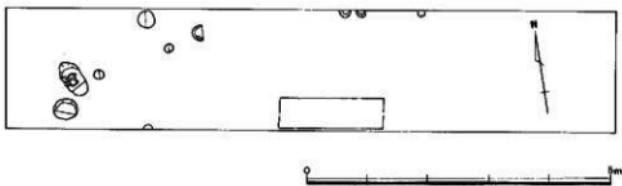


Fig. 18 TP 32区遺構実測図

#### TP31 (Fig. 17)

寺城の北限とSD5の西側延長、さらに北側を東西に横切る狭い道路の断面を見るために北側雜木林に設定したトレンチである。

土層の堆積状況は、厚さ10cm程の表土下にすぐ地山が現れるなど、層の堆積も薄く、また何らかの遺構も発見されなかった。また、道路は、寺城を区画するための人为的な遺構ではないかとの疑問があったが、やはり同様の堆積状況であり、人为的な遺構を確認することは出来なかった。

#### TP32 (Fig. 17・18)

現在町営住宅になっている区域である。昭和30年頃の住宅造成時に多数の瓦片が出土したという教示があったため、2m×10mのトレンチを設定した。

その結果、数個の柱穴や土器片と同じく瓦片も出土したが、土器は輸入陶磁器を含む中世に属する資料が大部分であり、直接鷹守に結び付く資料は得られなかった。

## 第5次調査

第5次調査分はTP33からTP36までである。

### TP33 (Fig. 17・19)

SB7と東側に向い合う位置に設定したトレンチである。

当初8m×3mで設定したが、基壇と規則的に並ぶ柱穴を確認するために西側と南側部分を拡張した。このトレンチで確認した遺構をSB8とする。

SB8は上層の堆積が薄く、表土下僅か15cm程で岩盤になる。ただ、旧表面は西側に行くほど低くなっているため、それに応じて表土も厚くなっている。

柱穴は東側部分は直接岩盤を掘り込んでいるが、西側はあらかじめ盛土を行なって表面を平坦にした上で改めて掘り込む方法を取っている。したがって、西側部分は断面でみると限り基壇を構築した形になる。しかし、これまで確認したSB1, SB7のような全面に版築を持つ基壇とは異なる。あるいはすぐ岩盤ということでわざわざ版築をする必要がなかったのかも知れない。

柱穴はほぼ東西に並ぶものが多いが、深さが一定なものはP1～P4までの4間分であり、他の柱穴とは掘られた時期が異なるものと思われる。その規則性を持つ柱穴の直径はP2が20cmで他は30cm前後で深さは50cm程度である。また、P1には直径20cm程の柱痕が残る。この建物の柱はその程度の大きさであったものであろう。

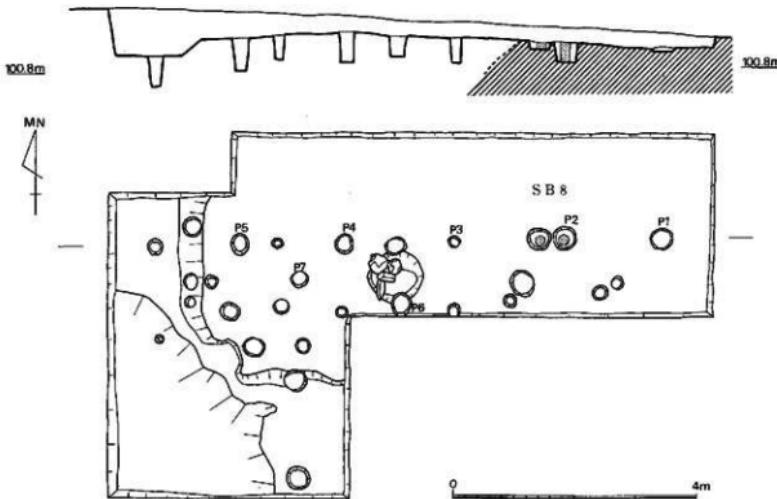


Fig. 19 TP33 (SB8) 平面実測図 (1/80)

S B 8 の規模は 5 次調査では西南隅を確認したのみであったが、後述するように 6 次調査において西北隅を確認した。ただ東側は柱穴を直接岩盤に掘り込んでいること、その延長が道路によって搅乱されているために明確な線が引きにくい。従って、確認出来る範囲での規模は南北 7.2m (24 尺) となり、東西は P 1 付近を東限と見ると 8.4m 以上ということになる。S B 7 と同じく南北にやや長い建物であることになり、位置的には S B 7 と S B 8 は向かい合うことになる。

Fig. 20 は T P 33 の壁面図である。

これによると、現地表面は西側に向かって高くなっているが、地盤はトレント東側の壁から 3.3m の地点から逆に西側に角度で落ち込んでいる様子が分かる。したがって、平坦地を確保するためには低い西側に土盛りを行なって造成する必要があり、2 層～4 層がその盛土にあたるものと思われる。

蛇足ながら、壇岐の鏡頭烟という言葉があるように、かつての壇岐の烟は殆どの場合中央部が高くその周辺が低い形をしていた。これは排水を考慮した結果であるという説や烟の表面積を多くするための処置であるという考え方もある。

この壇岐輪寺の調査区域の内 T P 33 を含む烟もやはり鏡頭のように中央部が高い。T P 33 の西側が高くなっているのはそのせいであり、旧地形が高い訳ではない。

なお、S B 8 の基壇は西側のみで確認されるが、その高さは精々 40cm 程である。

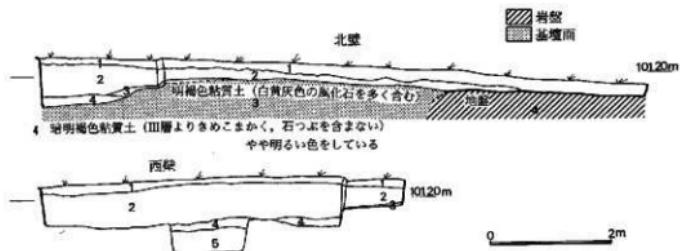


Fig. 20 T P 33 北壁・西壁実測図 (1/40)

#### T P 34 (Fig. 17・21)

第 1 次範囲確認調査の際 T P 13 の中に直径が大きいピットがあったが、調査の時間的な制限があって拡張できなかった。このため、寺域の南限と前回確認したピットの性格をみるために、トレントを大きくして併せ観察することとした。

試掘壙は 10m × 10m で設定したが、その西側は第 1 次調査の T P 13 と複合する。

その結果、試掘壙南西側に 9 個からなる柱穴列が出土した。柱穴は直径と深さ共に 80cm 程の大きさのものが 3 個東西に並び、その南北にやや小さな柱穴が並ぶ。

西側に延びる柱穴をさらに確認できれば位置的に南門の可能性がある。S B 9 と呼称する。

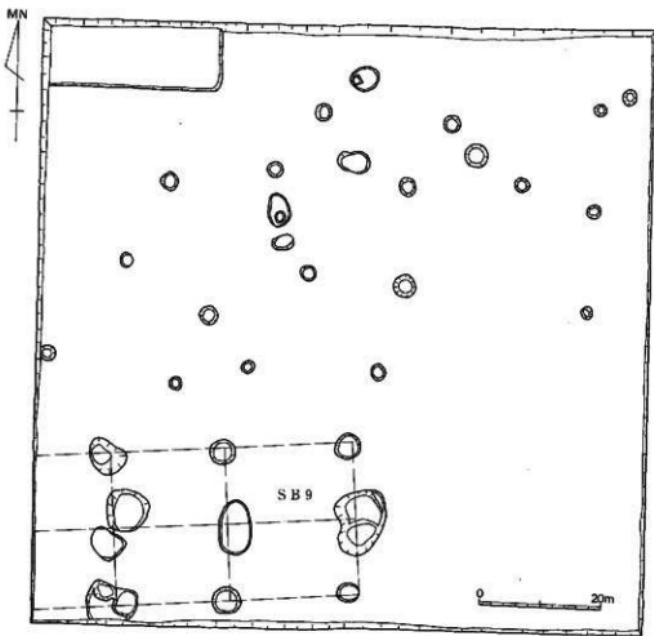


Fig. 21 TP34 (SB 9) 平面実測図 (1 / 80)

#### TP35 (Fig. 17)

寺域の西側については、これまでの範囲確認調査によっておおよその線が推定されているが、更に確認するために設定したトレンチである。

調査の結果、当該地区は、厚さ10cmの表土下にはすぐ岩盤が露出するなど、何らかの遺構が存在する可能性は少ない。また遺物も全く出土しなかった。

#### TP36 (Fig. 17・22)

当該地の東側は一段高くなった地形で、鬱蒼とした雑木林であったため立ち入りがしにくい地域であった。

このため、調査の必要性は指摘されながらもこれまで調査の対象地以外であったが、平成3年8月全国的に大きな被害をもたらした台風19号によって当該地でも相当量の立木の倒壊によって空間が生じることとなった。このため、急速調査区を設定したトレンチである。

調査の結果、特に顕著な遺構は発見されなかったが、第2層下部から瓦片とともに須恵器が一括し

て出土した。これまでの調査では、瓦が集積された場所付近には何らかの建物跡が発見されるのが一般的であり、建物を作る空間が地形的に限定される当該地においては、必ずしも平坦地のみに建物を作ったとは考えられない。

主要伽藍は平坦地に作っても、付属する建物は周辺の至近距離に作った可能性はあろう。今後はこの雜木林も積極的に調査の対象地とする必要がある。

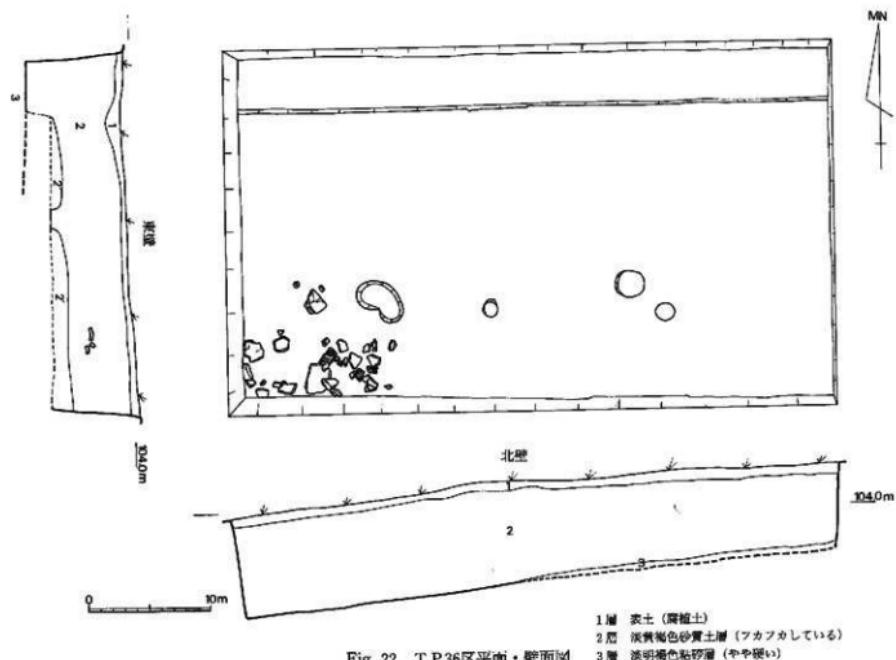


Fig. 22 T P 36区平面・壁面図

## 第6次調査

第6次調査分としてはTP37とTP38がこれに相当する。

TP37 (Fig. 17・23)

TP36によって、東側雜木林の中にも遺構が存在する可能性が高くなつたために新たに試掘場を設定する必要が生じた。また、雜木林の中には小規模ながら土壙跡があり、その土壙に囲まれた狭い平坦地があることが分かったため、この区域にまず $5\text{m} \times 5\text{m}$ の試掘場を設定し、その後土壙との関連を見るため、東西にそれぞれ7mの延長トレンチを入れて拡張することとした。

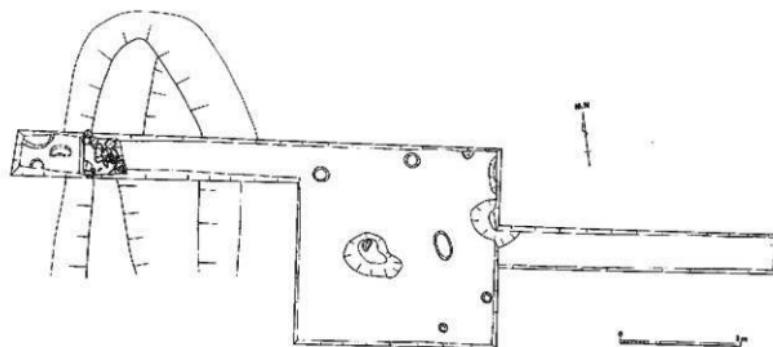


Fig. 23 TP37 平面実測図

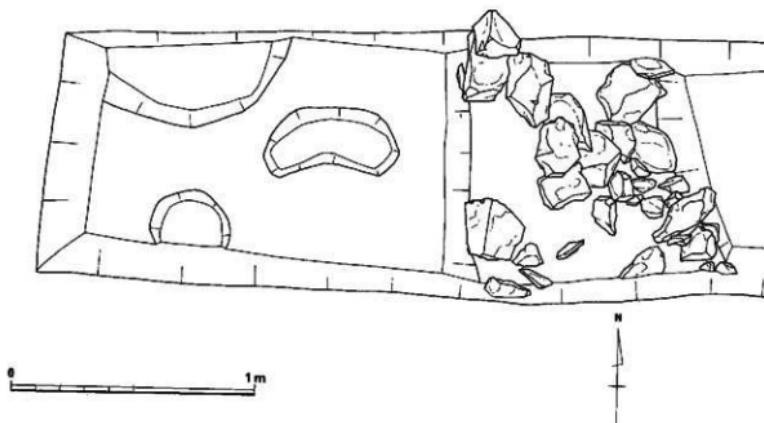


Fig. 24 TP37 西拡張区土壙石垣部分実測図

TP37には、ピットが6個確認されたが浅くて不規則であるため、柱穴かどうかは判断出来ない。

西側に延長したトレンチ内で確認した土壘状遺構は、幅2m、高さは70cm程の規模で、西側前面には石垣状に角礫を2段に構築している。しかし、遺物らしきものは殆ど出土しなかったことから時期を特定することはできない。(Fig. 24)

土壘状遺構そのものは、明確なところではこのトレンチの北側は3m程の地点で終り、南側は5m程の地点あたりから自然消滅的に分からなくなる。

TP37の北壁土層で確認できる土層の堆積状況は1層は腐食土を含む表土で1層は一部にのみ見られる淡褐色砂質土、2層は淡黄褐色砂質土で厚さは20cmから40cm程である。2層は土壘状遺構構築のための盛土で色調は2層と同じであるが、全体的にフカフカしており柔らかい。3層は暗褐色砂質土で4層が黄褐色粘質土の地山になる。(Fig. 25)

雑木林東側にも空堀らしき浅い溝が南北に走っているためトレンチを延長して精査したが、人為的な盛土や掘削の痕跡はなかった。

なお、このトレンチからは2、3片の須恵器と土師器が2層面から出土したのみで、遺構の時期決定資料としては弱い。

#### TP38 (Fig. 17・26)

TP33において確認したSB8の北西隅を確認するために設定したトレンチである。

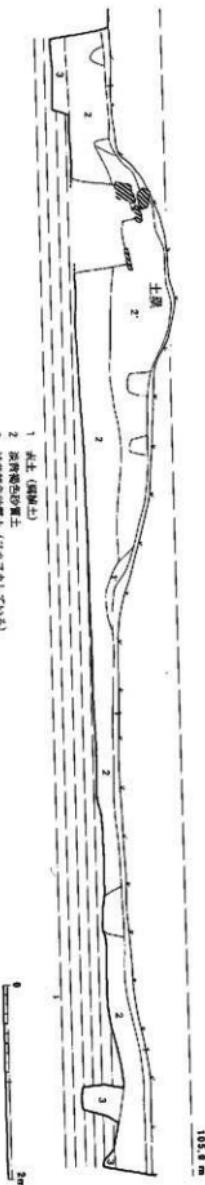
この結果、このトレンチの北側2mの地点でその北西隅を確認することが出来た。これにより、SB8の基壇が南北7.2mであることが分かったことは前述したとおりである。

Fig. 28はTP38の南壁を深掘りして観察した土層断面図である。

SB8の基壇面は4層上面になるが、その面を確保するために、2b, 3, 5層に見られるような数回の土盛りが見られる。

すなわち、8層が黄褐色の風化した疊層の基盤であるが、トレンチ中程から急速に西側に向かって落ち込んでおり、その上には7層の淡茶褐色粘質土が堆積している。この層は厚さを確認していないので、厚さが不明であるが、遺物を全く含まないことから自然堆積であると思われる。しかし、5層には瓦片を多く含むなど、この層

Fig. 25 TP37西側遺構区北壁断土層断面図 (1/100)  
1 表土 (砂質土)  
2 淡褐色砂質土  
3 暗褐色砂質土 (2) フカフカしている  
4 黄褐色粘質土



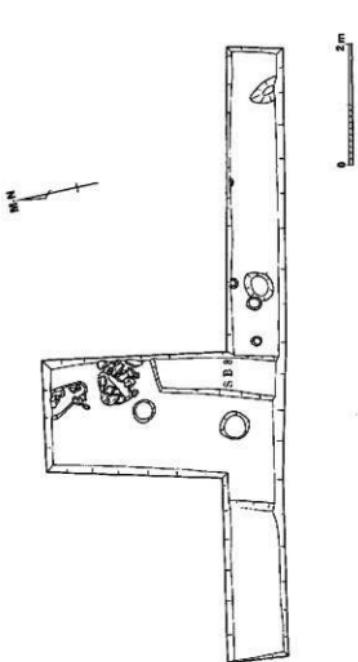


Fig. 26 TP38 平面実測図

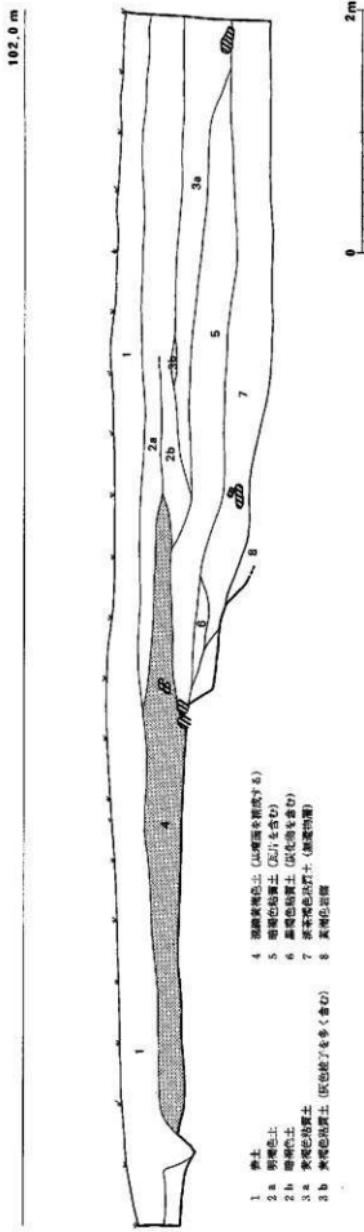


Fig. 27 TP38南壁土層断面図

以上の堆積は人為的である。平坦地を確保するために行なった造成であった可能性が極めて高い。

その時期については、4層の上に堆積する2層中から須恵器や土師器と共に白磁や越州窯系の青磁などの輸入陶磁器が含まれることから11世紀以前であるものと思われるが、はっきりした時期は不明である。ただ、須恵器や土師器の特長からみて8世紀の後半以降であることは間違いないだろう。

### III 出土遺物

出土遺物としては、須恵器、土師器、瓦片などがあった。以下、順に出土遺構や出土地区毎に説明を加えておきたい。

#### 1 土 器

##### TP 6 (S A 1) 出土土器

この地区は2層と3層（配石遺構直上も含む）から出土した土師器、須恵器である。

##### 2層出土土器 (Fig. 28)

2層からは、須恵器の蓋・杯類と土師器の杯・皿類がある。

1は須恵器の蓋類で、口縁部を折りまげ口縁端部にぶい稜をもつ。時期は、8世紀中葉頃であろう。2は底部に丸みをもって立ち上がり内彎しながら上位で外反する。口縁部が厚ぼったくなり、口縁端部は丸くおさめる。なお、内面には墨の付着が認められる。時期は、9世紀初頭～9世紀中葉にかけてが考えられる。口径が13.8cm・底径が10cm・器高が4cmを測る。3は平坦な底部をなし、体部から緩やかに彎曲しながら上方へ延びた土師器の杯である。色調は、内外面ともに淡黄赤褐色を呈する。底径で9cmを測る。4は高台が付いた土師器の皿。器形は、体部の中位より外反し、端部を丸くおさめる。色調は内外面ともに暗赤褐色を呈する。口径で8.1cmを測る。5は土師器の皿である。上底ぎみの底部から体部との境に稜をなし体部中位で外反し、口縁端部を丸くおさめる。口径が6.6cm・底径4.7cm・器高2cmを測る。

##### 3層出土土器 (Fig. 29)

3層（配石遺構直上も含む）からは、須恵器5点を図化した。この他に6点須恵器の小片が出土している。いずれも8世紀代の遺物である。

1は体部から口縁部にかけて屈曲し、口縁部を折り曲まげ口縁端部が内側に入る。2は須恵器の杯身の口縁部小片で、体部から口縁部にかけて外反ぎみとなる。口縁端部がやや尖りぎみである。3は

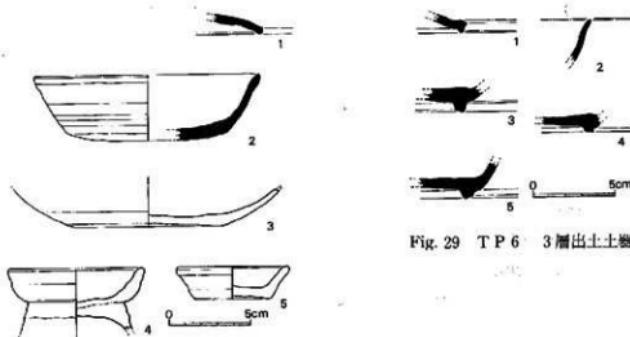


Fig. 28 TP 6 (S A 1) 2層出土土器

Fig. 29 TP 6 3層出土土器

焼成が甘く淡灰黄色を呈する。高台の接地が外端部にある。4は須恵器の杯身の小片である。器形は、高台が底部にめり込むような貼りつけとなっている。5は焼成が甘く、淡黄灰色を呈している。器形は高台の内端面で接地し、わずかに底部と体部との境に縁をなして立ち上がる。

#### TP29出土土器 (Fig. 30・31・32・33)

このトレンチからは、2層・3層から須恵器・土師器・青磁・陶器類の出土があった。

#### 2層出土土器 (Fig. 30)

1が内面にかえりを有する須恵器の蓋杯で、口縁端部からやや離れてかえりを作り出している。口縁部は屈曲し、口縁端部を丸くおさめる。2は焼成温度が低いため、淡い白灰色を呈する。口縁端部をやや内側へ折り曲げている。3は口縁部でやや屈曲し、口縁端部を折り曲げた須恵器の蓋である。4は須恵器の蓋にあたり、宝珠端部が高く中央部が低い。天井部は平坦である。焼成は比較的よく、外面暗灰黒色で内面は灰色を呈する。5も須恵器の蓋にあたる。焼成が甘く灰黄色を呈する。宝珠の上部端を欠いている。6は土師器の杯にあたるもので、内外面をミガキ、底部を平坦にする。底部からの立ち上がりは、外反ぎみに体部へ移行する。底径5.9cmを測る。7は厚みのある土師器の底部片である。立ち上がりに丸みをもって体部へ移行する。色調は、明赤褐色を呈する。底径7.8cmを測る。8は、脚を有する杯で、脚部から体部へかけ直線的な延びを示している。内面と外面底部に焼付着する。器面は風化してざらつく。9は糸切り底の皿である。器形は、底端部より直線的に立ち上がる。底径6.5cmを測る。10は輸入陶器で、色調は、外面が茶褐色を呈し内面が淡黄灰色を呈している。器形は、底部から体部下位で膨らみを持ちながら内彎ぎみに上方へ延びる。底径8.5cmを測る。

2層での時期は、須恵器の1が内面にかえりを有する蓋が7世紀末でもっとも古く、2が8世紀前半、3が8世紀末～9世紀代にあたる。土師器は、いずれも口縁部を欠いており、底部の形状からの判断では時期を比定しえないが、6で8世紀末頃、7・8が9世紀後半、9が12世紀以降であろう。10は輸入陶磁器で、13世紀後半～14世紀前半頃を考えている。

#### 3層出土土器 (Fig. 31・32)

須恵器・土師器・青磁等の出土があるが遺物に時期船があり、個々の遺物については或る程度時期についていえるものの生活面の時代については特定できないのが現状である。

また、遺物は小片が多く須恵器で復元できたのはFig. 31の15、土師器でFig. 32の4・9程度である。

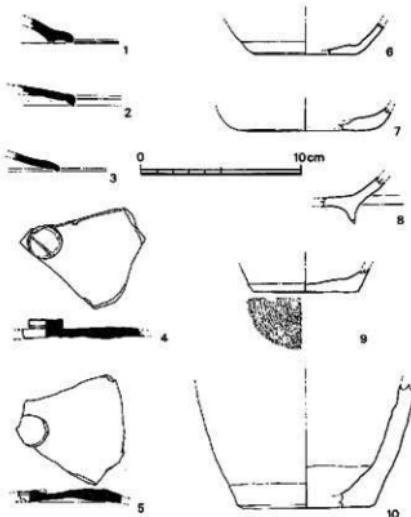


Fig. 30 TP 29 2層出土土器

### 須恵器 (Fig. 31)

1は蓋の口縁部片である。器形は、口縁部から天井部への移行に比較的急な立ち上がりが認められる。口縁端部は、直に折れ稜をなす。2は比較的厚めの断面を呈した蓋である。器形は、口縁端部で折れにぶい稜をなしている。3の蓋の器形は、口縁端部の折りが短く、口縁部から天井部への移行部に二段の稜を認める。4は焼成の甘い蓋で灰黄色を呈する。器形は、口縁端部を折りにぶい稜をなす。5は口縁端部をまるくおさめた蓋である。6は蓋で、天井部を平坦となし、口縁部でわずかに屈曲し、口縁端部をまるくおさめる。内面は、口縁部との境にわずかな稜を有する。口径14.8cmを測る。7は天井部中央から上方へ緩やかに上り、鈍角をなして下方へ下る。口縁端部は、直に折れ稜をなす。蓋の破片である。8の蓋の器形は、口縁部から口縁端部にかけてを平坦になし、口縁端部を直になす。9は杯身の口縁部片と思われ、体部に膨らみを持ち、口縁部でやや外反する。10は杯身の口縁部片である。体部から口縁部にかけ直線的に延びる。11は杯身の底部片で、幅が0.7cm程の粘土紐を貼り付けた高台としている。復元底径10.8cmを測る。12は杯身の底部片である。高台から体部への移行は、屈曲して立ち上がる。13は須恵器の皿の形態をなし、底部からやや屈曲させ口縁部が内彎ぎみである。底部は平坦に作り出す。14の杯身の器形は、高台を底部端に有し、体部との境に稜をなし彎曲しながら立ち上がる。また、高台から底部中央部へは直線的に下がる。外底部のロクロ痕をヘラにより整形する。底径で7cmを測る。15の器形は、底部と体部の境にわずかに稜があり、体部より弯曲して外方へ延び、口縁端部を丸くおさめる。

灰黄色を呈する杯である。口径14.2cm・底径で8.3cm・器高が2.4cmを測る。

以上の須恵器で、時期的には8世紀中頃から9世紀初頭の位置にあり、15がやや新しく、9世紀の前半にあたると思われる。

### 土器器 (Fig. 32)

1は製塙土器の口縁部にあたるものであろうと思われる。断面が厚く赤褐色を呈し胎土が粗い。器形は、頸部より口縁部に向かって外反し、端部を丸くおさめる。頸部外面にぶい稜がつく。2は1と同一個体の肩部から頸部にかけてのものである。内外面にタタキの整形痕が残る。3は杯類の底部片で、底部から体部へ

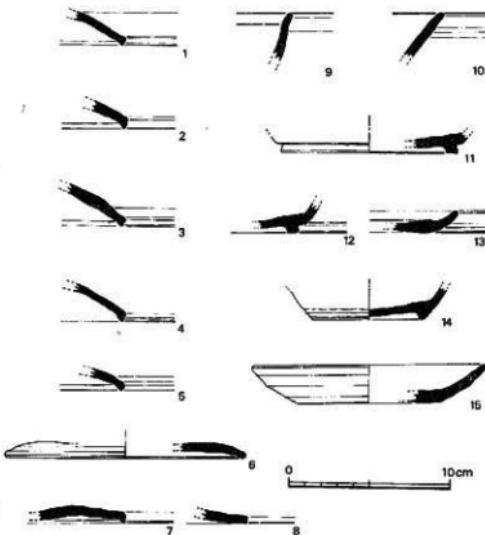


Fig. 31 T P 29 3層出土須恵器

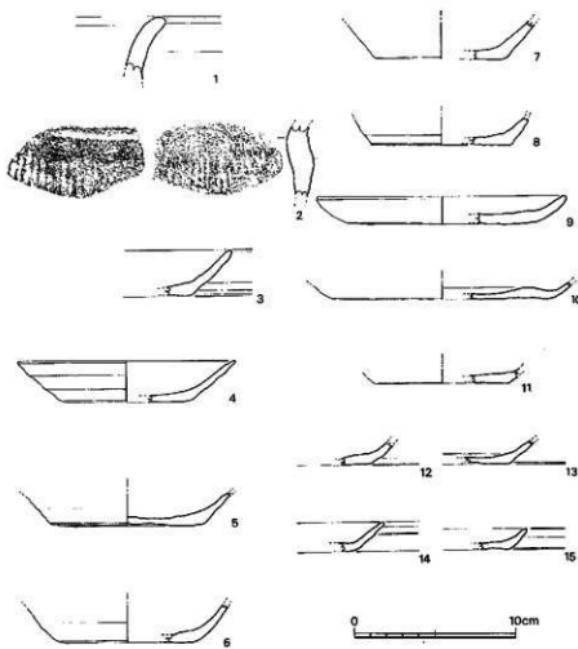


Fig. 32 TP 29 3層出土土器

の立ち上がりに膨らみを持ち、屈曲して口縁部へ移行する。内外面風化し、器面にヒビワレが生じている。口縁端部は丸みをもっておさめる。4は平坦な底部より体部の境で弯曲ぎみに外方へ延び、口縁部は、尖りぎみにおさめる。色調は明赤褐色を呈する。口径が13.2cm・底径7.6cm・器高が2.5cmを測る。5は底部から体部にかけ屈曲し、体部から外方に延びる形状と思われる。底径で9.4cmを測る。6は須恵器の杯で、底部から弯曲して体部へ立ち上がる。底径で8.2cmを測る。7の杯は、底部と体部の境に稜がつきやや弯曲して立ち上がる。底径で8.0cmを測る。8の杯は、底部を平坦なし、体部やや弯曲ぎみに立ち上がる。底径で8.5cmを測る。9は土器の皿で、胎土に金雲母が混じる。底部と

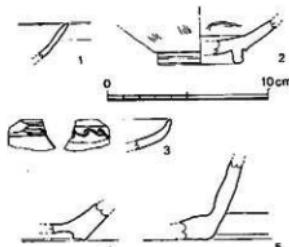


Fig. 33 TP 29 3層出土陶器青磁頬

体部の境は丸みをもって立ち上がり、内彎ぎみに口縁部へ移行する。口縁端部は丸くおさめる。色調は内外面とも赤黄褐色を呈する。口径が15.2cm・底径11.3cm・高さ1.7cmを測る。10の皿は比較的平坦な底部より体部が外方へ延びる。内外面にミガキがかかる。また、内面には墨の付着が認められる。底径で13.6cmを測る。11は赤褐色を呈する皿の底部片である。底部と体部の境にぶい稜をなして立ち上がる。底径で8.2cmを測る。12は暗茶褐色を呈し、底部と体部の境に稜をなし、段をもって立ち上がる。13は黄赤色を呈し、底部と体部の境に稜をなして立ち上がる。断面は比較的薄手に作る。14は底部と体部の境はぶい稜をなし、外方へ延びる。口縁端部をやや尖りぎみにおさめる。口縁部周辺には墨の付着が認められる。15は出土遺物の内もっとも小型の皿類に入るもので、内外面ともにミガキがかかる。底部から体部への移行は丸みをなし、やや内彎ぎみに立ち上がる。口縁端部はやや尖りぎみである。色調は、明赤黄色を呈する。

土器の時期は、1～3・6が8世紀後半に、4が9世紀初頭、5・9・10が10世紀～11世紀初頭と思われるが口縁部を欠く資料のため断定はできない。次に、もっとも新しい資料が15の皿にあたり、12世紀初頭頃が考えられる。

#### 陶器・青磁類 (Fig. 33)

1は器面が青味がかった黄色を呈し、断面が薄い須恵質の椀の口縁部である。2は同安窯系の青磁碗類で、外面の体部に横目を内面に片彫りの紋様を付けている。高台は比較的高く作り出す。3は高麗青磁の皿である。外面と内面に白土の象嵌がある。外面は雷文を二条の沈線で挟むように描き、内面には口縁下に一条の沈線と雷文を描く。4は須恵質の陶器で、外底部に砂目跡が残る。底部は輪状の高台をなし、胎土は緻密な粘土を使用している。5は陶器類の底部で、底部を平坦に作出し、体部との境に稜をなす。色調は、外面が黄灰色で内面は暗赤褐色を呈する。

青磁類では、同安窯系の椀が12世紀中葉～13世紀初頭にあたる。この外、図化していないがTP29のPit 1から龍泉窯系の青磁碗I類-2(12世紀中葉～13世紀初頭)が出土している。

#### Pit3 出土土器 (Fig. 34)

1は基壇を掘り込み、投棄してあった遺物である。最近の陶器で、内外面の全体に茶褐色の釉が掛かった甕類である。

#### TP30出土遺物

建物基壇を確認した地区であるが、中世～近世の攪乱を受けており直接基壇に関係する資料としては、Fig. 36の須恵器が考えられる。

#### 攪乱・耕作土層出土土器 (Fig. 35)

1は龍泉窯系の青磁碗類底部片(12世紀中葉～13世紀初頭)である。高台は施釉されずその他は全体に青みがかった緑色を呈している。2は近世陶磁器の碗類で、内底見込に蛇目はぎがあり、中心部にコンニャク判による五弁花文が付く。ま



Fig. 34 pit. 3 出土土器

た、外面に三本の圓線と内面に二本の圓線が入る。高台底部に砂目の跡が残る。製作時期は18世紀代であろう。3は網目の文様を描き、淡い灰緑色の釉が掛かった近世陶器である。胎土は、黄褐色を呈し、器内は薄手に仕上げた椀類である。4は耕作土層から出土したプリント絵柄の陶磁器碗である。

#### 2層出土土器 (Fig. 36)

1の須恵器の蓋は、平坦な天井部から体部で丸みをもって屈曲し、口縁部を折り曲げ端部が内傾ぎみとなっている。色調は灰色を呈する。口径が13.7cmを測る。2は糸切り底の皿で、底部と体部との境で稜をなし体部外方へ延びる。色調は明赤褐色を呈する。底径で11.3cmを測る。

3も糸切り底の皿で、底部から体部の境で一旦段をなして体部で立ち上がる。色調は明赤褐色を呈する。底径で9.4cmを測る。4は陶器で、内面に茶褐色の釉が薄く掛かる。外面体部上位にもわずかに釉を掛けた跡がある。体部下位以下は釉は掛からず整形の削り痕が残る。

以上がある。時期では1の須恵器の蓋が8世紀前半と糸切り底の土師器2・3が12世紀以降にあたる。

#### TP 32

#### 2層出土土器 (Fig. 37)

1は須恵器の蓋の口縁部片である。器形は、口縁部で屈曲し、口縁端部を外方へつまみ出した形状をなす。色調は、焼成が甘いため白灰色を呈する。口径が15.7cm・底径10.3cm・器高4cmを測る。2は低い高台を底部端に有する須恵器の杯身である。形状は、底部から体部立ち上がりが内傾ぎみに体部中位へ移行し、中位より口縁部にかけて外反する。色調は、外面が黒色を

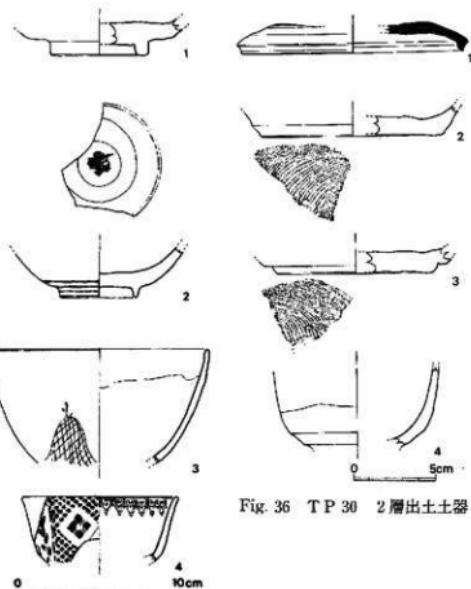


Fig. 36 TP 30 2層出土土器

Fig. 35 TP 30 掘乱・耕作土出土土器

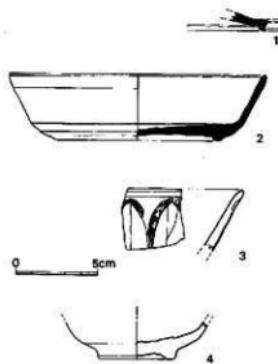


Fig. 37 TP 32 2層出土土器

なし内面は、暗灰色を呈する。3は龍泉窯系の青磁片で、外  
面体部に銅蓮弁の文様を有する。色調は、暗黄青色を呈する。

4は高麗青磁碗である。内面見込に砂目二箇所と高台に三箇  
所の砂目跡が残る。胎土は、ザックリした土の暗灰色である。  
器面の色調は、灰青色を呈する。

この調査区では、1の須恵器蓋が8世紀末、2の須恵器の  
杯身が9世紀前半、3が13世紀中葉頃の時期の遺物があった。

#### 遺跡表面探集資料 (Fig. 38)

1は須恵器の蓋で、体部より屈曲し口縁部を折り曲げる。

口縁端部は丸みをもつ。色調は、灰色を呈する口径が15.1cm

を測る。2は粉青沙器の底部片で、体部の内外面に細かい連珠文を配している。時期は、16世紀代の  
資料であろう。

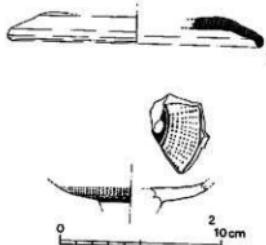


Fig. 38 遺跡表面探集資料

#### 参考文献

1. 川述昭人・森田勉『牛頭窯跡群II』大野城市大字牛頭所在窯跡群の調査  
福岡県文化財調査報告書第89集福岡県教育委員会1989
2. 中村浩編集『陶邑II』大阪府文化財調査報告書第29大阪府教育委員会1977
3. 横田賢次郎・森田勉「〈研究ノート〉太宰府出土の土師器に関する覚え書き」『研究論集2』九州歴史資料館1976
4. 横田賢次郎「〈研究ノート〉太宰府出土の土師器に関する覚え書き(3)」『研究論集5』九州歴史資料館1979
5. 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」—型式分類と編年を中心として—『研究論集4』九州歴史資料館1978
6. 高野晋司編集『宅牧鳴分寺I』長崎県芦辺町文化財調査報告書第5集  
長崎県芦辺町教育委員会1991

### TP33 (SB8) 床直上出土土器 (Fig. 39)

須恵器の破片である。形態からみて長頸壺の肩部であろう。肩がやや張る8世紀前半のものか。わずかに砂粒がみられるものの良質な胎土である。色調は灰色で焼成は堅緻である。

### TP33 柱穴出土土器 (Fig. 40)

1は柱穴1から出土した土師器の杯底部である。底部と体部の境には明確に稜がつき、体部は直線的にのびる。復元口径は8.4cmを測り、胎土は良質である。2は柱穴6から出土した土師器の小皿である。復元口径は9.8cmで、器高は1.0cmと低い。底部はヘラ切り離しで、底部からそのままゆるやかに体部に移行する。胎土には石英・長石小粒が目立つ。

### TP33 瓦タメ出土土器 (Fig. 41)

1～3は須恵器蓋の口縁部である。天井部はほとんど水平に近く、口縁端部をわずかに折り曲げる程度である。口縁端部内面の稜は3をのぞいていずれも鈍く、痕跡的に残っているにすぎない。胎土・焼成はすべて良好である。4は須恵器蓋の天井部とした。天井部はほぼ平坦で、体部との境に鈍い稜をなす。天井部外面には回転ヘラ削り調整は見られない。胎土に長石細粒が含まれるが、全体には良質である。



Fig. 39 TP33 床直上出土土器

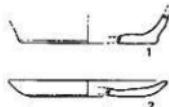


Fig. 40 柱穴出土土器

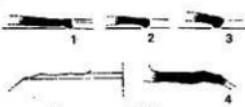


Fig. 41 TP33 瓦タメ出土土器

### TP33 2・3・4層出土土器 (Fig. 42)

1～8が2層、9～11は3層、12が4層の出土遺物である。1は杯身の口縁部である。立ち上がりは短く、基部から内傾してのびながら中位で直立気味に立ち上がる。受部は体部の延長で外上方にのび、端部は丸く仕上がる。器高はあまり高くならない。2は杯蓋の口縁部である。やや丸味をもった天井部から、ただ垂直に形成された口縁につながる。口縁端部内面の稜は沈線状になり、口縁部の退化傾向をうかがわせる。色調は灰白色で、焼成はやや甘い。3は杯蓋の完形品である。焼成時のひずみが著しく、最大口径13.4cm、最小口径12.6cmを測る。つまみは扁平なボタン状で、頂部がわずかに尖る。天井部はヘラ削りで、体部との境は稜ではなく鈍い沈線が巡る。口縁端部は体部から垂直に形成され、断面三角形を呈し端部内面には稜が入る。4～6は高台のつく杯身である。4は底部と体部の境は丸くくられ、底端部に断面四角形の高台がつく。胎土・焼成共に良好で、丁寧なつくりである。5はボッテリと厚ぼったい高台でシャープさに欠ける。体部と底部の境は明確ではなく、ゆるやかに屈曲する。高台内面の底部の器壁は体部よりも薄くつくられている。高台はわずかに内端面が接地する。6は復元口径10.0cm、器高3.4cmを測る。底部と体部の境は明瞭ではなく丸味をもち、短い高台が底端部よりやや内側につけられる。高台は幾分外側へ踏張るようになっている。体部は中位まで



Fig. 42 TP 33 2・3・4層

内湾気味にのびる。7は高台のつかない杯身で、復元底径8.6cmを測る。底部と体部の境はナデて丸くつくられる。底部は切り離し後、手持ちのヘラ削りを行なう。体部は直線的にのびる。8は白磁の小皿(IX類)である。口縁端部が口禿になっている。体部は直線的に外上方に立ち、底部との境は明瞭である。胎土は灰白色で黒色粒を含み、釉は薄い灰緑色を呈する。2層からは図示しなかったが寛永通宝も出土している。9は杯身の口縁部である。端部は外面に浅い凹みがあるため小さな玉縁状を呈している。胎土は精良である。10は高台のつかない杯身の底部である。体部との境は不明瞭だが、底部は粘土紐の跡目が残っている。11は高台のついた杯身である。復元底径は10.5cm。底部と体部の境は幾分丸味をおび、断面四角形の高台が底端部よりやや内側につく。体部は中位付近からわずかに外反する傾向を見せる。12も11とほぼ同じで、復元底径11.0cm、復元口径13.2cm、器高5.0cm。高台は底端部よりやや内側につき、内端部が接地する。体部は中位からゆるく外反する。

#### TP 34 2層出土土器 (Fig. 43)

1は土器器の杯である。底部はヘラ切り離しで、体部との境は摩滅のためか鈍い稜になっている。胎土にあづき色の砂粒を含む。2は土器器の小皿か。1と同様、底部ヘラ切り離しで、体部との境は明瞭につく。体部は内湾気味にのびるようだ。3は須恵器の杯蓋。天井部は低く水平で、回転ヘラ削り調整である。口縁部は垂直に短く屈曲し、端部内面にわずかに稜がつく程度である。4は須恵器の杯身である。体部と底部の境は明瞭で、高台が底端部よりやや内側につく。5は白磁碗(IV類)である。口縁部の玉縁は大きく、灰色をおびた白色の釉がかかる。胎土は灰白色で黒色粒はあまりみられ

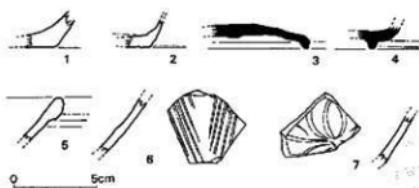


Fig. 43 TP 34 2層出土土器

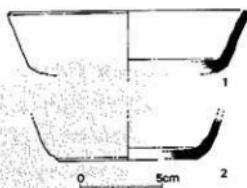


Fig. 44 TP 34 出出土器

ない。6は同安窯系青磁碗（III類？）の体部片である。外面にヘラ状施文具による片彫り風の沈線が入る。淡い緑色の釉がかかる。胎土は灰白色を呈する。7は龍泉窯系青磁片（I類）で、内面に蓮華文の片彫りが施されている。胎土は灰色で、青緑色の透明な釉がかかる。

#### TP34-25, 27出土土器 (Fig. 44)

1はピット25出土、2はピット27出土の須恵器杯身である。1は復元口径14.8cm。体部と底部の境は丸くつられており、体部はほぼ直線的にのびる。精良な胎土で丁寧なつくりである。2は復元底径8.4cm。体部下半は丸味をおびるが、底部との境は明瞭である。体部はわずかに内湾気味にのびる。胎土にあづき色の砂粒が混入する。1・2ともに色調は灰褐色を呈する。

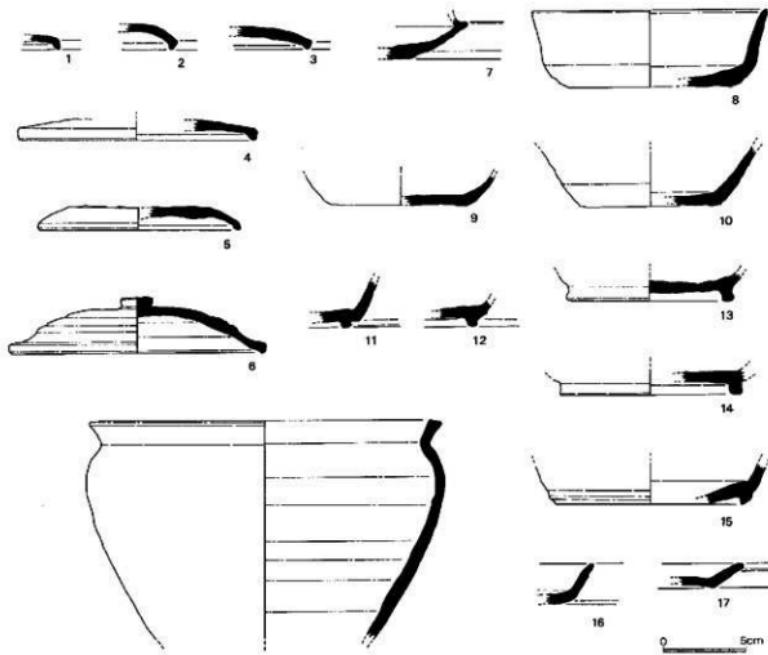


Fig. 44 TP34-25, 27出土土器

#### TP36 2層出土土器 (Fig. 45)

1～6は須恵器の杯蓋である。1は口縁端部を垂直に折り曲げたもので、体部は扁平になっている。口縁内面と体部の境は明瞭である。2も口縁端部を折り曲げたもので、端部が幾分内傾している。口縁内面の後はまだ明瞭である。体部はやや丸味を持つが天井部は平坦になる。3は口縁部が退化し、端部が垂直に形成されたにすぎないものである。口縁内面と体部の境は不明瞭で、口縁部は形骸化し

ている。体部は扁平に近い。4は垂直に折り曲げられた口縁端部の丈が長いものである。口縁内面と体部の境は不明瞭。体部は1同様に扁平である。全体に丸味をおび、シャープさに欠ける。5は口縁端部の丈が短く、体部と一体化したものである。口縁内面の稜も不明瞭になっている。天井部はヘラ削りで平坦に仕上がる。6は復元口径15.8cm、器高は3.4cmを測る。天井部に扁平なボタン状のつまみを有する。天井部は丸くつくられ、口縁部で外反気味に屈曲する。端部は退化傾向で垂直に形成される。口縁内面の稜はわずかに認められる程度である。全体に丸味をおびたつくりである。7~15は須恵器の杯身である。7は身に蓋受けの立ち上がりを有するものである。立ち上がりは内傾し、受部は底部から直線的につながる。底部は回転ヘラ削り調整を施す。全体に器高が低く扁平な感がする。8は復元口径14.5cm、器高4.7cmを測る。底部と体部の境は丸く不明瞭である。体部は内湾気味にのび、口縁部付近でわずかに外反する。口縁端部は割りと鋭い。胎土・焼成とともに良好である。9は復元底径8.4cm。底部と体部の境は摩滅のためかやや不明瞭で、体部は内湾気味にのびていく。体部の器壁が薄く仕上がる。焼成はやや甘い。10は復元底径8.7cm。体部と底部の境は明瞭で、体部は直線的に大きく外上方に開いてのびる。色調は外面ともに暗褐色を呈し、須恵器らしからぬ色をしている。胎土は精良、焼成はやや甘いほうか。11~15は高台のつく杯身である。11は底部と体部の境が明瞭で、底端部より内側に低い高台がつく。高台は底部の重みでつぶれた格好になっているが断面四角形であろう。体部は直線的にのびる。12は体部と底部の境が不明瞭で、断面四角形の高台は底端部近くにつけられる。胎土は精良だが焼成は不良である。13は復元底径10.3cmで、高台は底端部につく。高台は割合高く、断面長方形でわずかに内端部が接地する。胎土・焼成とともに良好である。14も13同様、底端部にしっかりとした断面四角形の高台がつく。復元底径は11.2cmを測る。色調は淡赤褐色で、焼成は良好である。15も底端部に高台のつくタイプであるが、高台貼りつけ時に外端部を強くナデたせいか断面が不整四角形をなす。結果的に高台の内端部が接地することになる。復元底径11.5cm。色調は淡褐灰色を呈し、焼成は良好である。高台の貼りつけが不十分など、つくりに粗雑な感がある。16・17は須恵器の皿である。16は体部がほぼ直線的にのび、底部は丁寧な回転ヘラ削りが行なわれる。17は体部がやや内湾してのびるものである。胎土・焼成はともに良好である。18は鉢（鉢D類）である。口縁部が短く上方にのび、口縁端部はわずかに凹む。体部はやや肩がはったようになり、底部にかけてほぼ直線的にすぼまる器形をなす。底部は高台がつくものと思われる。外面とも丁寧なナデ調整が施される。胎土は精良、色調は灰白色を呈する。9世紀前後のものであろう。

### TP 37出土土器 (Fig. 46)

1は土師器で高杯の脚裾部であろう。脚柱部に移行する部分で内面に鈍い稜がつく。2は須恵器杯身の口縁部である。直線的にのびた体部からやや外反する口縁部に至る。3は須恵器の蓋である。扁平な器形で、天井部から口縁端部へは垂直に形成される。口縁内面と体部との境は不明瞭である。焼成時のひずみが著しく、粗雑なつくりである。

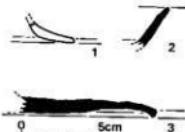


Fig. 46 TP 37 出土土器



Fig. 47 TP 38 出土土器

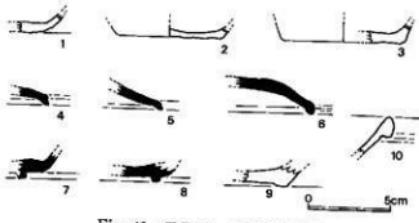


Fig. 48 TP 38 1層出土土器

Fig. 49 TP 38 2層出土土器

### TP 38 P 5 内出土土器 (Fig. 47)

1は須恵器杯の口縁部である。直線的な体部からやや外反気味の口縁部となる。焼成はやや甘い。2は土師器の底部である。ヘラ切り離しの底部であるが、他は摩滅のため調整不明。

### TP 38 1層出土土器 (Fig. 48)

1・2は土師器である。1は杯で復元底径5.0cm。底部はヘラ切り離しで、体部は垂直から幾分外反してのびる。2は小皿で、復元口径8.2cm、復元底径7.2cm、器高1.6cmを測る。底部切り離し後、体部は鋭く直線的に立ち上がる。1・2ともに胎土・焼成は良好で、特に2はしっかりとつくりである。3は須恵器の小皿か。直線的にのびた体部は短く、口縁部でわずかに外反する。胎土は精良で、色調は灰白色を呈する。4は須恵器杯身の底部である。底端部付近に低く扁平な高台がつく。粗雑な作りである。5は白磁碗 (IV類) である。口縁部の玉縁は大きいが張りがなく、体部の器壁もあまり厚くない。灰色をおびた白色の釉がうすく体部中位付近までかかる。胎土は灰白色で黒色粒を含む。

### TP 38 2層出土土器 (Fig. 49)

1～3は土師器である。1は体部と底部の境が不明瞭で、丸味をもって仕上がる。底部外面には粘土紙の継目が残る。胎土に金色ウンモが混入する。2は復元底径6.3cm。底部はヘラ切り離しで、体部との境は幾分明瞭となる。胎土には微細な金色ウンモが含まれている。3は糸切り底をもつ土師器である。底部と体部との境は明瞭で、直立気味に体部がのびる。胎土にはわずかに金色ウンモが混ざる。4～6は須恵器の杯蓋である。4は口縁部端部が外側に折り曲げられたもので、断面三角形をなす。口縁内面と体部との境は明瞭である。5は口縁部端部があまり屈曲しないものである。口唇部は鋭い

ものの、口縁部内面と体部との境は沈線状に凹むだけの退化傾向を示す。6は平坦な天井部から口縁部がゆるく折り曲げられ、端部は丸く鈍い。口唇部外面には沈線状の凹みがある。口縁部内面と体部との境は明瞭だが、全体的には退化傾向であろう。7・8は須恵器の杯身である。7は底部と体部との境に稜があり、底端部より内側に断面四角形の高台がつく。8は底部と体部との境は不明瞭で、底端部よりやや内側に低く貧弱な高台がつく。9は越州窯系青磁碗である。底部は低い輪状高台で、体部は高台外端部から直接立ち上がる。胎土は褐灰色を呈し精良である。オリーブ色の釉が全面に施釉され、高台疊付部分のみ露胎である。種々の特長からみてI-2類に相当するものであろう。10は白磁碗(IV類)である。口縁部が大きな玉縁状になる。胎土は灰白色で、黒色粒が含まれる。釉はやや空色気味の発色である。(本田)

## 二 その他の出土遺物 (Fig. 50・51)

1はガラスの小玉で内部に細かい気泡が多く入る。色調はライトブルーを呈している。TP29の排土中にあったもので、径が0.25mmの長さが0.55mmを測る。2は旧石器時代の遺物である。小型のナイフ形石器にあたり、側縁部と基部にプランティンを施し、切出形のナイフの形態をなす。石材は黒曜石を用いている。TP29の2層出土である。

この外、固化していないが同じくTP29の2層からは、不明青銅品(重量4.3g・長さ2.5cm・幅1.3cm)と3層より鉄滓(重量94.5g)の出土がある。(町田)

以上の他、TP36 2層から滑石製紡錘車も出土している。直径4.6cm、厚さ1.2cmで、中心部の穴の直径は0.8cmを測る。一方の面は穴の周囲がやや凹むようになっており、もう片方の面は中心部から周縁にかけてゆるやかな丸味をもって仕上げられている。(Fig. 51) (本田)



Fig. 50 その他の出土遺物

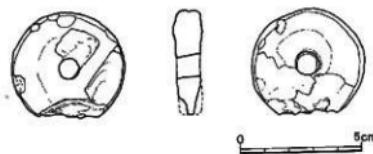


Fig. 51 TP36 2層出土遺物

### 三 瓦

第4次調査以降では注目すべき瓦の出土は殆どなかったと言っても過言ではない。  
従って、以下図示した大半の資料についての詳細は一括して表中で説明しておきたいが、前回の報

告書で一応の分類をしておいたので、今回もそれに従っておきたい。

出土した瓦は、軒丸瓦、丸瓦、平瓦の3種類である。

この内軒丸瓦は古代、近世各1点のみで、丸瓦は行基式と丸縁瓦の2種類に分けられる。また、平瓦は大きくは古代瓦と中世以降の瓦に大別され、さらに古代瓦は凸面調整の紋様から3種類に分類できる。平瓦の分類は以下のとおりである。

I類 凸面をカキ目状に調整する。

II類 凸面に縄目の叩きがあるもの

III類 凸面に格子目の叩きがあるもの

また、各種瓦の内、平瓦の分割後の側縁調整は以下の基準で分類する。

a 分割に際して残る破面を単に削っただけのもの

b 分割面の凸面側を面取りするもの

c 分割面の凹凸面側共面取りするもの

d 分割面の凹面側を面取りするもの

次に丸瓦の分割後の側縁調整は以下の基準で行う。

a 基本的に分割面をそのまま残すか、凹面側を小さく面取りする。

b 分割面の凸面側を大きくヘラ削りする。

c 分割面の凹凸面に小さな面取りを行なうもの。

d 側縁が鉛直方向に向くもの。

なお、その他の表中の分類の中で使用する語句は基本的には奈良国立文化財研究所、及び佐原 真の論文に従う。

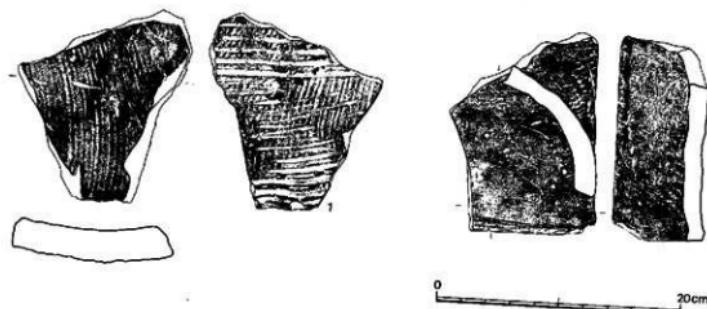


Fig. 52 T P29 2層出土瓦実測図 (1/4)

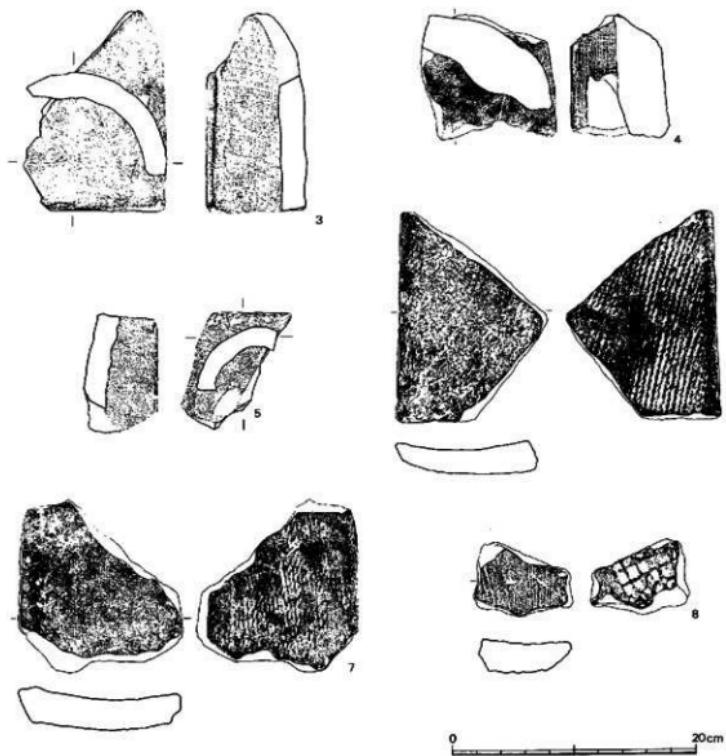


Fig. 53 TP29 3層出土瓦実測図 (1/4)

TP29からもあまり特筆すべき瓦は出土しなかった。またその量も3層から合計で66kg程が出土したにすぎない。また瓦も、小さい破片や、大きくとも調整痕が殆ど観察されない程度減した資料が大部分であり、図示出来うるもののが少ない。

平瓦はIとした凸面にカギ目状調整を持つものが最も多く、縄目の叩きがあるII類がこれに次ぐ。III類とした格子の叩きを持つ資料は殆どなく、この傾向は前回報告したことと一致する。

丸瓦はやはり行基瓦が殆どであり、丸縁瓦はこのトレンチでは見られない。

色調は黄褐色や赤褐色のものが多く、灰褐色のものも見られる。焼成は一般的に甘いものが多く、堅微なものは少ない。

同じトレンチから出土した瓦2点、明治時代まで瓦を焼いていたという場所で採取した粘土について

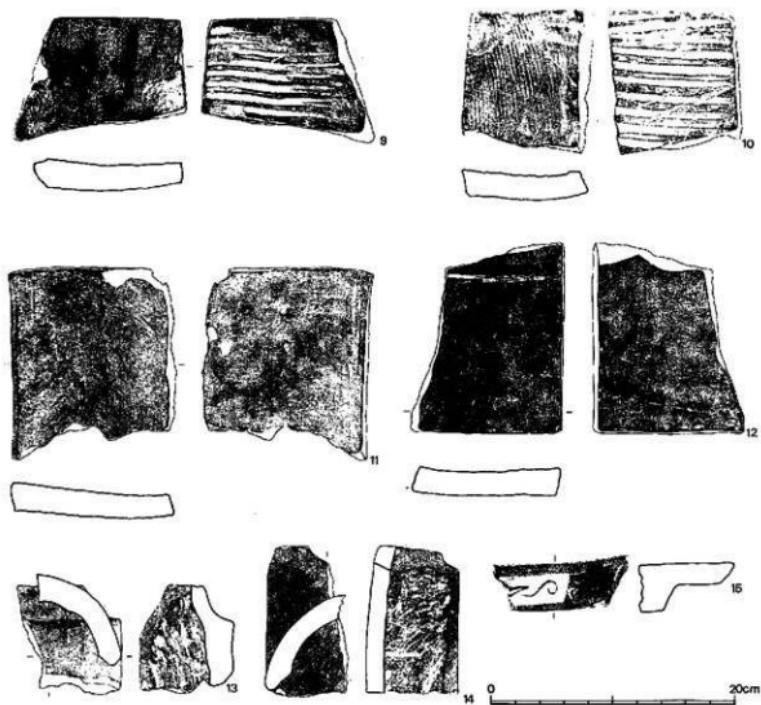


Fig. 54 T P30 表土瓦実測図 (1/4)

て胎土分析を行なったところ、それぞれ中に含む成分に相違が認められたという結果がでた。

まだ瓦窯址も発見されていない上、分析資料が少ないので結論を出すことは出来ないが、原料の粘土の採取場所が異なるだけの問題なのか考慮する必要がある。

T P30からは、これまでの大部分を占めていた古代瓦に混じって、灰黒色で焼成が良く、薄く硬質のタイプの資料が含まれる。平瓦と丸瓦があり、丸瓦は何れも玉縁タイプである。平瓦、丸瓦共に成形にあたっては、凹面に布目が認められず、凸面調整はヨコナデのみである。また胎土に多量の雲母を含むなど、明らかに時期差が認められる。中世から近世までの資料を含んでいるものと思われる。

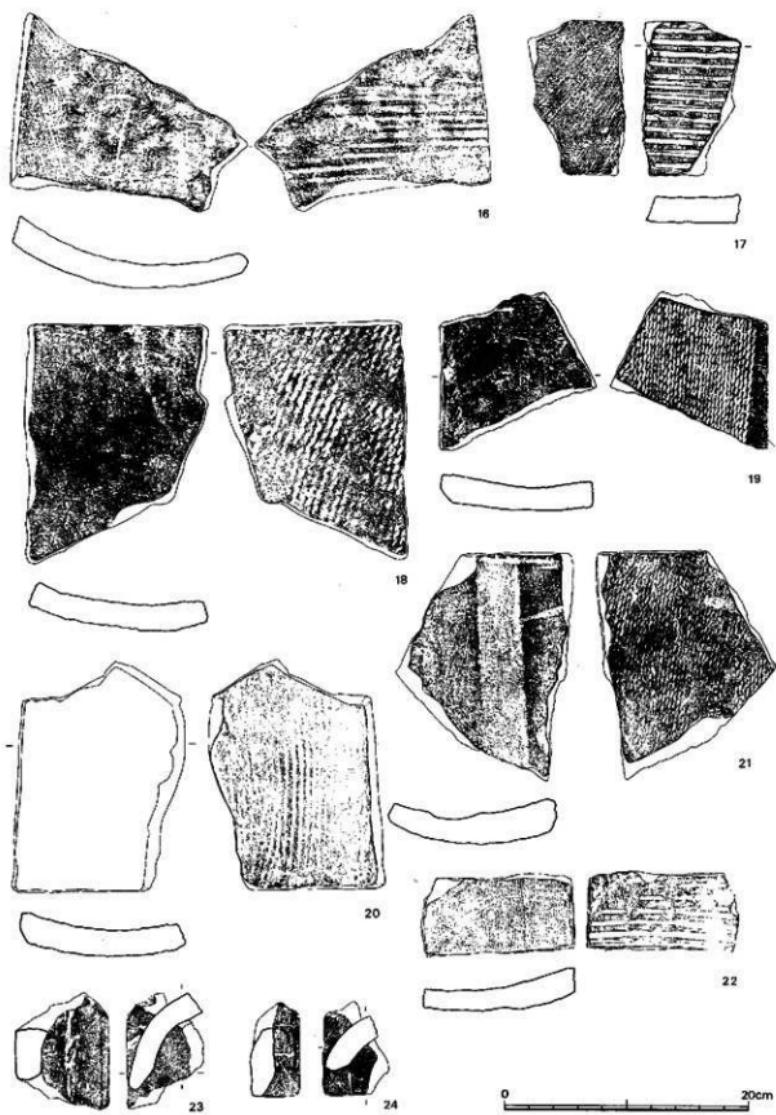


Fig. 55 TP 30 柱穴内及び2層出土瓦実測図 (1 / 4)

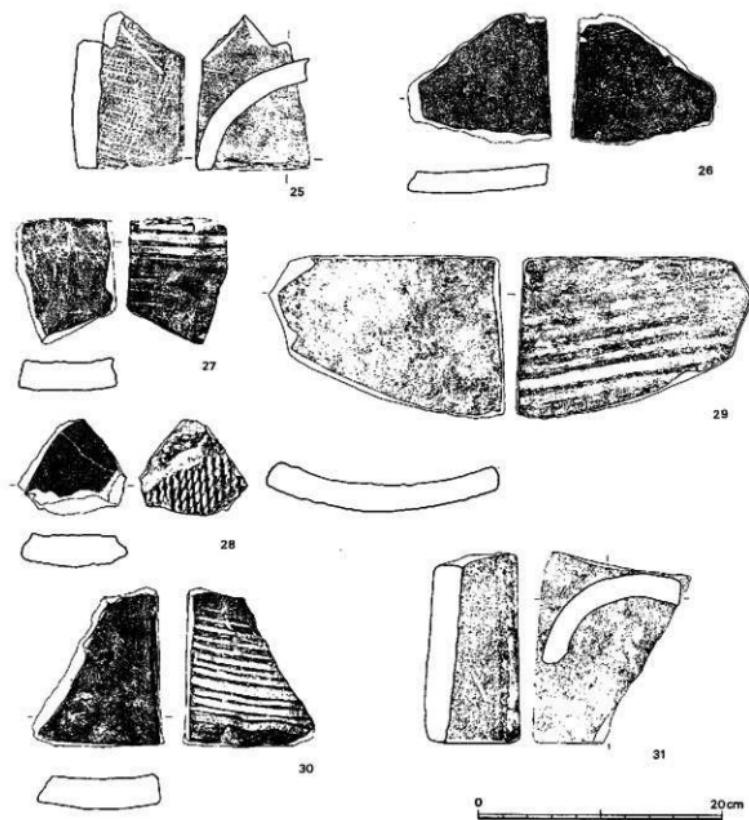


Fig. 56 TP31・TP32 出土瓦実測図 (1/4)

32は4調査で出土した唯一の軒丸瓦である。

これまでにこの種のものは11個が出土している  
にすぎない。外区外縁部のみが残るだけのため  
全容が不明であるが、これまで出土した資料と  
同じタイプのものであれば、直径は15.5cmで、  
外区外縁には凸縫鋸齒文を、外区内縁には24の  
珠文を巡らせる。中房には1+6の蓮子を持ち、  
弁区には8弁の蓮華文を配する、所謂平城宮  
6284A型式のタイプである。(高野)

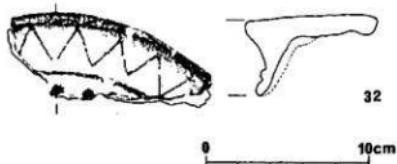


Fig. 57 軒丸瓦実測図 (1/2)

Tab. 5 地区別瓦片出土表

出 土 区	丸 瓦			平 瓦						計(kg)	
	玉縁行基		灰	I 瓦		II 瓦		III 瓦			
	灰	赤		赤	灰	赤	灰	赤	灰		
TP-1 H 1		0.1		0.2						0.1 0.4 0.2	0.1 0.9
TP-2 H 2 H下		0.2		0.2						0.8 0.1	2.0 0.1
TP-3 H		0.4									0.4
TP-6 下部 H 6 H 6 H 拡張 6 下部 II 層 6 斜面表土 6 上部敷石直上	1.2 0.6 0.3 0.1 0.1	0.1 2.2 0.3 0.4 0.2	0.1 0.1 0.1 0.1	0.5 0.7 0.1 0.1	0.2					1.2 2.6 0.5 0.9 1.0	0.5 6.7 1.1 0.2 2.1
TP-7 II 7 拡張		1.4 0.3	0.4 0.7	1.4		0.1				3.7 1.4	8.1 2.4
TP-8 II 層		0.1	0.3		0.1					1.6	0.4
TP-9 II 層 9 溝 内	0.8 0.2	0.5 0.1	0.8 0.1		0.2					2.5 0.1	5.3 0.6
TP-10 10 潟 池 10 潟 池 表層 10 II 層			0.3							0.3 0.1 0.1 0.3	0.1 0.4 0.1 0.3
TP 1~TP小計	5.9	1.3	7.2	0.2	1.7	0.2	0.1		18.1	4.7	39.4
TP 29 II III IV 擴張	0.5 13.4 0.1 1.7	2.2 2.8 0.6 2.2	0.6 18.7 0.2 0.2		3.2 12.6 0.2 0.4	0.2 3.6 0.7	0.5 0.2		3.0 10.1 0.2 0.4	0.4 1.5 1.1 0.3	13.9 65.6 1.1 5.2
TP 29 拡張 III 層		2.5	0.9	2.9		1.9	0.2			1.2	0.4
TP 29小計	0.5	19.9	4.3	27.7	2.2	18.3	4.0	1.2	0.2	14.9	2.6
TP-30 II 北 II 南 表土 南 拡張 H 南 拡張 II 層 西 II 層 I 西 II 層 混乱 西 捩 亂 西 拡張 H 東 拡張 H 東 拡張 II 層 東 捩 亂 Pit 2 新 Pit 2 Pit 3 Pit 4	4.2 0.2 0.1 1.5 0.7 0.4 0.7 0.4 0.6 0.4 0.2 0.2 0.2 0.3 0.3 0.3	0.6 0.8 0.2 0.2 0.9 0.1 0.4 0.1 0.6 0.6 0.1 0.1 0.1 0.1 0.1 0.1	12.5 0.2 0.2 23.2 0.9 0.9 1.5 0.9 0.6 0.6 0.5 0.5 0.5 0.3 0.3 0.3	0.4 0.5 0.1 0.7 0.4 0.1 0.5 0.1 0.6 0.5 0.7 0.3 0.7 0.3 0.3 0.3	4.6 0.5 0.1 5.4 0.1 0.6 0.1 0.6 2.5 4.6 0.2 0.2 0.7 0.3 0.2 0.2	0.6 0.5 0.2 2.5 0.1 0.5 0.7 0.5 4.6 4.6 0.2 0.2 0.7 0.3 0.2 0.2			6.5 1.4 0.1 10.1 1.3 0.8 10.1 0.1 0.7 8.9 0.7 0.3 0.1 0.1 0.1	2.9 3.0 0.3 65.6 1.3 3.8 49.3 0.1 2.9 12.8 0.9 1.1 1.2 1.6 1.1 1.6 7.5 0.1 1.0 1.7 1.5	32.3 6.2 0.8 1.6 49.3 3.8 12.8 0.9 2.9 12.8 0.9 1.1 1.2 1.6 1.1 1.6 7.5 0.1 1.0 1.7 1.5
TP 32小計	1.1	8.8	2.2	45.6	2.6	16.8	4.8	4.9		22.5	16.9
TP-31 II 層				0.2						0.1	0.1
TP-32 II 層 III 層	2.5 0.5	0.1 0.1	3.0 1.4	0.2	1.1 0.1	0.4				2.5 0.5	9.8 2.7
排 土		1.5	0.2	2.1	0.1	0.2	0.2			3.0	0.3
合 計	1.6	39.1	8.2	87.2	5.3	38.2	9.6	6.2	0.2	61.6	24.7
											281.9

Tab. 6 各区出土瓦計測表

## 平瓦観察表

図 番号	出土 区	焼作 技法	横骨 市 粘土 種目	系切 方向	布目余数 縦 横	焼 處理	瓦 性			色 製	焼成	油 上	凸面原 体種類	備 考
							厚	長	幅					
Fig. 53 1	TP29-II層			縱	18 20			2.4		灰褐色	良		I類	焼成時のゆがみ
Fig. 54 6	TP29-III層					b		1.9		黄褐色	甘い		II類	ローリング
Fig. 54 7	TP29- III				22 14	b		2.4		灰黄色	甘い	石英社	II類	
Fig. 54 8	TP29- III			縱		b		2.4		明灰色	甘い		III類	
Fig. 55 9	TP30- 表土	桶巻	2.7		26 20	a	1.9			赤褐色	甘い	石英粒	I類	
Fig. 55 10	TP30- 表土	桶巻	3.3	縱	34 24	b a	2.1			赤褐色	良		I類	
Fig. 55 11	TP30- 表土				無 無	a a	1.8			暗灰色	良	石英・雲母	無改	硬瓦質凹面 岩自未使用 硬瓦質・凹面 岩自未使用
Fig. 55 12	TP30- 表土				無 無	a a	1.6			暗灰色	良	雲母	無文	
Fig. 56 16	TP30-pit1	桶巻		縱		a		2.2		黄褐色	甘い		I類	右縫じ痕
Fig. 56 17	TP30-II層	桶巻		縱		a		1.8		赤褐色	良		I類	
Fig. 56 18	TP30-pit2			縱		a		2.0		黄褐色	甘い		II類	高い縫目
Fig. 56 19	TP30-pit2	桶巻	3.1		25 20	b	1.9			暗黃褐色	良		II類	
Fig. 56 20	TP30-pit2			縱	36 32	b	1.9			黄褐色	甘い		II類	
Fig. 56 21	TP30-II層	桶巻	3.4	縱	36 32	a	1.9			暗黃褐色	良	少量の石英 雲母	II類	
Fig. 56 22	TP30-II層	桶巻	2.5	縱	20 18	d	1.8			灰褐色	良		I類	表面に灰ゆき
Fig. 57 26	TP30-II層					c	1.9			灰黑色	良	雲母		硬瓦質
Fig. 57 27	TP31-II層				22 20	a				灰褐色	良		I類	
Fig. 57 28	TP32-II層	桶巻						2.2		黑灰色	甘い		II類	
Fig. 57 30	TP32-III層						a	2.0		赤褐色	甘い		I類	
Fig. 57 31	TP32-III層			縱		c a				赤褐色	良			

## 行基瓦観察表

図 番号	出土 区	粘土 種目	系切 方向	布目余数 縦 横	焼 處理	瓦 性			重量 円筒 広幅 狭幅	色 製	焼成	油 上	凸面調整	備 考
						厚	長	幅						
Fig. 53 2	TP29-II			24 26	a a	1.9				赤褐色	甘い		ヨコナデ	
Fig. 54 3	TP29- III	2		30 30	d a	1.9				ノ	甘い			
Fig. 54 4	TP29- III			28 18	c	1.8				灰褐色	良		ヨコナデ	焼成時にゆがみ
Fig. 54 5	TP29- III			26 22	a a	2.7			10	茶褐色	良	精選	ヨコナデ	
Fig. 55 14	TP30表土			無 無		d	1.5			灰黑色	良	雲母		
Fig. 57 25	TP30II層			30 30	c a	1.9			14	暗茶褐色	良		ヨコナデ	鏡面あり
Fig. 57 31	TP32III層			26 26		d	1.8		16	ノ				

## 玉磚丸瓦観察表

図 番号	出土 区	粘土 種目	系切 方向	布目余数 縦 横	焼 處理	瓦 性			重量 円筒 広幅 狭幅	色 製	焼成	油 上	凸面調整	備 考
						厚	長	幅						
Fig. 55 13	TP30表土			無 無		a	1.9			灰褐色	良	雲母	ヨコナデ	
Fig. 55 23	TP30II層			ノ ノ	b		2.0			ノ	ノ	雲母	ヨコナデ	
Fig. 55 24	TP30II層			ノ ノ	b		1.8			ノ	ノ	ノ	ノ	

## IV まとめ

時代は大分異なるが、ここに当該地付近を描いた古図が2枚残っている。幕末に編集された『宅岐名勝圖誌』<sup>21</sup>の中に描かれた絵図がそれであり、一枚は郡城跡を含めた国分周辺の図でもう一枚には国片主神社の祭礼の模様が描かれてある。そしてこれらの図には何れも国片主神社の西北後方に阿弥陀寺という名前の小さな建物が2棟見える。遠景であるために詳細は不明であるが、背後に低い山を持った狭い範囲に建てられているのが分かる。建物は何れも合掌作りで、1棟は屋根方向を南北にした梁間、桁行共に1間の小さなもので、今1棟は屋根が東西に長い。梁間は2間で桁行は2間以上あるよう見える。

建物の前面にはなだらかな畠らしきものが見えるが、この場所が現在町営住宅になっている平坦地と思われる。しかし図で見る限りその西側までは描かれていないようで、残念ながらその付近の旧地形は分からない。(Fig. 58, 59)

図の説明には「阿弥陀寺 国分寺跡之」とあり、この場所が旧国分寺の跡であると明確に記してある。『宅岐國統風土記』<sup>22</sup>によると、寛文二年（1662）頃、松浦藩松浦半左エ門によって旧国分寺跡が何時の頃か荒廃し、釈迦堂と言う名前のみが残っていたのを憂え、国分寺再興の計画がたてられた。そしてその後亨保八年（1724）、阿弥陀寺円巖和尚によって寺号を交代することになったという。つまり、阿弥陀寺の所在地であった中野郷西触に国分寺を、旧国分寺の場所に阿弥陀寺を移すことにしたらしい。その理由としては、阿弥陀寺に付属していた新田によって経済力をつけることにより、由緒ある国分寺を再興する意図であったと言われる。いずれにせよ、寺号の交代は実現し、旧国分寺には阿弥陀寺円巖和尚によって小堂が建立されたようである。

この阿弥陀寺の建物や寺地の規模については下記のような記述がある。

庄  
阿弥陀寺跡  
國分寺跡  
寺  
寺地



Fig. 58 宅岐名勝圖誌に見える宅岐國分寺跡

寺  
内  
外  
寺  
寺地

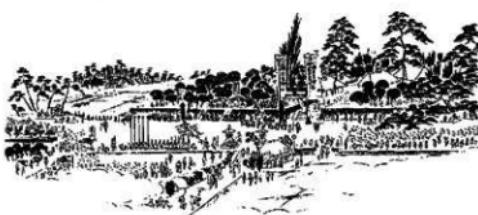


Fig. 59 宅岐名勝圖誌に見える宅岐國分寺跡

本堂	南向瓦葺、梁行式間、桁行三間半
薬師堂	同向茅葺、梁行壱間五尺、桁行式間
境内	東西七十六間、南北六十間、周囲三百九間
寺地	東西二十五間、南北十六間
山林	東西四十五間、南北六十間

この説明を先の『宍戸名勝図誌』に描かれた図を見ながら現在の地形測量図と比較してみよう。

まず、境内であるが、東西七十六間(136.8m)は、現地形図から判断すると西限は忠魂碑西側あたりと考えられるから、そこから計ると東側は旧道を越えた現雜木林まで伸びることになる。一方南北六十間(108m)は、北限は忠魂碑北側を東西に横切る空堀状の道路付近に設定すると、南は国片主神社北側の空堀を西に延長した位置くらいに相当する。(Fig. 60)

次に寺地は東西二十五間(45m)、南北十六間(28.8m)と非常に小さい。恐らく本堂と薬師堂が建てられていた場所周辺のみであると思われ、その地区はSB1, SB7, SB8を含むだけの狭い範囲であったことが推定される。

次に山林の範囲であるが、東西四十五間(81m)、南北六十間(108m)は西限は忠魂碑西側で、東限は現山林の境の旧道までとなり、南北は境内の範囲と一致する。

これらの数値が旧鷲分寺の寺域を考える上でどの程度参考になるかは分からぬが、仮にこの数値を旧鷲分寺の寺域に近いものと考えると、寺域は最大では東西が山林をも含むが、南北は現国片主神社北側空堀の延長部分まで納まることになる。

この現国片主神社は宍戸島に二十四座あった式内社の一つに比定されているが、『宍戸名勝図誌』は次のように記している。「国片主神社ハ村の産神にて天満天神といへりしを、延宝四年(1676)の改に国分と称する村の名を以て、式(延喜式)に所載の国片主神社なりとす。然れども古来の札に皆天満宮とのみありて、国片主の社号なし。中略 今之社地ハ宍戸・石田両郡の界、昔領主の館にて廻り掘りなりし、今埋れり云々」であり、本来この地が国片主神社ではなかったことが分かる。その前にについては、その北側と東側には幅2m、深さ2mほどの空堀が周囲を取り囲んでおり、西側にも空堀は現在見受けられないものの高さ2m程の土塁が巡らされていることを考慮すると、且ては豪族の居館跡であった可能性が高い。

昭和62年に実施した町道拡幅に伴う範囲確認調査の際に、この推定期館跡の土塁の西北隅に設定したTP6では、前述した如く空堀と土塁の中から8世紀中頃まで遡る須恵器片が若干出土した。これらの須恵器の時期がそのまま居館に関係するのかどうかは分からぬが、氏寺を鷲分寺に転用したという宍戸直の居館跡であった可能性も否定できない。今後可能であれば何らかの調査が望まれる。

ところで、2棟あった建物の内、本堂は南向き瓦葺きであったことが書かれている。その規模は梁行式間、桁行三間半といふから3.6m×6.3mということになる。

もう1棟はやはり南向きで茅葺き、規模は梁行壱間五尺、桁行式間といふから2.7m×3.6mとさらに小さい。『宍戸名勝図誌』の図では小さい建物が南側に描かれており、図と建物の規模が説明通りな

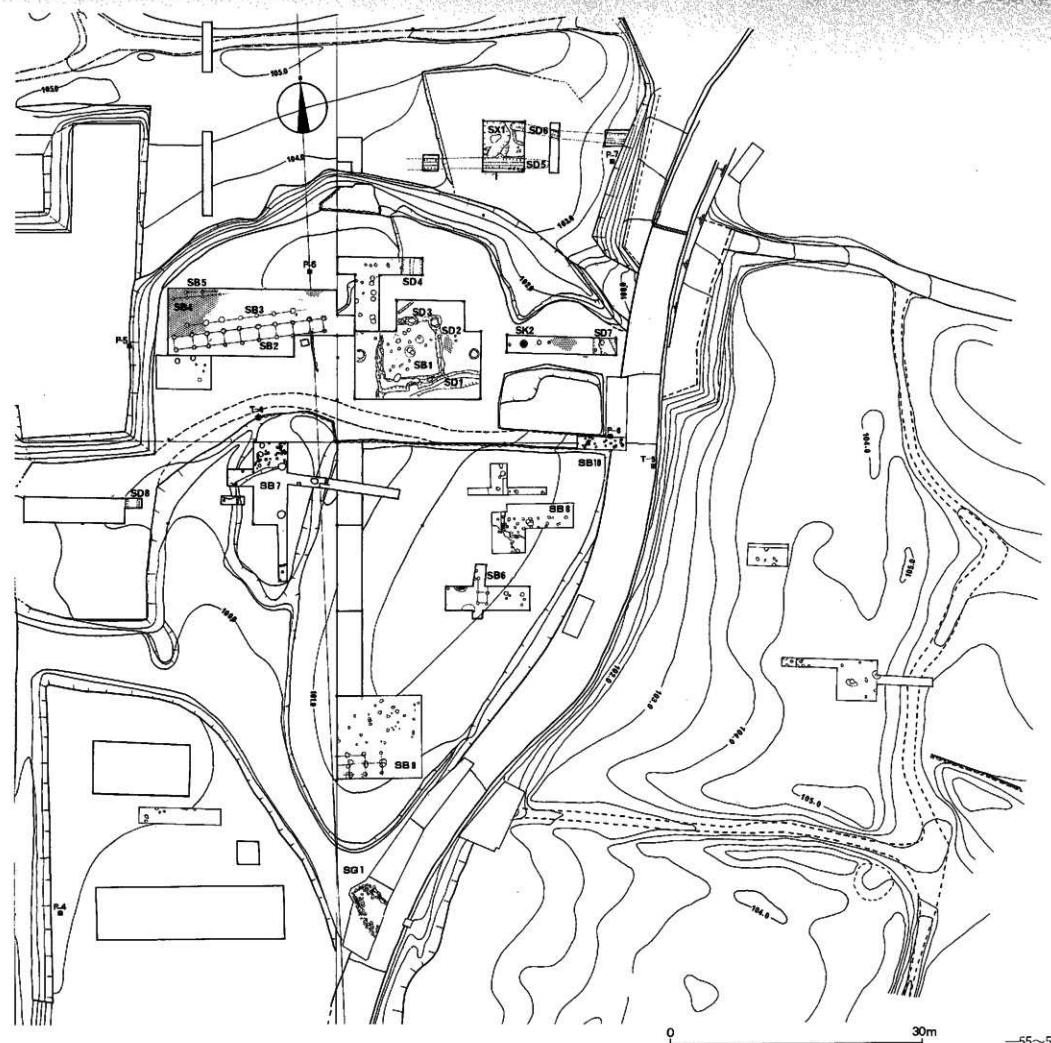


Fig. 60 遺構配置図 (1/400)

らばこの小さい建物が薬師堂に相当し、前者の建物が本堂になることになる。

これらの位置関係と発掘調査の成果を重ねて見ると、位置的には薬師堂がSB7付近になり、本堂がSB1付近に相当することになる。両区域からは中世以降の瓦が出土するから十分うなずける。

また、調査の結果では、SB1、SB7、SB8相当場所には版築基壇が認められる。版築は礎石を置くための目的で築かれたものであろうから、かつてはこの場所に礎石が置かれており、且つ瓦葺きの建物があったはずである。(Fig. 60)

礎石のことについて『巣岐名勝図誌』は次のように記している。「統風土記云、往古の礎六十四あり。丸柱の跡方壱尺七寸。但柱跡なきもあり。就中東の門柱の礎、東西壱尺八寸、南北二尺、丸柱の跡方壱尺八寸、西の門柱の礎、東西二尺三寸五分、南北二尺五分、丸柱の跡方壱尺八寸、両石去ること四尺三寸二分、本堂の南に去ること八尺一寸。今見るに、此の石近世動かしたものにて、両石の間を以って門の間尺など定めかたし。また石數も六十四とあれとも、今中郷因分寺に引移したるものあり。…今雖然とせしは二十余はかりなり。…」とある。礎石は現在ではさらに散逸し僅か14個が残存しているにすぎないが、重要なことは名勝図誌の中に塔の心礎と思われる石が描かれていることである。

舍利骨が径四寸、深さ八歩というからかなり小さなものであるが、心礎の可能性は高く、小さいながらも且つての塔があったことを示す資料であろう。二正門の礎石としての説明であるが、すでに名勝図誌でも原位置ではないことを記している。つまり旧嶋分寺が阿弥陀寺に変更された頃にはまだ、基壇と心礎を含む礎石は残っていたことが分かる。だが、その後この心礎がどうなったのか不明である。(Fig. 61)

巣岐嶋分寺があったと推定している場所は、芦辺町本村触字中野1348番地を中心とした位置にあり、これは且つて故山口麻太郎氏がその研究の中でも述べられている場所である。<sup>註3</sup>周辺は標高100m前後の台地であるが、広範囲にわたる平坦地があったわけではない。嶋分寺推定地西側は現在忠魂碑によって旧状が不明であるが、それを建立するにあたり山を削ったあとが等高線の流れから推定される。また、現在畑地になっている場所もかつて平坦地を作るための造成をした痕跡がTP38のトレンチで確認されており、現在町営住宅になっている場所付近は、『巣岐名勝図誌』ではおだやかな田園風景になっているが旧地形は決して平坦ではなかったことが考えられる。

巣岐嶋分寺は、当初巣岐直の氏守として建立されたことが記されているが、寺域を確保するために必要最低限の造成を行なっているわけである。しかし、造成にも限度があったものと見て、全て平地にした場所のみが利用されたのではない。いまだその性格は確認はできないが東側の山林にも8世紀代の須恵器が一括して出土したことは、この雑木林にも何らかの遺構があったことを示している。



Fig. 61 巢岐名称図誌記載礎石

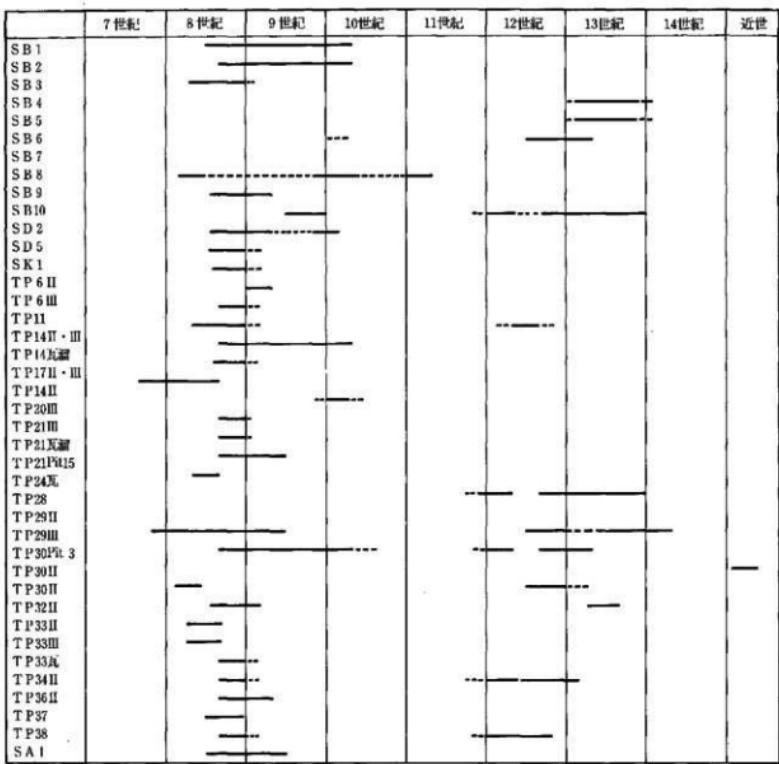


Fig. 62 遺構別出土遺物時期変遷図

Fig. 62はこれまで調査したトレンチ内、及び確認した遺構から出土した遺物の時期をもとにした輪分寺の時期別変遷図である。

出土遺物から判断する限り、当該地における時期的変遷は大まかに3期に分けられる。

第1期は8世紀中頃から出現する。直接的な遺構に伴うものではないが、SB 8を含むTP33、TP37、TP21 3層中のピットに含まれる。

第2期は8世紀末から9世紀前半頃にピークを持ち、11世紀初頭頃まで続く時期で、建物址を始め各種遺物が最も多く出土する。この時期の遺構としては、SB 1, SB 2, SB 3, SB 9, SD 2, SD 5, SK 1など、殆どの遺構がこの時期に含まれる。

第3期は12世紀始め頃から13世紀に至る時期で、主に各トレンチでも2層から出土する。建物址としてはSB 4, SB 5, SB 10が含まれる他、忠魂碑西南の畝でもこの時期の遺物は表採できるなど、

かなり範囲が広がる。

### 壱岐島分寺の成立と終焉

壱岐島分寺の成立について、記録の上から今一度確認をしておきたい。

壱岐島分寺が壱岐直の氏寺から転用されたという記録は、『延喜式』<sup>注1</sup>（玄蕃寮）に「壱岐島直氏寺為島分寺。置僧五口。」とある。これによって壱岐島分寺は新たに建立された寺ではなく、壱岐直の氏寺を転用したお寺であったことが知られる。また、その維持のために、『延喜式』<sup>注2</sup>（主税式）には「凡壱岐島島分寺法会布施。供養料稻一万二千九百七十一束一把五毫。……中略……太宰府以管内諸國正税通計以充行。…中略…凡壱岐島島分寺仏壇供料稻一千三百二束八分。講師常供四千七百廿六束。以算前國正税每年充行。」

とあり、島分寺の維持のために九州本土諸国の正税があてられていたことが記されている。

聖武天皇による国分寺建立の詔は天平十三年（741）であるが、『類聚三代格』<sup>注3</sup>によると天平十六年にはすでに壱岐島分寺建立の計画がなされているらしく、「詔。四畿内七道諸国…中略…。壱岐島分寺充肥前國。」の記述がある。しかしながら、『續日本紀』の記録に言う天平勝宝八年（756）諸国の国分寺に仏具の領賜がなされた時には、九州では筑後、肥前、肥後、豊前、豊後、日向の六国に対してであり、その中に壱岐島分寺の名はない。まだこの時は壱岐島分寺は機能していなかったのであろうと考えられる。その後、壱岐島分寺関係の記録としては、弘仁十一年（820）頃に編纂された『弘仁格式』<sup>注4</sup>の主税の項に、肥前國に壱岐島分寺料を計上してあるところから、この時には壱岐島分寺が機能していた可能性が推定されている。

この他には、やはり『類聚三代格』齊衡二年十一月九日（855）太政官符に、天平勝宝七年（755）大隅・薩摩・対馬・壱岐・多々良の因島の講師を停止したが、このほど大隅・薩摩・壱岐に統いて対馬の講師を復する旨の記録がある。壱岐島分寺の講師は対馬に先立って復されたということであるから、少なくとも855年以前には壱岐島分寺は所在していたことになる。

つまり、記録の上から判断する限り、壱岐島分寺は9世紀の前半頃、遅くとも9世紀後半には壱岐直の氏寺から官寺に転用していたことになる。

発掘結果から見ると、8世紀中頃にはこの地の利用が始まったのは確実であるが、明確な建物は確認できない。しかし8世紀後半になると遺物、遺構とともに増え始めており、8世紀末から9世紀始め頃にピークを迎える傾向が指摘できる。

これらの事実と記録とを照合すると、8世紀中頃には壱岐直に關係する建物がまず建てはじめられ、9世紀始め頃までに島分寺に転用した結果と判断すると、記録とほぼ合致することになる。つまり、壱岐島分寺が官寺として機能し始めたのは9世紀始め頃になるものと推測される。

律令制の公地公民制も莊園の増大によってくずれはじめ、またそれに伴って、諸国の国分寺も衰退の一途をたどるというのが通説である。

九州諸国の国分寺の例を見てみよう。まず、筑前国分寺の場合、塔・金堂は11世紀には姿を消すと

あるからそのころにはすでに国分寺の機能は果たされていなかったことが推定される。

筑後の国分寺は良く分かっていない。肥前の国分寺は国府が9世紀後半から10世紀には衰退する<sup>註12</sup>あるからやはり同じような時期には衰退したものと考えられる。

肥後国分寺は平安末期まで存続したことが記録の上でも確認されているが、国分尼寺は10世紀に焼亡したとある。<sup>註13</sup>

豊前国分寺は平安初期がピークで以後衰退するらしい。<sup>註14</sup>

薩摩国分寺は13世紀まで機能しており、最も長く続いた例であろう。<sup>註15</sup>

壱岐鷦鷯分寺には中浜花という莊園があり、安和三年（970）『太宰府資料』<sup>註16</sup>の上世編に天満宮安樂寺の草創に際してその莊園を寄進したという記録が残っている。この頃にはまだ他にも莊園を持っていた可能性もあることから経済的にはまだ鷦鷯分寺として機能していたことが考えられる。

しかし「壱岐は辺地であったから有力な貴族や武人も壱岐には永住しなかった。ために神地も寺領も中央あるいは上部に吸収されるだけで、壱岐鷦鷯分寺の没落の一原因がここにあったと思われる。」<sup>註17</sup>という指摘もあり、この時期以降壱岐鷦鷯分寺は衰退していくのであろう。

一方、そのような要因とは別に外敵の侵攻による結果荒廃し、そのまま衰退を余儀なくされる場合も考えられる。

壱岐の場合はどうであろうか。記録によると、直接的に壱岐が外寇にあった例は古代においては2回認められる。まず、1回目は新羅賊による外寇である。寛平六年（896）9月の侵略によって壱岐島の官舎がことごとく焼失したとの報告が太宰府になされている。國衛関係の建物が焼失したものと思われるが、この時の記録に鷦鷯分寺についての記述はない。

2回目の外敵による侵略は寛仁三年（1019）の刀伊の入寇である。所謂女真族による侵攻で、この時は壱岐守藤原理只が殺害され、島全体も壊滅的な被害をうけている。<sup>註18</sup>記録によると、殺害された人民百四十八人、追いつかれたる女二百三十九人、遺留せる人民三十五人とある。数字が細かく記載されているが、この数字が正しければ当時の壱岐の人口は僅か422人程度しかならない。

律令制の崩壊とともに防人もいなくなり島の人口も減少したものであろうか。<sup>註19</sup>

沢田吾一氏の研究によれば、西海道諸国の人口は「延喜式」によれば692,800人とある。ただ、残念なことにこの数字には対馬と壱岐が含まれていない。しかし、例えば壱岐島中央部においては6世紀から7世紀にかけて集中的に古墳群が築かれ、中には長さ90mクラスの前方後円墳や直径50m、高さ14mを越す大古墳も數基含まれている。時期的には刀伊の入寇から4世紀程さかのぼるから単純には比較できないが、500人にも満たない人口で築造できるものであろうか。<sup>註20</sup>

ともあれ、この外寇にあっては、壱岐島の講師常党ひとりが脱出して状況を太宰府に報告したという。この後常党は、太宰府の注進状によって「…賊徒三たび襲う度毎に撃ち返す。後、数百の数に堪えず、一身逃脱す。身は在俗に非ずと雖も、その忠、隠るべからず。」として朝廷から論功行賞を受けている。

講師とは「この国講師は、はじめ國師といひ、諸国の國衙に置かれた官僧で、その國の寺院・僧尼

を監督し、国衙での国家の祈禱などを行なう職務をもち、国分寺の造営などにも当たったが、延暦十四年（795）に名を講師と改称し、併せて新たに読師を置いて、寺院の内部の監督と国家のため禪行を修せしめることとしたものである。」<sup>23</sup>とある。この講師常覚が鷲分寺の僧侶であったかどうかは不明であるが、その職種から判断してこのときには鷲分寺はまだ機能していたのであろうか。

前回報告書では、遺物の出土状況から11世紀にはすでに国分寺としての機能は無かったかも知れない記しておいたが、その後の調査でも11世紀台の頗るな遺物は出土していない。次に一定量の遺物が出土し始めるのは11世紀末から12世紀にかけてであり、ここに約1世紀程の空白がある。

宅岐鷲分寺は11世紀始め頃にはその機能を終えたものと推定される。その原因に律令制そのものの崩壊と外敵による侵攻が考えられる。

ところで、宅岐鷲分寺は、宅岐直の氏寺を転用した記録が残っていることは前述したが、宅岐直とはどのような人物なのであろうか。

8、9世紀の地方豪族の中に「伊吉（伊岐・宅岐）宿禰」、伊岐（宅岐）直の名前が登場するが、宅岐直はもともと宅岐ト部が基底にある人物ではないかとの研究がある。<sup>24</sup>『日本書紀』によると「宅岐原主」の祖オシミノスクネが神代から龜トを奉仕し、子孫はこの祖業を伝えてト部になったという伝承があり、つまりは、オシミがト部となり、その子孫が「宅岐原主」や「伊岐宿禰」になったのではないかというのがその論旨である。

中国の有名な史書である『魏志倭人伝』の中にも記載があるように、宅岐の弥生時代遺跡からは実際にト骨の存在を示す遺物が出土している。<sup>25</sup>またその伝統は長く続いているものと思われ、その後6世紀から8世紀の遺物が出土する勝本町申山ミルメ浦遺跡から今度は龜トの発見があり、龜トをもって上番する宅岐ト部の存在が考古学的にも証明されることとなった。

つまり、宅岐ト部は、弥生時代以来の伝統に立脚する特殊技能者がその技術を生かして、時の朝廷にあって中央の神祇界で勢力のあった中臣氏の支配下に成立した伴部の一つであり、「宅岐直」はその後改称した人物になるのではないかということになる。

宅岐におけるト部の成立は6世紀末から7世紀の初め頃ではなかったかと推定されている。その時期は、前述した如く宅岐島の中央部にかなりの規模の古墳が築かれる時期である。また規模ばかりでなく、篠塚古墳からは半島製と思われる華麗な金銅製の馬具が出土するなど一方豪族には過ぎた遺物が副葬されている。その理由については、これら豪族が半島の國々と直接交渉した結果手に入れたものではなく、「大和政権は、磐井の乱などを教訓に、海上交通を技とする宗像や、兵站基地としての宅岐の豪族に、半島系の豪華な馬具や畿内の上器などを送って懷柔していた」との意見に代表されるだろう。

また、「おそらく6世紀にト部が成立する前から大和の王權と宅岐・対馬の族の間には政治的服属の関係は成立していた。それは族長を通じる間接的支配の形態であったであろう。」<sup>26</sup>という説は重要である。大陸に渡航するには神意を卜する「持衰」という人物が船に乗っており、大和朝廷の大陸との交渉や航海に重要な役割を果たしていたものと考えられている。この時期は半島では三国時代にあたり、

半島の土器、特に伽耶系や新羅系の土器が日本各地で多量に出土するなど、交流が活発な時期にあたる。それまで、ト骨の技術の伝統を保持していた壱岐の集団が、「持衰」としても微用され、やがてト部として組織成立化されていったものではないだろうか。

壱岐直はそのようなト部の系統から出自し、やがて地方豪族として大和朝廷から認められるに至った人物であろう。1序説でも述べた如く、笠原古墳と県下でも屈指の円墳である鬼の窟古墳の石室の設計が殆ど同一であり、また時期的にも地域的にもつながることは、この壱岐一族の一連の墓であることは殆ど間違いないことであると思われる。神意をトすることに長じたこの海洋集団は伝統的な大和朝廷との直接的な結びつきから、やがて氏寺建立に際しても特に平城宮に使用された瓦の版本を所望することが許されたものと思われる。<sup>2130</sup>

以上、発掘結果と記録を照合しながら縦々述べてきたが、基壇を持つ建て物がどのような性格のものであるかについては、いまだ判然としないのが現状である。

範囲確認調査は平成5年度も国庫補助事業として実施する予定であり、現町営住宅跡地がその対象地である。また何らかの遺構が出土するかも知れない。

調査結果を待って更に検討してみたい。(高野)

- 註1 後藤正恒・古野尚盛 文久元年(1861)『壱岐名勝圖誌』上・中・下名著出版 1975  
註2 『壱岐國統風土記』寛保二年(1942)  
註3 山口麻太郎 1977 「新集 国分寺の研究 第5巻下 西海道」所収  
註4 『国史体系』 1906 13巻所収 経済雑誌社  
註5 『国史体系』 1906 13巻所収 経済雑誌社  
註6 『国史体系』 1906 1巻所収 経済雑誌社  
註7 『国史体系』 1906 12巻所収 経済雑誌社  
註8 『国史体系』 1906 2巻所収 経済雑誌社  
註9 小田富士雄 1977 「古代寺院の研究」[九州考古学研究一歴史時代編]所収  
註10 『国史体系』 1906 12巻所収 経済雑誌社  
註11 森田勉 1977 「新集 国分寺の研究 第5巻下 西海道」所収  
註12 高島忠平・高瀬哲郎 1977 「新集 国分寺の研究 第5巻下 西海道」所収  
註13 松本雅明 1977 「新集 国分寺の研究 第5巻下 西海道」所収  
註14 森 貞次郎・横田義章 1977 「新集 国分寺の研究 第5巻下 西海道」所収  
註15 川口貞徳 1977 「新集 国分寺の研究 第5巻下 西海道」所収  
註16 竹内理三編 『太宰府資料』上世編 第五分冊  
註17 山口麻太郎 1977 「新集 国分寺の研究 第5巻下 西海道」所収  
註18 『日本紀略』には寛平七年と書いてあるが寛平六年の間違いであるとの指摘がある。 竹内理三 1970「古代編」『長崎県史』所収 長崎県  
註19 池内 宏 1933 「刀伊の入寇及び元寇」 国史研究会編輯 岩波講座 「日本歴史」  
註20 『小右記』寛仁二年 東京大学資料編纂所 1992 「大日本古記録」五 所収  
註21 清田晋一 「奈良朝時代民政経済の歴史的研究」  
註22 『小右記』寛仁三年 東京大学資料編纂所 1992 「大日本古記録」五 所収  
註23 竹内理三 1970 「古代編」『長崎県史』所収 長崎県  
註24 平野博之 1966 「對馬・壱岐ト部について」 古代文化 17-3  
註25 木村幾多郎 1979 「長崎県壱岐島出土のト骨」『考古学雑誌』 第64卷 第4号

- 勝本町教育委員会 1985 「カラカミ遺跡」 勝本町文化財調査報告書 第3集
- 註26 勝本町教育委員会 1989 「串山ミルメ浦遺跡」 勝本町文化財調査報告書 第73集
- 註27 平野博之 1966 「対馬・岩岐卜部について」 古代文化 17-3
- 註28 藤田和裕 1992 「県内古墳詳細分布調査報告書」 長崎県文化財調査報告書 長崎県教育委員会 第106集
- 註29 平野邦雄 1973 「九州における古代豪族と大陸」 古代アジアと九州 九州文化論集一
- 註30 芦辺町教育委員会 1991 「壱岐島分寺1〔〕 芦辺町文化財調査報告書 第5集

## V 付 章

### 壱岐国分寺跡出土瓦の胎土薄片作製観察およびX線回析試験報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

壱岐国分寺（長崎県芦辺町所在）は、島中央部の丘陵地に立地する。壱岐国分寺の詳細な建立時期については不明であるが、統日本紀などの文献史料によれば、壱岐直の氏寺を壱岐国分寺として転用したと記されていることや、これまでの発掘調査により検出された遺構・遺物などから8世紀～10世紀頃と推定されている。

今回、芦辺町教育委員会より壱岐国分寺跡から出土した瓦に含まれる鉱物の組成を明らかにして、瓦の生産地を推定することが当社に要望された。当社では、同教育委員会と協議の結果、先述の分析調査課題を考慮して、瓦の胎土薄片作製観察を行うこととした。また、壱岐国分寺跡から北方向へ約1km離れた位置に明治時代まで瓦が製作された窯跡（瓦焼場）が存在する。今回はその窯跡からも瓦片と粘土試料が採取されたので、壱岐国分寺跡から出土した瓦の比較試料として薄片作製観察を行うこととした。さらに粘土試料については、粘土鉱物組成を詳細に検討するためにX線回析を行わせて行うこととした。

#### 一. 薄片作製観察試料および分析方法

壱岐国分寺跡から出土した瓦試料2点（試料番号1～2）および明治時代まで操業していた窯跡（瓦焼場）から採取された瓦試料（試料番号3）について、含まれる鉱物の組成・組織を明らかにして、各試料の胎土の比較検討と焼成温度を推定する目的で、薄片を作製して偏光顕微鏡下で観察を行った。また、粘土試料（試料番号4）については、粘土鉱物の組成を明らかにするために、顕微鏡観察とX線回析を行った。

##### (1) 薄片作製観察

ダイヤモンドカッターにより試料を切断する。切断した試料を0.03mmの厚さまで研磨し、薄片プレートを作製し、顕微鏡下で鉱物組成・構造の観察を行う。

##### (2) X線回析

瓦焼場周辺採取の粘土試料（試料番号4）について、無定位法・定定位法・EG処理定定位法によりX線回析試験を行った。

##### a. 無定位法

無定位回析試験については、上記試料の乾燥した粉末をアルミニウムホールダーに装着し、次の条件でX線回析試験を実施した。

装置：島津製作所製XD-3A

Target : Cu (K $\alpha$ )

Filter : Ni  
 Voltage : 30KVP  
 Current : 30mA  
 Count Full Scale : 5,000c/sec  
 Time Constant : 1.0sec  
 Scanning Speed : 2°/min  
 Chart Speed : 2 cm/min  
 Divergency : 1°  
 Receiving Slit : 0.3mm  
 Scanning Range : 2~61°

全粉末試料は上の条件で回析試験を行ったが、ピークがスケールアウトする範囲の2θ区間についてCount Full Scaleを20,000c/secとして再走査させ、正確な相対強度が計算できるようにした。

#### b. 定方位法およびEG処理定方位法

粉末試料について純水で簡易水ひを行い、ガラス板上で風乾して定方位試料を作製した。Count Full Scaleを2,000c/s、Scanning Rangeを2~30°(2θ)とし、他は無定位回析試験と同一条件で回析試験を行い、とくに粘土鉱物の存在の確認を行った。さらに定方位法に用いた試料をEG(エチレンレコード)処理した後、2~15°(2θ)のScanning Rangeについて再度定方位法と同一条件でX線回析を行い、粘土鉱物を同定した。

Tab. 7 瓦胎土分析試料一覧および分析項目

試料番号	試料名	薄片作製観察	X線回析
1	西瓦溜出土(TP22)	○	
2	西瓦溜出土(TP22)	○	
3	瓦焼場周辺採取品	○	
4	瓦焼場周辺採取の粘土	○	○

## 二. 瓦胎土薄片作製観察

### (1) 結 果

#### 2. 1. 試料番号1 西瓦溜出土瓦(TP22)(図版2)

肉眼的に赤褐色を呈する部分と黄褐色で多孔質の部分からなり、鏡下でも組織が異なることから識別される。

##### 鉱物片

石英：中量～少量存在し、最大0.4mmの破片状を呈する。高温焼成によって生じたクラックがみら

れ、部分溶融組織を示す。

斜長石：少量存在する。最大0.2mmの他形粒状～破片状を呈する。比較的大型のものは周辺部から濃褐色化して針状ムライトを析出しているが、中心部に残晶が認められ、集片双晶が明瞭である。しかし、小型のものは完全に針状ムライト化されている。

カリ長石：きわめて微量存在し、粒径最大0.2mmの他形粒状を呈する。劈開・周縁に沿って溶化し、ガラス中に針状ムライトを析出している。

黒雲母：きわめて微量存在し、最大のものは大きさ0.15mmの短柱状を呈する。加熱により淡色化し、淡黄褐色～淡緑褐色の多色性を示し、直消光する。

緑簾石：きわめて微量存在し、0.05mm以下の他形粒状を呈する。

不透明鉱物：中量～少量存在する。大きさ0.2mm以下の他形粒状～短柱状を呈するものと、0.005mm以下の微晶質集合体となっているものがあり、後者は孔隙や溶化ガラスに伴われ、しばしば緑簾石様鉱物を伴っている。焼結体としたものの黒色鉱物は同質物である。

#### 焼成生成物

ムライト：少量～微量存在し、長さ0.025mmに伸長した針状結晶となっている。主に斜長石を交代し、一部は残晶が認められるが、大部分は針状ムライトに完全に交代されている。

溶化ガラス：中量認められる。素地となる粘土が溶融して生成されたもので、多量の大型の孔隙を伴っている。

焼結体：少量～微量存在し、粒径最大1.8mmの粒状～不規則形を呈する。微細な不透明黒色鉱物集合体で膠結されており、内部に石英細片を含み、孔隙を伴っている。

#### 基質

肉眼的に多孔質黃褐色を示す部分は、鏡下では最大2.0mmの不規則形の孔隙に富むのに対して、肉眼的に赤褐色を示す部分の孔隙は小型で少なく、斜長石・粘土・不透明鉱物を主体とする。色調・組織の差が原料粘土によるものか、焼成条件の違いによるものかは不明瞭である。いずれにもムライト化した斜長石や石英が同程度含まれる。

#### 推定焼成温度

石英に高温焼成によって生成したクラックと部分溶融組織がみられ、斜長石ムライト化が顕著であることから、瓦としては焼成温度が高く、1,250°C+と推定される。製品が多孔質となっていることから、おそらく瓦製品としては焼きすぎのものであろう。

## 2. 2. 試料番号2 西瓦溜出土瓦 (TP22) (図版3)

肉眼的に赤褐色（煉瓦色）を呈する瓦破片。

#### 鉱物片

石英：中量存在し、最大0.35mmの他形粒状および破片状を呈する。高温焼成によって生ずるクラックはきわめて少ない。大きさ0.6mmの集斑状を示す石英岩片が存在する。石英岩の源岩は花崗岩質岩の可

能性がある。

カリ長石：少量存在し、大部分は粒径0.3mm以下の他形粒状を呈する。例外的に大きさ0.8mmの破片状を呈するものもある。劈開・周縁に沿って溶化組織が認められる。

斜長石：微量存在し、粒径最大0.20mmの半自形粒状～破片状を呈する。加熱変化は不明瞭で、一部のものには劈開に沿って微量の溶化ガラスの生成が認められる程度である。集片双晶が発達している。

黒雲母：微量存在する。最大0.2mmに伸長した長柱状を呈する。加熱により淡色化したものと、酸化鉄に交代され赤鉄鉱化したものが認められる。

ジルコン：きわめて微量存在する。大きさ0.05mmの自形長柱状を示す。

#### 岩石片

珪質岩：微量存在し、大きさ0.2mm以下の円盤状を呈する。粒径0.02mm以下の微細な石英の集合体となっている。

#### 焼成生成物

酸化鉄焼結：微量存在し、最大1.0mmに伸長した偏平状～不規則粒状を呈する。円形の空隙に富み、黒色ガラス質物質で膠結されている。

#### 基質

大きさ0.1mm以下の石英・長石類に富む粘土で赤褐色を呈し、鉄分が多く含まれている。粘土鉱物は焼成されているため本来の性質を失い、鉱物種は同定不能である。

#### 推定焼成温度

長石類に部分溶融がみられるが、石英に加熱変化がみられない。1,150°C以下の焼成温度である。鉄分を多く含むことから高温焼成には不適当な原料である。長石類の溶融組織から、1,100～1,120°Cで焼成されたと推定される。

#### その他

試料番号1とはカリ長石と斜長石の含有比が異なり、さらに鉄成分の含有量が異なっている。

### 2. 3. 試料番号3 瓦焼場周辺採取瓦（図版4）

肉眼的に淡灰褐色を呈する瓦破片である。鏡下では鉱物片に乏しく、大型の岩石片に富む緻密な粘土質原料を使用している。

#### 鉱物片

石英：少量存在し、最大0.4mmの他形粒状を呈する。この他、大きさ0.7mmの集塊状石英集合体が粒状で存在する。石英は縫合状組織を呈し、脈石英に由来するものと思われる。石英片には加熱変化による組織はみられない。

斜長石：きわめて微量存在し、粒径最大0.15mmの他形粒状を呈する。加熱変化はみられない。

単斜輝石：きわめて微量存在し、粒径最大0.25mmの破片状を呈する。淡黄緑色を帯びた透明な鉱物で、多色性は認められない。劈開は一方向に発達する。

白雲母：微量存在する。長さ最大0.2mmに伸長した長柱状～葉片状を示す。劈開が発達し、本来の光学性を保持している。一部のものは弱い多色性を有している。

#### 岩石片

風化安山岩：微量存在し、最大3.0mmの亜円碟状を呈する。ガラス基流晶質組織を示し、斜長石部は淡色である。しかし、石基のガラス部は黒褐色化し、全岩が非晶質化していることから、新鮮な岩石ではなく、風化岩石片と考えられる。

凝灰質シルト岩：少量存在する。最大2.2mmの円碟状を呈する。石英細片・緻密質凝灰岩片・軽石質凝灰岩片等を含有し、基質は大きさ0.02mm以下の石英細粒と0.05mm以下の柱状～鱗片状セリサイトを含む微細な粘土である。下方ポーラー下では素地の粘土より淡色の淡黄褐色を示し、岩石片であることが識別されるが、直交ポーラー下では識別不能である。換言すると、凝灰質シルト岩は本試料の原料となる粘土と同質であることを意味している。

#### 焼成鉱物

瓦表面の黒色変色：表面から平均0.03mmは黒色であり、0.1mmまでの間は次第に黒色化が薄れて淡灰色の素地に移化する漸移帯となっている。黒色の原因は炭素の付着と思われる。瓦焼成の末期に不完全燃焼させ、いわゆる爐し瓦として製造されたもので、瓦の表面の強化と装飾を兼ねているものであろう。表面に小割れ目が存在する場合の黒色化は、0.35mm内部までおよぶ現象が観察される。

溶化ガラス：素地中には少量の溶化ガラスが存在し、最大0.6mmの骨片状を示し、化石片が溶化した形状を示すものと、割れ目を形成している孔隙中に不規則に存在するものの二種が認められる。

孔隙：素地中に少量存在する。割れ目を形成するものと、安山岩片・凝灰岩片の周囲が溶解して孔隙化したものが認められる。いずれも溶化ガラスを伴うことがあり、加熱による溶解で生じたものであろう。

#### 基質

大きさ0.03mm以下の石英・長石類に富む粘土で、淡黄褐色を呈する。粘土鉱物として最大0.1mmに伸長した長柱状～鱗片状セリサイトが比較的多く認められる。これらの鉱物を充填する基質は非晶質物質である。

#### 推定焼成温度

凝灰岩等の岩片の周囲が溶融した形跡を示すものの、石英・長石類・雲母鉱物等に加熱変化や溶融組織がみられない。とくに高温で比較的の変化がみられることが多い雲母鉱物に加熱変化がみられないことから、焼成温度は1,000°C以下と推定される。

#### その他

試料番号1および試料番号2とは素地の組成が異なり、火碎岩成分に富むと判定される。焼成温度は最も低い。また、表面加工を行った製品で、前述した2試料とは異なる技法で製造されていると考えられる。

#### 2. 4. 試料番号4 瓦焼場周辺採取の粘土 (図版5)

肉眼的に黄褐色を呈する粘土塊である。

##### 鉱物片

石英：少量存在し、最大0.6mmの破片状を呈する。

単斜輝石：きわめて微量で存在し、大きさ0.1mmの破片状を示す一粒が観察されるに過ぎない。

褐鉄鉱：全般的に水酸化鉄が基質中に染み込み、しばしば結核状に濃集している部分や、割れ目に濃集する現象が観察される。光学的に非晶質である。試料が肉眼的に黄褐色を呈する原因となっている。

##### 岩石片

凝灰岩：微量存在する。緻密質なガラス質凝灰岩で、大きさ0.4mm以下の円盤状を呈する。褐鉄鉱の染み込みで褐色を帯びているものが多い。非晶質で火山ガラスで構成されている。

##### 基質

石英：少量存在し、大きさ0.02mm以下の破片状を呈する。瓦試料と比較すると含有量は少ない。

セリサイト：微細ながら粘土鉱物として存在し、中量存在する。大部分は0.02mm以下の鱗片状または纖維状を呈し、一部は0.05mmに伸長した白雲母状を呈する。

微細鉱物：石英・セリサイトの粒間を充填する部分はきわめて微細で、複屈折の弱い鉱物である。次項に述べるX線回析の結果を参照すると、ハロイサイトはこの部分に存在するものであろう。

#### (2) 考 察

##### 試料番号1～3の瓦鉱物組成・組織の比較

試料番号1は斜長石とカリ長石の鉱物片が存在し、試料番号4の粘土とは異質である。

試料番号2は鉄分が多い点で試料番号4の粘土と類似するが、カリ長石が特徴的に含有されることで異質である。

試料番号3は原料的には試料番号4と共通する点が多い。試料番号4と比較すると石英細片の量が多く、鉄分が少ない。しかし、火山碎屑物を主要構成物としてセリサイトが多く存在する点が共通であり、同一地域で堆積した粘土を使用していると考えられる。

#### 三. X線回析(定方位およびEG処理定方位回析試験)結果

##### 3. 1. 回析試験の解析

X線回析試験の結果、多量の石英、少量のセリサイト、微量のハロイサイト、きわめて微量のカリ長石・斜長石が検出された。

X線回析結果については、以下の解析を総合して一覧表(表2)に示し、X線回析チャートを図1に示した。

### 3. 2. 1. 無定位法

多量の石英および少量のセリサイトが主成分鉱物として検出される。この他、微量のハロイサイト、きわめて微量のカリ長石・斜長石が検出される。

顕微鏡観察によると、石英の大部分は鉱物片として存在している。

Tab. 8 X線回析結果

試料番号	Se	Ha		Qz	Pl	Kf		
4	△	+		◎	±	±		

注 ◎：多量、○：中量、△：少量、+：微量、±：きわめて微量  
鉱物略号は顕微鏡写真説明と共通

回析チャートでは、バックグラウンドが高角側から低角側に次第に高まり、2θ:35°付近と20°付近で段がつく波動的な変化を示す。この現象は粘土鉱物のうちでハロイサイトまたはスメクタイト鉱物(モンモリロナイトなど)が存在する場合に特徴的にみられる現象である。定位法およびEG処理定位法によってスメクタイト鉱物は検出されていないことから、ハロイサイトによるものと判定される。カリ長石・斜長石は痕跡程度に最强線が検出されるに過ぎない。

### 3. 2. 2. 定定位法およびEG処理定位法

定位法では、簡易水ひを行った結果として粘土鉱物成分が濃集し、セリサイトとハロイサイトの回析線が強度を増して検出される。

セリサイト：雲母鉱物は近似した回析線を示すため、顕微鏡観察等により確認されなければならぬが、ここでセリサイトとした雲母鉱物は、水ひにより濃集する微細鉱物で、通常の黒雲母よりブロードな回析線を示すことから、一次鉱物としての雲母鉱物ではなく、粘土を構成するセリサイトと判定した。顕微鏡観察でも雲母鉱物はセリサイトとして存在し、X線回析結果と符号している。

ハロイサイトはカオリン鉱物の一種で、7型と10型(加水ハロイサイト)の2型が知られている。本試料では7型ハロイサイトのみが検出される。結晶度が悪く、ブロードな回析線を示す。

斜長石とカリ長石は簡易水ひを行った結果、無定位法より明瞭な回析線で検出される。このことはきわめて微細な鉱物として存在していることを示す。

EG処理定位法ではセリサイトとハロイサイトとした回析線はいずれも移動を示さず、膨潤性が認められない。また、スメクタイト鉱物は検出されない。

### 3. 3. その他

本試料は瓦焼場周辺から採取された粘土である。石英は多く含まれるが、セリサイトとハロイサイトを主要な粘土鉱物とすることから、可塑性は比較的強く、成形性は良好と思われる。セリサイトと

ハロイサイトは多元的な成因を有する粘土鉱物で、源岩は特定できない。しかし、経験的にはハロイサイトは火山碎屑物、とくに火山ガラスから変質して生成されることが多く、泥炭などの炭質物を伴う場合に多く生成されていることを付記する。

#### 四、総 摘

壱岐国分寺跡から出土した瓦2点は、いずれも斜長石・カリ長石が存在することで類似するが、その量比や鉄分の量などが異なる。一方、明治時代まで操業していた窯跡（瓦焼場）から採取された瓦および粘土と国分寺跡から出土した瓦に含まれる鉱物組成を比較検討した場合、カリ長石の有無などから胎土がことなると考えられる。明治時代まで操業していた窯跡（瓦焼場）周辺の粘土が、壱岐国分寺跡の瓦の素地として用いられた可能性は、今回の分析結果では小さい。なお、窯跡（瓦焼場）から採取された瓦および粘土は、火山碎屑物を主要構成物とし、セリサイトを多く含む点で共通しており、この粘土を素地として瓦が焼かれていたと考えられる。

以上、今回の成果をまとめたが、壱岐国分寺に用いられた瓦は膨大な量であったと想像され、今回の2試料で胎土の特徴を充分に把握得たとは言い難い。今後、瓦の編年や形態分類に基づき、多数の試料について同様の分析を行う必要がある。また、島内外で粘土・砂などの試料採取地点を増やす必要がある。

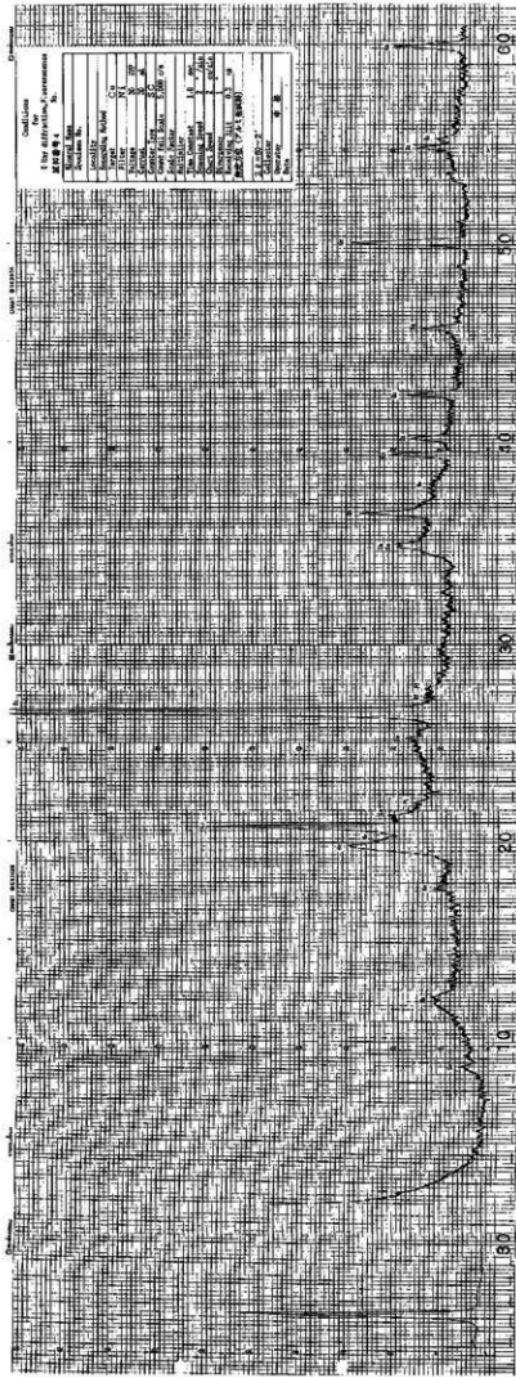


Fig. 63 瓦煙場周辺採取の粘土（試料番号4）のX線回析試験結果

# 図 版

PL. 1 TP2, TP6区



TP6 土壘堆積状況



土壘線辺敷石状況



土壘敷石状況



土壘空掘り



TP2 柱穴出土状況



TP2 遺物出土状況

PL. 2 TP8, TP9, TP10区



調査前のTP10区



TP8, 9, 10区 冠水状況



TP10区 石組造構（南より）



TP10区 石組造構（東より）



石組造構近景（南より）



石組造構近景（北より）

P.L. 3 TP29, TP31, TP32区



調査風景



TP32区 完掘状況（東より）



調査風景



TP31区 完掘状況



TP29 完掘状況（岩盤露出）

P L. 4 TP30 (SB 7)



S B 7 基礎上面（北より）



基礎北西隅附近



基礎版築状況



基礎西側



基礎北西隅附近

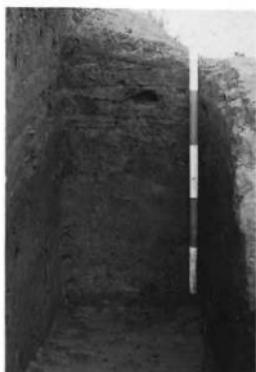


基礎北側

P.L. 5 TP30区拡張区



TP30東拡張トレンチ



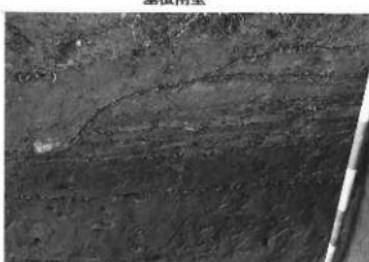
基槽東壁版築状況



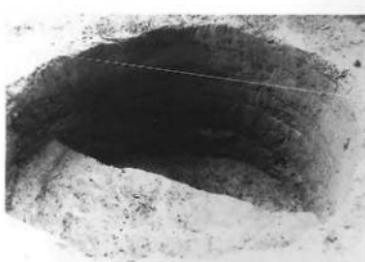
基槽南壁



TP30区南拡張トレンチ



SB7 東側基槽版築



SB7 基槽版築

P L. 6 TP33 (S B 8)



S B 8 柱穴出土状况 (当初)



S B 8 実測風景



S B 8 南西隅



S B 8 南西部部分

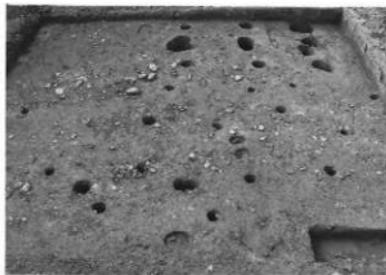


S B 8 南西隅附近遺物出土状況

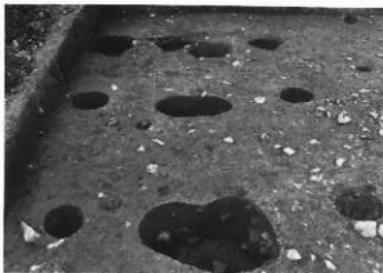


遺物出土状況

P L. 7 TP34, TP36区



TP34 (SB9) 柱穴出土状況（北より）



SB9 柱穴出土状況（東より）



SB9 柱穴出土状況（西より）



TP34区北壁



TP36区 北壁



TP36区 遺物出土状況

P L 8. T P 38, 37 区



T P 38 トレンチ南壁



T P 38 トレンチ（西より）



T P 38 S B 8 北端部（北より）



T P 38 S B 8 北端（西より）

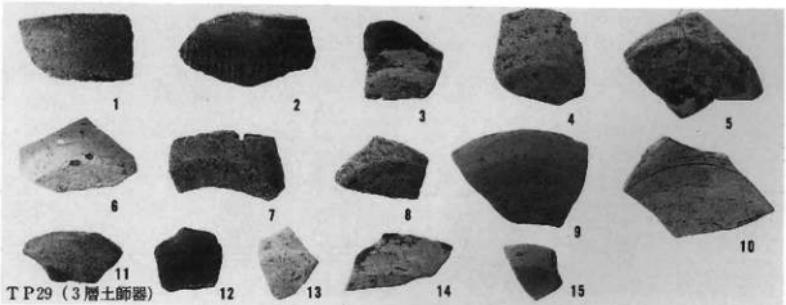
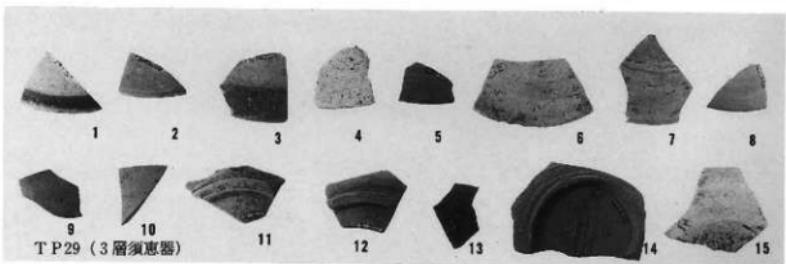
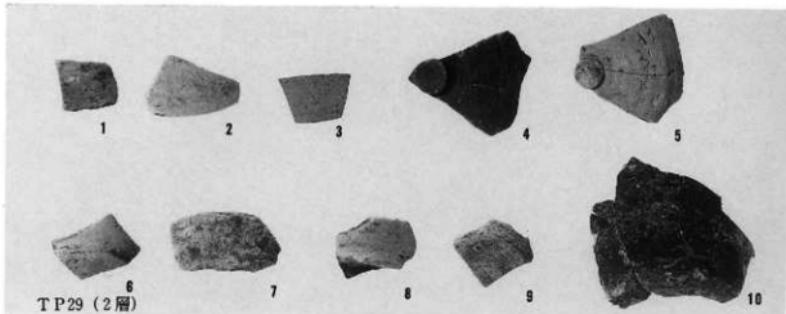
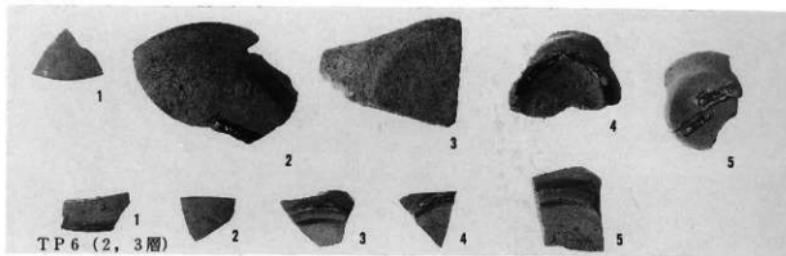


T P 37 土星石積み

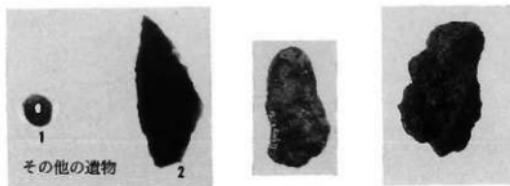
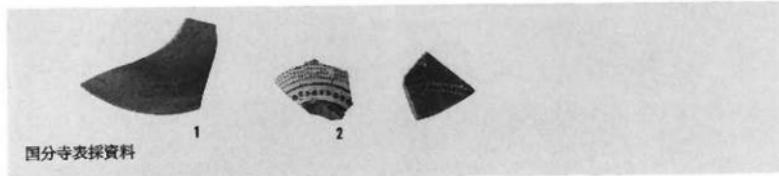
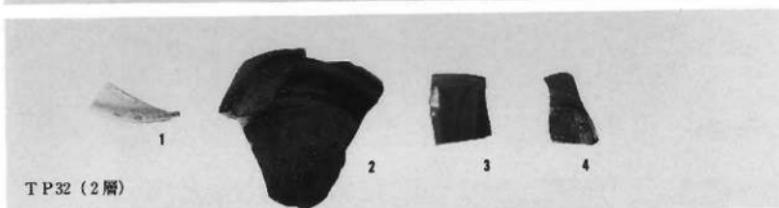
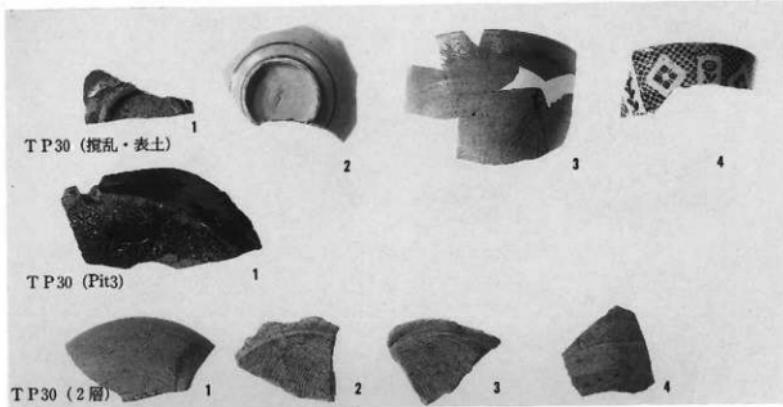
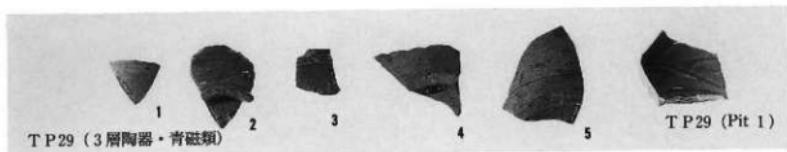


T P 37区 北壁

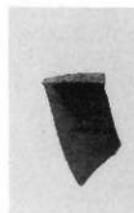
P L. 9 出土土器



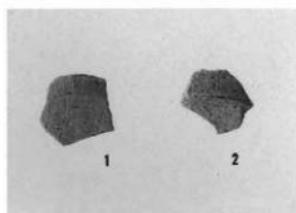
P L. 10 出土土器



P.L. 11 出土土器



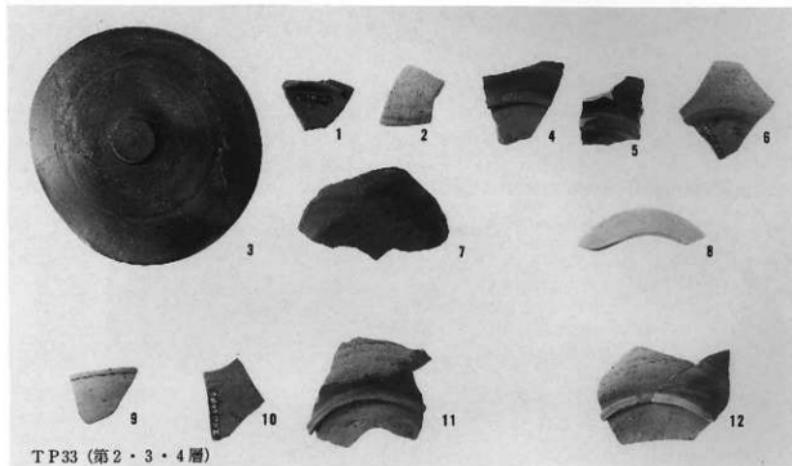
TP 33 (床道上)



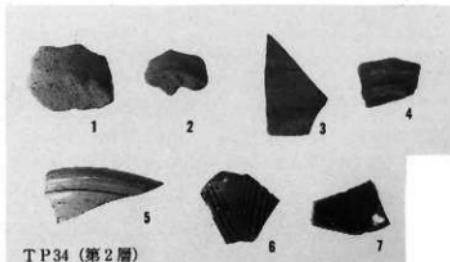
TP 33  
(柱1・柱6)



TP 33 (瓦タメ)



TP 33 (第2・3・4層)

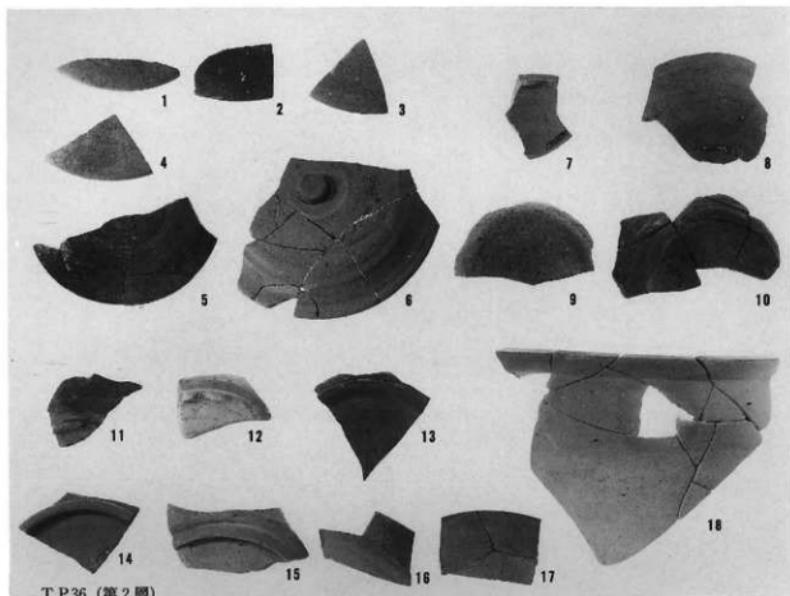


TP 34 (第2層)



TP 34 (P25・P27)

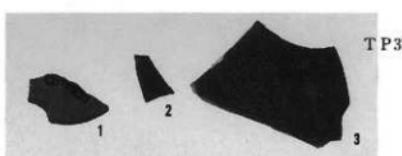
P.L. 12 出土土器・石製品



TP 36 (第2層)



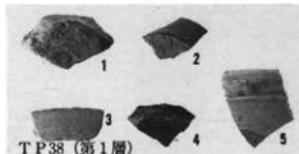
TP 36 (第2層)



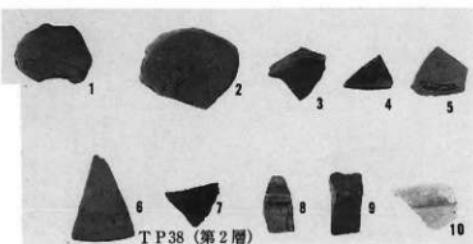
TP 37



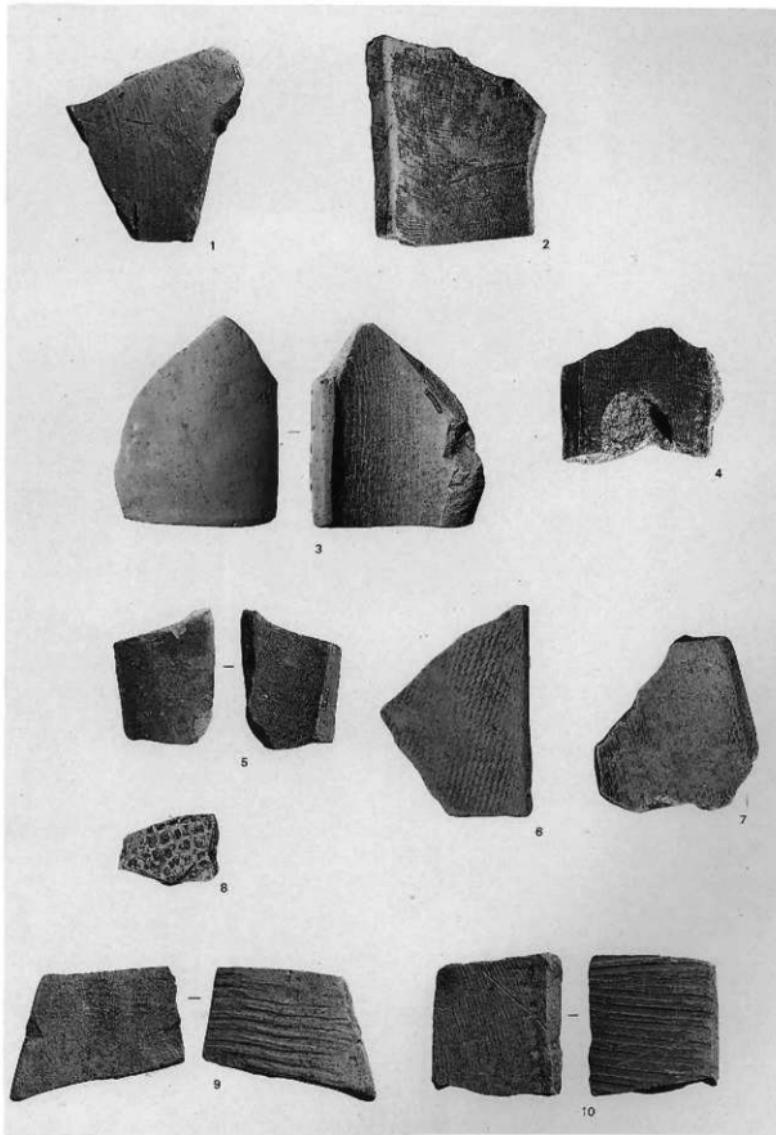
TP 38 (P 5)



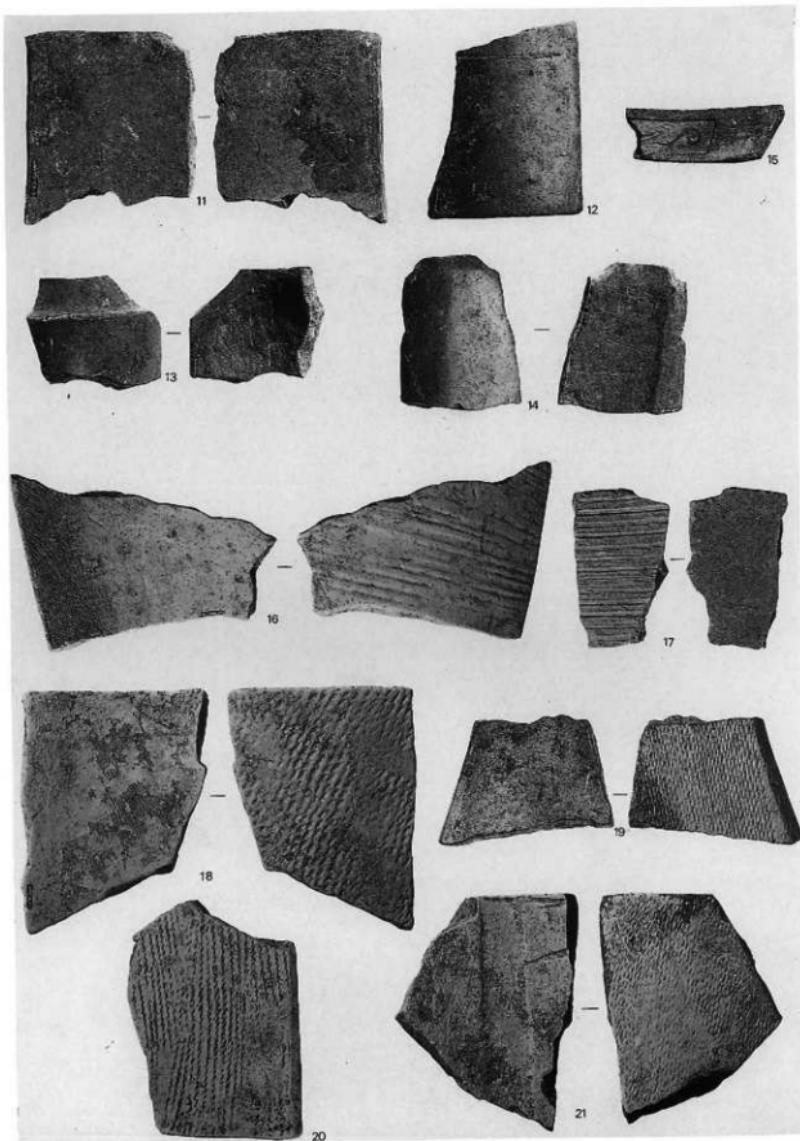
TP 38 (第1層)

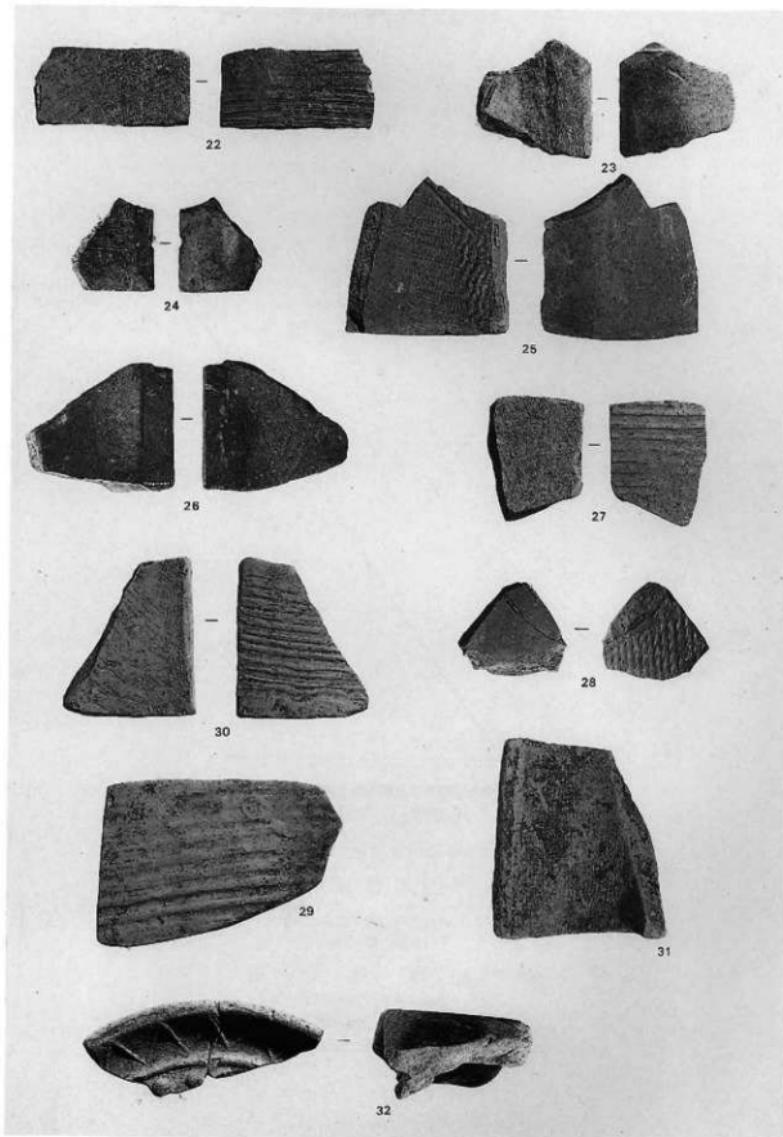


TP 38 (第2層)



P L. 14 出土瓦





長崎県芦辺町文化財調査報告書第7集  
壹岐鷲分寺II

平成5年(1993) 3月31日発行

発行者 芦辺町教育委員会

老岐郡芦辺町芦辺浦562番地  
〒811-53 ☎09204-5-1111

印刷所 昭和堂印刷  
長崎県諫早市長野町100-2  
〒854 ☎0957-22-6000